

一橋大学基督教青年会

会報第 76 号



(2024 年 12 月 7 日 YMCA 一橋ホールで開催されたクリスマス会)

2024 年12月発行

一橋大学基督教青年会 会報 第76号(2024年12月発行) 目次

| | | | | |
|---------------|---------------------------|--------|-----------|----|
| 巻頭言-韓国のキリスト教- | | 齋藤金義 | 昭46経・昭48法 | 1 |
| 寮長挨拶 | | 見定 和樹 | 社3年 | 2 |
| 追悼 | 佐藤耕一先輩に感謝して | 齋藤金義 | 昭46経・昭48法 | 3 |
| | 鈴木望君の思い出 | 西浦道明 | 昭47商 | 4 |
| | 鈴木望評議員に感謝して | 齋藤金義 | 昭46経・48法 | 4 |
| | 諸遊哲彦氏を偲んで | 佐藤周一 | 昭54法 | 5 |
| | 諸遊さんの思い出 | 中山泰吉 | 昭55社 | 6 |
| | 佐藤(富田)信子姉お別れ会 | 滝澤英一 | 昭60法 | 6 |
| | 開会の辞 | 盛岡邦夫 | 昭57商 | 7 |
| | 佐藤信子さんお別れの会での祈り | 稲永祐樹 | 昭60経 | 7 |
| | 感謝と後悔 | 中山泰吉 | 昭55社 | 8 |
| | 佐藤信子様追悼文 | 加藤 順 | 昭47社 | 8 |
| | 富田さんへのお別れの言葉 | 安井 禎 | 昭59社 | 9 |
| | 富田さんの思い出 | 峯村政孝 | 昭61社 | 11 |
| | 富田寮母さんを偲んで | 大溝日出夫 | 平1法 | 11 |
| | 富田寮母さんを偲んで | 小栗真吾 | 昭57経 | 12 |
| | 弔辞 佐藤(富田)信子さんのご逝去 | 今橋 隆 | 昭56商 | 13 |
| | お別れの言葉 | 山崎 学 | 昭60社 | 13 |
| | 富田さんの思い出 | 鈴木宗徳 | 平3社 | 14 |
| | あとがき | 滝澤英一 | 昭60法 | 14 |
| 寮生随想 | 私の構成要素 | 白川優太 | 経1年 | 15 |
| | 自分の価値観とは | 花田智紀 | 法1年 | 15 |
| | 法と宗教 | 本田和士 | 法1年 | 17 |
| | センセーション | 三浦 龍平 | SDS1年 | 18 |
| | 18世紀フランスにおける反カトリック勢力出現の要因 | 山田 圭一郎 | 経1年 | 19 |
| | 私の本棚【金史良の『天馬』を読んで】 | 金本知也 | 社2年 | 21 |
| | 『食欲の秋』なんて理想論 | 高瀬ひなた | 社3年 | 22 |
| | 信仰と法の交差点:キリスト教法思想の軌跡を探る | 高天愛 | 法2年 | 23 |
| | 良書の紹介 | 平田華英 | 法3年 | 26 |
| | バーチャルYouTuberとは? | 松尾圭祐 | 法4年 | 31 |
| | 海外だより(L S E、ロンドン) | 吉田元喜 | 経3年 | 31 |
| | 5年一貫プログラム体験記 | 樋口祐熙 | 社4年 | 32 |
| | ミュンヘン大学留学体験記 | 角颯真 | 商4年 | 36 |
| | 台湾国立政治大学留学記 | 猪股梨玖 | 法4年 | 39 |
| | トーマス・マン『魔の山』 | 北川諒 | 経4年 | 41 |
| | YMCA一橋寮に住み、山に行き、気候変動を考える | 加藤弘人 | 経修1年 | 43 |

巻 頭 言

韓国のキリスト教

理事長 齋 藤 金 義 (昭 46 経・48 法)

韓国のソウルに行くと、教会が多数あることに気が付く。韓国のクリスチャンの比率はどれくらいか、統計は少し古いものになるが、2005 年の韓国統計庁の数字では、プロテスタントが全人口の 18%、カトリックが同 11%、合計すると約 3 割がクリスチャンである。これは仏教の 22%を上回る。特に、ソウルだけで見るとこの比率は更に高まっており、ソウルでは約 4 割以上がクリスチャンとみられる。何故、韓国ではクリスチャンがこれだけメジャーとなっているか、その理由は何処にあるのか。

韓国は 14 世紀に李成桂が高麗王朝を倒し、李朝朝鮮を創設し、それが約 7 百年続いた。高麗は慶州を首都とし、仏教を奨励し、慶州には多くの仏教寺院が残されているが、その後の李朝は仏教を弾圧し、儒教を国教とした。李朝朝鮮は、鎖国政策を採用し、キリスト教をはじめ外国の宗教を徹底的に排撃した。しかし、日本が朝鮮を植民地とし、近代化を推進する過程では、キリスト教をはじめとする信教の自由が確立され、キリスト教の布教も許されるようになり、キリスト教が少しずつ広まりはじめた。特に、キリスト教は韓国独立運動の拠点となっていた。戦後の韓国初代大統領になった李承晩もクリスチャンであったから、反日独立運動家の中にはクリスチャンが多くいたと思われる。しかし、その時点でのキリスト教徒は今日ほどの多数ではなかった。戦後、クリスチャンが飛躍的に増加したのは、何と言っても朝鮮戦争における韓国全土の焦土化とその焦土化の中で、逃げ惑う民衆に食料と毛布で救済したのが、キリスト教伝道団であった。正に食べるものも着る物もなく、飢えと恐怖に晒された民衆に、言葉ではなく、食事と寝る場所を与えて布教に勤しんだ米国キリスト教の布教団であった。戦前のクリスチャンはインテリ階級、知識人中心に限られた人々であったことに対し、この朝鮮戦争時に一挙に大衆化したと言われている。しかし、動乱が収まり、韓国社会が安定化したことに伴い、キリスト教は衰退することではなく、むしろ、その後も飛躍的に信者が増加したことの理由は、何処にあるのだろうか。やはりこの点は韓国社会の欧米化、特に米国の影響を見逃すわけにはいかない。良く知られており、韓国人の留学熱は相当のものがああり、一定の経済力のある韓国人は欧米に留学し、英語を身に付け、国際機関にも多くの人が就職する。その際、多くの韓国人は欧米人の名前を名刺に記載している。ファーストネームにロイドとかマクロードとかをつける。これは日本人には見られない特異な現象である。韓国において、キリスト教がメジャーな宗教となった幾つかの要因の一つに、この欧米への傾倒があることは間違いない。このことはある意味では韓国の古来の思考方法、つまり事大主義に適っている。事大主義とはその時々主流の考え方、強い方につく考え方であるから、韓国にとっては、欧米こそが主流派である以上、主流派に属することはこの事大主義の当然の結果である。もう一つ、韓国でキリスト教が盛んであることの説明としては、次のような説明があると思われる。韓国は地政学的にみると、隣国中国とロシアに国境を接している。特に中国の隣国であることから、歴史的には中国から何度も侵略を受け、国の存亡の危機に瀕したことが幾度もあった。この歴史的な事実、韓国の人にとって、イスラエルが隣国から攻め立てられ、何度も国の存亡の危機に瀕したこととパラレルであり、そのことが韓国の人にとって、旧約聖書のイスラエルの歴史を、共感を抱いて、読むことができるという説明である。最後に、韓国の現在の教会について少し説明を加えたい。親しい友人が聖歌隊のメンバーになっている江南地区、ソッチョの駅の真ん前に、サラン教会がある。プロテスタントの教会であるが、

地下4階、地上11階、エスカレーターとエレベーターが完備されたこの巨大ビル全体を所有するこの教会の信徒数は数万人、日曜日の午前中の礼拝の出席数は数千人以上であり、100名以上のフルオーケストラ、100名以上の聖歌隊メンバー、礼拝の始まる前には巨大スクリーンをバックに、数名の歌手がKポップまがいの讃美歌を壇上でステップをしながら歌い、礼拝参加の信徒も手を振りながら立ち上がって唱和し、ステップを鳴らす、これが礼拝前の一大イベントなのである。この明るい熱狂、何と言う光景、とても老人ばかりの日本の教会の礼拝では絶対に見ることが出来ない。最初にこれを見た瞬間、韓国のキリスト教は、何かまがい物、インチキではないか、と疑ったものだ。しかし、良く考えてみると、これは極めて現代的、若者的であり、エンタメでもある。これはこれでまた、大いに良いものであるという気持ちを抱いた同時に、これだけの信徒が集まること自体、奇跡だと思う。

寮長挨拶

見定和樹（経済学部3年）

2024年度寮長を務めます経済学部3年の見定和樹と申します。ここでは今年度の寮の在り方や状況、私が寮長として目指す姿について報告させていただきます。

今年度の男子寮は新歓が成功し、1年生が5名入寮しました。そのため、現在は1年生が5名、2年生が2名、3年生が2名、4年生が6名、修士1年が1名の計16名で寮全室が埋まった状態でのスタートとなりました。去年の新歓で1年生がひとりも入らず、寮に住んで2年目の代が1名もいないため、中途入寮や、5年間住む人などがおり、かなり変則的な構成となっております。

女子寮では、中途入寮者が1名おり、4名でのスタートとなりましたが、その後1名がアフリカでのボランティア活動参加のため、休寮となり、現在3名です。以上のメンバーで聖書研究会をはじめとした寮の行事に参加しています。

聖書研究では、今年もホール班(出エジプト記)、食堂班(ヨハネによる福音書)に分かれて行っております。今年度も引き続き、ホール班の方ではチューターをしてくださっている野崎先生の娘さんや、そのご友人がゲストとして参加してくださり、食堂班の方でも寮生が知り合いを招待するなど、寮外の方との交流は年々活発になってきているように感じます。

今年度寮長を務めていくにあたり、スローガンを作成しました。

「義理と人情」

これは他者に対して、引いては寮生活、寮運営に対して損得勘定で動くのではなく、思いやりを持った行動を寮生一人一人が出来るようになるという意味で作成しました。例えば、共用スペースにゴミが落ちていたら自分が出したものでなくても、捨ててあげるなど、思いやりを持った行動が一人一人できるようになればより一層この寮は良い方向に行くと思ったからです。

また、私自身寮長になるにあたって自分に課していることが二つあります。

- なるべく寮生全員と話す
- 寮長として寮へのネガティブな発言はしない

「なるべく寮生全員と話すこと」では、寮生の現在の状態を知るとともに、寮生が気軽に話せる人になれば良いなという思いで心掛けています。

「寮長として寮へのネガティブな発言はしない」では、寮のネガキャンをすることで寮生の寮に対する愛着をそぐようなことはしないように意識しています。改善案を持ったうえで、寮の良くないところを指摘することなどの健全な批判は重要ですが、無意味に寮を批判するようなことはないように心掛けています。また、完璧にできているわけではありませんが、自分の発言で相手がどうそれを受け取るのか考えたうえで発言しています。

以上、大それたことを書き連ねましたが、私自身まだまだ未熟者であり、至らないところはたくさんあります。そこにしっかりと目を向け、自らを変え、寮生のみんなが寮に少しでも愛着を持ってもらえるような寮づくりを引き続き頑張っていきます。

佐藤耕一先輩に感謝して

齋藤金義(昭46経・48法)

佐藤耕一先輩のことは、以前、昭和54年当時、現在のYMCA一橋寮を再建する際、資金が不足し、土地を約100坪売却せざるを得ない時、東南の角地50坪を購入された方であることを、加藤理事から聞いており、お名前は以前から伺ってありました。

初めてお会いしたのは、瀧浦満先輩が転倒されて芦屋の病院に入院されたとき、昔のメールを検索したら2014年の3月に、堀地先輩とご一緒に、瀧浦夫人の雅子様、それと佐藤先輩とご一緒に、病院にお見舞いに伺ったとき、はじめてお目にかかりました。その時、瀧浦さんの思い出話などを佐藤先輩から伺いましたが、瀧浦さんは昭和40年のご卒業で、佐藤先輩は昭和37年のご卒業ですから、ご卒業年次は佐藤先輩が3年ほど上級生のように思えますが、瀧浦さんは大学に3年か4年ほど長くおられたので、佐藤先輩とはほぼ同期生かと思われます。佐藤先輩の結婚式の披露宴の司会は瀧浦さんがなさったとも伺いました。その瀧浦満さんはお見舞いに行った年の2014年の7月14日に昇天されました。なんともう10年前になります。

その後、亡くなられて暫くして、瀧浦先輩のお墓参りをしたいと思って、奥様の瀧浦雅子様にお話しをし、お墓参りに行くことになった際、佐藤先輩のことを思い出し、佐藤先輩にもお声がけし、ご一緒にお墓参りに行きました。それは雅子夫人、佐藤様と一緒に写真が残っており、それで確認したところ、2020年、コロナ真っ最中の9月でした。お墓参りの後、女子寮をどうするか、悩んでいた私は、思い切って、寮舎の東南の角にある佐藤先輩の戸建ての建物を、女子寮としてお借りできないか、率直にお願いしたところ、佐藤先輩からは直ちに「結構ですよ」とのご快諾を頂きました。但し、現在人様にお貸ししており、その方が退去された場合にお貸しできるとのことで、その後、国分寺の興和不動産さんを通じて、このことを相談し、お貸している方がご退去された段階で、当会が女子寮としてお借りすることになりました。お借り頂ける際には、当会としては女子寮が何人入寮するか未知数であったことから、入寮する女子寮が少ない場合はお家賃をお安くして頂き、5人で満室の場合は、どうにか一般にお貸しする程度のお家賃にして頂きたいとの誠に勝手な願いを一方的にさせて頂いたにも拘らず、二つ返事で「結構ですよ」とご快諾頂き、このことは感謝してもしきれないほど、当会にとっては有難いことでした。現在、女子寮を運営開始し、丸2年が経過しましたが、5人定員が未だに3人にとどまっており、大変なご無理をお願いしていること、誠に申し訳ない次第です。

今年の2月上旬に御長女の丸澤良子様からお電話を頂戴し、佐藤先輩はコロナによる肺炎とそれまでの持病である間質性肺炎が重なり、2月6日にご帰天されたとの訃報に接しました。誠に、残念です。

佐藤先輩は、ご卒業後、日本板硝子でご活躍されたと伺っております。ご家庭は、お子様は4人おられ、皆様、ご立派にご活躍と伺っております。今般、佐藤先輩がお亡くなりになられたあと、女子寮の建物に関して、引き続き、佐藤先輩のご遺志に従い、御長女丸澤良子様やその弟様佐藤達郎様と引き続きお借りする件でご相談をさせて頂き、今後もしばらくの期間、女子寮としてお借りすることのお約束を頂き、大変有難いこと、感謝する次第です。勿論、今後長期間にわたり継続してお借りすることはできないことは当然のことであり、幸いなことに男子寮の西側に、アパートが建設されることもあって、女子寮はそちらに移転することを考えております。

最後に、佐藤先輩のクリスチャンとしての生き方について触れてみたいと思います。先輩とキリスト教信仰について、直接語り合ったことはありませんでしたが、先輩がアングリカンチャーチ、英国国教会の信徒で、芦屋聖マルコ教会の会員であられたことは存じ上げていました。というのも、2017年に、佐藤先輩ら5名の芦屋聖マルコ教会の有志の方が、ローワン・ウィリアムズ氏の著作、「信頼のしるし」という翻訳本をご恵贈くださったからです。この本を全部は読めてはいないのですが、ローワン・ウィリアムズ氏は第104代カンタベリー大司教であり、英国国教会のリーダーです。この翻訳は佐藤先輩はじめ5名の方の共同訳ですが、この翻訳の前にも、何冊かの翻訳本を芦屋聖マルコ教会の翻訳グループの方が手掛けていたそうで、その意味では佐藤先輩は教会の一信徒以上のお働きをされていたことが伺い知ることが出来ます。「私たちの社会は信頼を欠いている危機に直面している」、というこの著作の最初にかかれています。佐藤先輩は教会の働き、神様を信ずる信仰をどうして、「社会に信頼を齎すこと」をいつもお考えになっておられたのではないかと、思っております。これまでの当会への佐藤耕一先輩の多大なるご貢献に深く感謝し、私の追悼の言葉とさせて頂きます。

鈴木望君の思い出

西浦道明(昭 47 商)

鈴木望君、あなたと初めて会ったのは、1968 年の 4 月でしたね。まったくの偶然ですが、あなたの生年月日は 1949 年 4 月 20 日、私の生年月日は 1949 年 4 月 21 日という 1 日違いでしたね。あなたが 1 日お兄さんでした。ちなみに、1 学年上の齋藤金義理事長は、生年月日が 1948 年 4 月 22 日でした。12 人しかいない YMCA 一橋寮で、とんでもない偶然でした。とても懐かしく思い出されます。大学 1 年生のとき、あなたが紀伊國屋書店で本を買っているとき、吉永小百合さんがすぐ横にいたと、夕食のときに聞きました。私は嫉妬に燃えました。私は中学 1 年のとき、学校で上映した「キューポラのある街」という映画を観てから、吉永小百合さんの大のファンになっていたからです。今ではファンではなくなりましたが、こんなことをずっと憶えていて、今頃、思い出しています。

あなたはマルサスの「人口の原理」に大変興味があり、大学 1 年生のとき、人口と食料問題について、一橋寮でよく語っていましたね。今では、技術革新や農業生産性の飛躍的向上によって、マルサスが想定した食糧供給の限界が克服されたように思います。しかし、相変わらず、今世紀末には 5,000 万にまで減少していく人口問題は、日本にとって極めて大きな課題です。

また、あなたは、静岡県磐田市の市長になるんだと、大学 1 年生の頃から言っていました。「大きな夢を言う男だなあ」と、あなたのホラには驚きましたが、結果的に、市長に止まらず、衆議院議員も務めました。あなたは、若い頃から抱いていた政治家になるという夢を、見事に実現させました。

あなたの、誰からも好かれる、素直で優しいお人柄がそうさせたのだと思います。そうした意味では、あなたは、人生を 75 歳で終えましたが、素晴らしく充実したものだったに違いないと、磐田市や浜松市では、市民の皆さんの記憶にいつまでも残るに違いないと、心の底から羨ましく思っています。

(アタックスグループ代表パートナー)

鈴木望評議員に感謝して

齋藤金義(昭 46 経、48 法)

鈴木望さんは 1968 年に、私より 1 年後輩として、加藤順、千保喜久夫、西浦道明各氏の 3 人と一緒に、YMCA 一橋寮に入寮され、それ以来 56 年の間、お付き合いさせて頂きました。と言っても、お互い、海外赴任があり、仕事も異なり、殆ど現役時代は親しく交わることはありませんでしたが、年賀状は欠かせず、時には私が当時の厚生労働省に伺って、アドバイスを受けていました。当時の寮生時代は、私の学年は 4 人、1 年下の鈴木さんの年次は 4 人と、昭和 42 年、昭和 43 年入寮組が総勢 12 名中の 8 名と一大勢力を形成していました。鈴木さんは、どちらかと言えば、入寮当時は未だ高校生らしさが抜けきらない朴訥で素直な学生で、貫禄のあった加藤さんやバイタリティ溢れていた西浦さんと比較すると、あどけなさが残っていました。学生の頃から、将来、何になるかという問題に対して、「僕は齋藤さんみたいにサラリーマンになっても部長までなる自信がない。齋藤さんは役員になれるかはわからないが大企業の部長くらいにはなれそうな気がするけれど、僕はサラリーマンには向いていない」と話されていたことを覚えています。私が褒められたかのかどうかは兎に角、自分は普通のサラリーマンには向いていないことはご自身で自覚されていたようです。多分、その理由は、鈴木さんが極めて正直で、浮世の世渡りに関して、器用に立ち回れないという意識を持っておられたのだと思います。従って、社会学部に所属しながら、ゼミは法学部行政法の市原昌三郎先生のゼミに入り、早くから行政官を目指していました。卒業は公務員上級職試験を受けるため、1 年遅れて昭和 48 年に卒業されましたが、当時、昭和 48 年卒業組は東大入試がなかった世代で、外交官になった岩谷さ

んや裁判官になった市村さんらの秀才がいて、彼らと一緒に切磋琢磨し、上級職試験を目指され、見事厚生労働省に入省され、その後、サンパウロ領事や本省課長を歴任され、故郷磐田市の市長になられました。平成 21 年 5 月、市長を退かれてから出版された「市長室の窓から」というご著書を拝見すると、鈴木さんが市長在任中、何を大事にされていかが記述されています。市長在任から 11 年後に市長を退任されましたが、その理由は「権不 10 年」といい言葉を大切にされ、その信念に基づいての退任であったことが分かります。「権不 10 年」はもと「権腐 10 年」と記載し、どんな立派な人も、長年いれば必ず腐敗する、という朝鮮半島に伝わる言葉とのこと、その言葉に忠実に従ったとのこと、磐田市政の中心課題は市町村合併が主たる課題、その中で多くの市町村合併を成功に導き、多くの市民から惜しまれながら、退任されたとのこと。だからこそ、磐田市長退任後、衆議院議員候補に担がれ、当選し、国会議員として活躍されたのだと思います。市長職を務めるにあたり、鈴木さんがモットーとしてことは、「誠実、まじめ、クリーン」であることを、このご著書の中で憚りなく語っています。その語りの根底には、カトリック信者として、幼い頃から教会で養われた聖書、キリスト教の教えが鈴木さんの人柄、人格形成に深く影響していたことは間違いありません。彼が誠実、まじめ、クリーンというとき、それは掛け値なしのそのままであることこそ、鈴木望さんの魅力であったと確信します。鈴木さんは、当会評議員として、当会のために尽力され、昨年暮れには今年は病気を克服し、評議員として、また個人的にも、一緒に酒を飲み、交遊を深めたいと希望を強く述べておられました。私も鈴木さんのご回復を確信し、今年の暮れは西浦さん、加藤さんらと一緒に忘年会を楽しみにしていたのですが、持病である前立腺がんは治癒していたにも拘わらず、脳出血で享年 75 歳で帰天されたことは、本当に悲しく、残念なことでした。ここに鈴木望兄の当会に対するご貢献と同じ寮生活を共にした友人として、心からの哀悼の意を表したいと存じます。

諸遊哲彦氏を偲んで

佐藤周一(昭 54 法)

諸遊さんの訃報から約二カ月経ちますが、いまだに実感がありません。入寮は彼の方が一年先ですが、年齢が同じで卒業が同年となったこともあり、親しみを込めて、以下、諸さんと呼びさせて下さい。

思えば、丁度一年前の今頃(令和 5 年 11 月 18 日)、YMCA 一橋読書会で『朗読者』(ベルンハルト・シュリンク著)を採り上げたところ、諸さんが本作に対するドイツ文学界の様々な意見を詳細なレジュメに纏めていただき、意見交換の際、大いに議論に厚みを加えることが出来ました。ミーハーな私が、どちらかと云うと本作の映画化『愛を読む人』(ヒロインのケイト・ウィンスレットがアカデミー主演女優賞を獲得したことで話題となった)の映像イメージに引き摺られそうになるところ、冷静に原作の文学作品としての評価をして頂き、ナチス犯罪に対する作者の微妙な立ち位置など、チューター役の私が初めて知られることも多く、諸さんの博覧強記ぶりが遺憾なく発揮された読書会でした。

しかし、約半世紀前にタイムスリップするならば、当時の諸さんに「読書家」というイメージは失礼ながらありません。勿論、コツコツと努力するタイプではありましたが、無骨な剣道部員、酒好きで呑むと途端にハイテンションになる、「泣いた赤鬼」みたいに情に篤い熱血漢といった印象が強く残ります。麻雀もよくやりましたが、寮内では真野さんや内藤さんら強豪の餌食でしたかね。当時流行っていた漫画『嗚呼、花の応援団』の主人公の真似をして「クエツ、クエツ、クエーッ」と叫んで下ネタを連発していた姿も蘇ります。おおーっと、これでは諸さんを貶めることになりますので、元に戻ります。

卒業後は永らく疎遠でしたが、私が還暦で法テラスを定年退職後、登山ガイドとして東京の実家を拠点に活動を始めると共に、これまで不義理を続けた一橋 Y にも御奉公を・・・と理事に就任する一方、月に 1 回、寮生との懇親会を企画するようになりました。宮岡先輩や加藤先輩も加わって頂いたほか、諸さんにも声掛けし、自宅が近いことからコロナ前は何度も参加して貰いました。アルコールが進むと机をバンバン叩きながら「なあー聞いてくれよお」と長々と話し始めるのは、半世紀前と全く変わらぬ姿でしたね。後輩たちに対する熱い思いや、一橋 Y の行く末を案じる気持ちなど、私以上に強いものがあると感じ、理事職の後任は勿論のこと、YMCA 読書会も牽引して貰えたら・・・と淡い期待を抱いたのも束の間、今年初めには「臍臓ガンステージⅣ」

であることを自ら明かされます。

3 月の読書会は諸さんがチューター役を務め、ショーペンハウエルの『読書について』を読みました。既に黄疸が出ており厳しい状態なのだと実感させられました。今後は治療に専念するので、今回が最後と言われた時は、今日が諸さんとの今生の別れになってしまうのかと万感、胸が詰まりました。

しかし 5 月に元寮母の富田さんを偲ぶ会が開かれた翌日、会の幹事を務めてくれた盛岡さんの手配で諸さん・私・中山君の 4 人で食事する機会があり、この時の諸さんは顔の色艶も良く元気そうでしたので「もう治ったのか」と喜びましたが、実際は抗ガン剤治療を止めたために一時的に元気を回復したに過ぎず、結局これが彼との最後の機会となりました。数年前に肺癌を患った際に、死生観が変わったとの話もしていましたが、淡々と天命を受け入れて召天される日を待つとも言われてました。キリスト者としても「アップレな人生」ではなかったのでしょうか。生原さんや藤本さんとはもう会いましたか。私もいずれ追いかけますので、またそちらで酒を存分に酌み交わしましょう。安らかにお休み下さい。

諸遊さんの思い出

中山 泰吉(昭 55 社)

旧寮は食堂とホールが一体でガラスはめ込みのスライドドアで区切るようになっていた。普段はドアを閉めないで一体のことが多かった。ホールは吹き抜けで物音や話し声が 2 階にも聞こえていた。夜中に話し声が聞こえたりすると、三々五々集まってたわいもない話に興じていた。お陰でほとんどホームシックにもならず学生生活を送ることができた。中でも記憶に残っているのは麻雀のシーンで、なぜか生原さん、諸遊さん、山崎さん、野上さんが卓を囲んでいる様子が思い浮かぶ。面子が固定しているわけなので他の場面を思い浮かべてもいいはずなのに、なぜかその 4 人が記憶によみがえってくる。生原さんが「もおろ〜・・・」とつつこみ、諸遊さんがにこやかに笑いながら「いやぁー(それはー)・・・」と穏やかに返していた。諸遊さんはいつもにこやかだった。何か真面目な議論をするときも照れ隠しのように笑顔を浮かべてしゃべっていた。温厚、温和、柔和、控えめ、謙虚といった形容詞がぴったりで愛すべき人柄。剣道で腕力をつけるための特太の木刀(3kg? 4kg?) ゆっくりと回していた。卒論は自分独自の論を展開するのではなく、ある経済学書を翻訳することにされた。こっちの方が手っ取り早いとおっしゃっていたが、実際やってみるとなかなか手強かったらしく(結構分厚い専門書だった)、間に合わないから手伝ってくれと頼まれた。諸遊さんが下書きしたものを清書するというものだったが。それも途中「・・・」のところもあったりして本当に切羽詰まっている感じがうかがえた。卒業後 7~8 年たったころだろうか、勤務していた熊本高校に見えられた。高卒生のリクルートで熊本に来たのでついでに寄ったということだった。去年盛岡兄の音頭で新寮当初の寮生の集まりがあったときに 30 数年ぶりにお会いできたのは、それ以来のことだった。そして今年富田寮母様のお別れの会で再会。病が進行しているとの話を聞いていたし、小生もヘルニアで杖が手放せなくなり、また視力もかなり落ちて(車の運転もできないくらい。緑・白内障手術を受けたばかり。)おり終活に入っているところで、お会いするのものが最後だろうと腹をくくり、盛岡兄のお手を煩わせて佐藤さんも加えた 4 人で、お別れの会翌日に会食の機会を設けてもらった。自分では最後の晩餐のつもりだったが、本当に最後になってしまった。お会いできて本当によかった。昔と変わらず穏やかなお人柄だった。ご冥福をお祈りします。

佐藤(富田)信子姉お別れ会

滝澤英一(昭 60 法)編

2024 年 5 月 25 日土曜日、新宿の小田急ホテルセンチュリーサザンタワーにおいて、配偶者である佐藤弘泰様主催により、佐藤(寮母時代は富田)信子元寮母(以下富田姉と呼ばさせていただきます)のお別れの会が開催されました。当日は、齋藤理事長、加藤理事にご臨席いただきました。また、上海、熊本、神戸、名古屋を始めとする国内外から、当時お世話になった元寮生が集まりました。受付等お手伝いいただいた現役生の猪俣兄と合わせ 31 名の会になりました。

当日は、盛岡兄からの趣旨説明をいただいたのち、讃美歌 298 番(安かれわが心よ)斉唱、主催者である佐藤様、理事長からのご挨拶をいただき、稲永兄のお祈りをいただいて開始しました。

当日ご挨拶やお祈りをいただいた皆さんから、できる範囲で原稿を集め編集しました。(実際には、盛岡兄と鈴木兄のご苦勞によるものです)。

会報に掲載して、体調不良や日程調整が取れず不参加となった元寮生と、富田姉の思い出を共有したいと思います。また、寮母としての富田姉と接点の無い会員にも、富田姉というキリスト教信徒がどんな人であったか、1970年代末から90年代初の寮がどんなであったか、読み取っていただき、何かの参考になればと思います。

なお、寄稿文の順番は当日のスピーチ順です。今橋兄、山崎兄は、海外におられて当日は出席が叶わないところ、追悼文を寄せていただき、当日は会場で代読させていただきました。寄稿文はありませんが、当日は、下荒神武兄(1983年卒)、中田一朗兄(1990年卒)からも、温かく心のこもったお別れの言葉をいただきました。最後の鈴木兄の文章は、今回の編集に合わせて寄稿いただいたものです。

開会の辞

盛岡邦夫(昭 57 商)

本日は、私たちが一橋大学 YMCA 寮で大変お世話になった、亡き佐藤信子さん、旧姓富田さんのために、このように多くの旧寮生が集うことが出来、そして世代を超えて富田さんの冥福を祈念する機会を設けていただいた、ご主人様である佐藤弘泰さんに感謝の言葉を申し上げたいと思います。ありがとうございます。ちなみに、今夜は、遠くは中国の上海から、国内では九州熊本、神戸、名古屋から駆けつけて頂いている方がおられます。卒業以来、初めて顔を合わせる方々もおられると思います。富田さんを媒介にして、旧交が温められることこそ、富田さんが言われる「神のみ心」にそったものだと思います。

亡き、富田さんとは、YMCA 寮での夕食作り及び聖書研究会参加のみならず、特に私の在学した70年台末から80年台初期は、男子校に近い大学に通うなかで、家族から離れて暮らす私たちにとっては、良きお母さん、良きお姉さんという感じでした。

実際、「親しい中にも礼儀有り」という、格言など、忘れ去られ、いつも、話の落ちは、富田さんの「あなた達、ねー。」というきつい言葉で終わっていたことが多かったと思い出されます。いつも、私たちの様な考えが足りない者たちの質問にも、逐一真剣に答えて頂いていた富田さんの目と口調、その声は今でも鮮明に思い出されます。

富田さんが当時のご主人のお父様お母様の介護のために寮母を辞められ、その後、当時のご主人を病気で失われ、とても落ち込まれているとお聞きした時、私は居ても立っても居られなくなり、今から 20 年程前の 2001 年 1 月に私の前後の年代に声を掛けて、「富田さんを励ます会」を催しました。それ以来、これまで、名称は励ます会から、「富田さんを囲む会」へ変遷がありますが、1 年に一度くらい会合を開く様になり、コロナ前の数回は、荻窪の佐藤様のお宅にお邪魔して、昔の思い出話に花を咲かせていました。

ちなみに私たちの代は新しい寮が完成した1979年から1986年までの8年間の仲間ですが、多士済々で、大学卒業後、第二の人生を歩んで、神父となった者1名、医師となったものが3名、金融事件で世間をにぎわせ、その後、行方知らずになった者もいます。

私の思い出話はこの辺りで終わりにして、ここにお別れ会を開式致します。

どうぞ、今夜のお別れの会で、皆で富田さんのご冥福をお祈りすると共に、富田さんがご自分の子供の様に、愛してやまなかった寮生の新たな親睦を深めることが出来れば、富田さんはきっと喜ばれることでしょう。今夜の会を開催された佐藤弘泰様のお気持ちに沿ったものだと思います。

以上、開式の辞とさせていただきます。

佐藤信子さんお別れの会での祈り

稲永祐樹(昭 60 経)

天の父なる神様

あなたは、佐藤さんご主人様を通してこのような機会を与えて下さり、佐藤信子さんのお別れの会に私達を集めて下さいまして感謝します。

佐藤信子さんは、長年に亘り、YMCA 一橋寮の寮母として尊いご奉仕をして下さいました。

そのご奉仕を通して、クリスチャンの信仰を証しされ、私達は佐藤信子さんを通して喜びが与えられておりま

したことを、心から感謝します。

今日のこの会を最後まで守り、私達が良い交わりを持つことが出来ますように、お祈りします。

また佐藤さんご主人様のご健康がこれからも守られますように。

現寮生の生活の上にあなたの祝福をお与え下さい。特に毎週の聖書研究会の活動が大いに祝され、寮生があなたのことを知る良い機会となりますように。

イエスキリストの御名によって祈ります。

感謝と後悔

中山泰吉(昭 55 社)

2 年生秋に寮建て替えのため西に下宿し、3 年生秋、新寮に戻った。4 年生のとき富田寮母様が「着任」(ピンチヒッターとして一時的にと説得されたのではなかったか)された。4 年生で旧寮の経験者は小生だけだったので、旧寮では毎食ごとかかった費用を頭割りして代金を徴収していたとお伝えした。そうやっていたのでそれが当たり前だと何の疑いも持っていなかった。

しかし考えてみると、毎回毎回計算するのは実に煩雑ではないのか。余った食材を翌日に持ち越したらどうなる。毎回使い切らなければならないのか。欠食の日は除いて各人の月の食費を計算しなければならない。そんな面倒なら私辞めます、となって当然なことを臆面もなく、能天気をお願いした。どんなに大変なことかこれっぽっちも思い至らなかった。今にして思えばバカだった。

片道 2 時間半かけて通っていると聞いた気がする。今考えれば聞き違いか勘違いだろうと思う。いくら何でも 2 時間半は長すぎる。自分だったら絶対できない。しない。1 時間半というのを聞き間違えたのだろう、と今自信がない。聖研の日は帰宅は 12 時頃になるではないか。

熊本地震を経験して当たり前の日常がいかにもありがたいものか身に染みた。「普通」がいかにもありがたいものか。普段「当たり前のこと」に感謝したりしないが実はとてつもなくありがたい(有難い)ものなのだ。

当時富田寮母様の存在がいかにも「ありがたい」かわからなかった。しかし今ならわかる。「お別れの会」が当時を思い起こさせ、実感させてくれた。当時は未熟だった。人の苦労や気持ちに思いを致すことができなかった。バカだった。

苦い後悔を感じつつ感謝の気持ちを捧げます。安らかに。

(追)卒業時に、生徒たちに英語の楽しさ、特に英詩の素晴らしさを教えてくださいと言われた。残念ながら詩はたまに掲載されることはあっても授業で取り上げることはなかった。入試に出ないし試験範囲を終わらせなければならず余裕がなかった。申し訳ない。

佐藤信子様追悼文

加藤 順(昭 47 社)

今般、偲ぶ会を設けていただき感謝です。盛岡さんのお声がけに御礼申し上げます。会が盛会でありましたことは素晴らしいことでした。佐藤(富田)信子元寮母さんの真剣なお仕事ぶり、皆様との交流が偲ばれるひとときでした。

自分は牛込弘方町教会の会員として毎週佐藤さんとは接しておりましたが、いつもご挨拶するくらいのお付き合いしかありませんでした。皆様の方が遥かに長く、生活面で深くく接することが多く、エピソードが豊富であったはず。しかし、YM の寮母役をお願いしたというのが最大のご縁だったのです。

2 月 10 日ご逝去の報を伺ったのが翌日 11 日でしたが、全くの驚きでした。実は 2019 年の 5 月に富士霊園での墓前礼拝に参加された後、全くお目にかかる機会が無かったのです。お身体の具合悪く礼拝に出られないことは伺っておりました。新型コロナの流行により教会の礼拝も変形の形であり、自分自身も毎週参加出来ないこともあり、自分のことで手一杯でした。五年間に信子さんに何が起きていたか全く知らないまま、ようやく今年から正常な教会活動も再開されたのが実態でした。新年度に向けて新しい教会のあり方を考えていた矢先に信子さんの訃報が入ったのには驚きでした。

信子さんは 1943 年に斎藤家に誕生され、クリスチャンのご両親に育てられ、ご両親が会員であった牛込弘方町教会において信仰を育まれました。1961 年のクリスマスに加藤常昭牧師から洗礼を受けたのです。牛

込払方町教会は 145 年前から続いている教会で、斎藤家は信子さんのお祖父様の代から会員だったので。教会では若夫人の会、カタツムリの会の役員、また執事として長く奉仕された教会員でした。陵北病院で脳梗塞の療養を続けておられたことを伺い、回復される事を祈っていた矢先の出来事でした。ご遺族のご希望で、2 月 13 日のご出棺に山ノ下恭二牧師と教会員が立ち合わせました。

2 月 18 日の礼拝で信子さんを偲ぶ祈りの会を行いました。愛唱讃美歌 139、518(1955 年版)と聖句を読み、親友、堀澄子さんのお話と教会員の祈りを致しましたことをご報告申し上げます。教会員としては婦人会としてしか交流が無いのが普通ですが、信子さんとは YMCA 一橋寮の寮母役をお願いして 15 年以上のお勤めを頂く特別なご縁があったことになります。

お願いする時に、半年で良いからお願いしたいということでお引き受けいただいたのです。その後信子さんから何度もこんなに長くするなんて、加藤さんに騙されたとお叱りを受け続けておりました。

実は教会では教会外の活動をお願いすることは意外にデリケートなことです。当時牧師だった松永先生は ICU の OB でその大学寮が寮母制をやめようとした時期でしたから、否定的な助言を信子さんにされたのです。それを乗り越えてお引き受けいただいたのです。自分は 1 年ならともかく、10 年以上も言われ続けたので、これは、信子さんは寮母のお仕事がしんどいということはあるでしょうが、喜びもあったに違いないと聞き流す事にいたしました。

退任された後も盛岡さんのご配慮で多くの卒業生が囲む会をされたことはお願いした者として感謝に絶えません。御礼申し上げます。寮母を中心に OB の絆を持っていたことは一橋 Y の伝統であり、その中心が会の存続の柱であります。ここにおられる斎藤理事長も自分も信子さんの前の寮母であった松本和子さんの恩義に応えたいと今も YM の運営に関わり続けています。

聖書ローマ人への手紙の大きなテーマは神の義ということです。学生時代はこの義ということが理解できなかったために信仰に至りませんでした。しかし、日本人としてこれを恩義という言葉に置き換えた時に、聖書に書かれた義という事に親しみを持てるようになりました。皆様も一食一飯の恩という言葉はご存知だと思います。実はこれは渡世人の言葉だそうです。しかし、昔の武士が最も大切にしていたのがこの義という言葉でありました。多くの明治の信仰者が武士であったことを思い起こします。この武士道精神が今の日本に消えてしまったことが多くの問題を政治や社会生活の問題の原点になっていると思う今日この頃です。「信仰による義人は生きる」とは、信仰によって導かれ、進むべき方向が示されることを意味します。神への信頼と心からの愛によって、また神がその子供たちに明らかにされた、きわめて貴い知恵によって行動するのです。今の日本に敗戦後に欠けてしまったのが、義という概念です。神の義と日本人が持つ恩義とは違うことだが、根は同じだと思い、これを皆様が持ち続けこうした偲ぶ会にお集まりいただいた事を感じます。後輩たちの心意気です。今まで会の運営に関わってきましたが、佐藤信子さん時代の寮生にバトンタッチしつつあります。皆様の社会におけるご発展を天の佐藤信子様と共に祈っております。

富田さんへのお別れの言葉

安井 禎(昭 59 社)

名古屋から参りました1980年入学の安井です。

本日はこのような会を設けていただきましたこと、佐藤様並びに幹事の労をお取り頂いた盛岡さんに心より感謝申し上げます。

さて、1980年大学に入学し YMCA 寮に入寮した当時、親の干渉から離れて自由気ままな暮らしができるというワクワクする期待感が大きかったのを覚えています。とはいえ、それまで親元を離れて生活したことのない世間知らずの18歳ですから、不安な気持ちがあったのも事実です。そんな私にとって富田さんは、やさしく見守ってくださる東京の母のような存在でした。もともと、当時 30 代後半とお若かった富田さんは、母と言うにはいささか失礼かもしれませんが、東京の母と言いながら、年齢差を感じさせないフレンドリーさで私たちと接して下さった富田さんには本当に感謝しかありません。もちろん、大変な手間暇をかけて毎日作って下さっていた夕ご飯もとてもありがたいものでした。当時から酒を飲むことが好きだった私は、ついつい不健康な食生活になりがちでしたが、栄養面でも私を支えて下さったのが富田さんでした。

富田さんとは卒業後はなかなかお会いする機会がなかったのですが一度だけ富田さんのご自宅をお尋ねしたことがありました。正確な年は覚えていませんが、20 数年前のことになるかと思います。当時、私は大学を卒業後就職した会社を11年で辞めて名古屋に帰っていたのですが、その数年後に同期入寮の4人(安井、

伊藤兄、稲永兄、境兄)で富田さんが住んでおられた確か荻窪(?)のご自宅をお尋ねしたのです。富田さんは在寮中に作ってくださっていた料理をさらに豪華にした美味しい料理を山のように用意して下さり、私たちを大歓迎で迎えてくださいました。久しぶりに富田さんの作った美味しい料理を腹一杯いただきながら、懐かしい話や近況報告をしながらとても楽しい時間を過ごさせていただきました。その後は、またそのうちお尋ねしようと思いながらもなかなかその機会を作れずにおりました。

数年前から、本日も幹事の労をお取りいただいた盛岡さんが、「富田さんを囲む会」を企画してくださっていましたが、「忙しいから」とか「遠いから」などと言い訳をし、次回こそは参加しようなどと参加を先延ばしにしているうち、ついにお目に掛かる機会を逸してしまったことを大変心残りに感じておりました。

ご自宅で転倒なさったのをきっかけに体調を崩され入院なさったという知らせを聞いた時は、本当に涙が止まらずなんとか回復なさることを祈っておりましたが、それも叶わずとうとう富田さんにお目に掛かることが出来ないままになってしまいとても残念に思っています。

この度、このような機会をご提供いただき本当に感謝致しております。富田さんにお目にかかることはできませんが、最後のお別れをさせていただけることを本当にありがたく思っております。また、本日は私と入学年が近い方も多数参加しておりますが、ほとんどの方とは卒業以来ほとんど顔を会わす機会がないままでおりました。そういった懐かしい方達に会える機会を作っていただけたのも佐藤様や富田さんのおかげと感謝致しております。本日これだけの方が集まったのも富田さんのことを皆慕っていた証だと思います。

私たちもそろそろ後何年元気でいられるだろうかなどと考えるような年齢になってまいりましたが、富田さんはその温かく優しく朗らかな笑顔でいつまでも見守っていてくださると思っています。富田さん、本当にありがとうございました。

ここまでがお別れ会の時にお話ししようと準備した原稿なのですが、それ以外にも考えていたことがございましたので、追記させていただきます。

私は大学卒業後勤めた会社を11年3ヶ月で退職し地元である名古屋に戻りました。退職の際には次にどのような仕事に就くかということは考えていなかったのですが、縁あって医療の道に進むことになり、1999年4月から医学部に通うことになりました。入学したのが38歳になる年で、現役入学の同級生とは19歳違いました。医学部に入学した当初、歳の離れた同級生たちとどのように接していいかわからずなかなか馴染めずにおりました。幸いにも私と同じように社会人を経験してから入学してきた者も数名おりましたので、完全に孤立してしまうことはなかったのですが。そんな少し居心地の悪い大学生活を送っていた頃、富田さんのことを思い出していました。

私が一橋大学に入学した時の富田さんの正確な年齢は存じ上げないのですが、医学部に入学した頃の私と同じくらいだったのでないかと思います。富田さんは、歳の離れた私たちに急に遠慮して気を使うわけではなく、かといって上から目線で接してくることはもちろんなく、自然体で私たちの中に溶け込んでおられました。そんな富田さんだったので、私たちも気兼ねなく自然に接することが出来たのだと思います。こういう風に接すれば歳の離れた同級生ともうまく付き合っていくことができるのだと頭では思いましたが、なかなか富田さんのようにうまく振る舞うことはできませんでした。富田さんのお人柄であつたからできたことなのだと改めて思い、私にはなかなか真似することはできないと感じてはおりましたが、大いに参考にはなりました。

私の医学部時代は、富田さんのように年下の者から慕われるようにはなりませんでした。富田さんのような「自然体」を心がけることで少しずつ年下の同級生・同期生たちと過ごすことに居心地の悪さを感じることはなくなっていました。医者になった後も、同期は当然若い人が多いので、そのような環境で気兼ねせずに過ごせるようになったのはとても助かりました。また、体は年齢相応(あるいはそれ以上に)がたがきていますが、気持ちだけは若いつもりでいられるのは、この時の体験があつたからかと思っています。

富田さんがどのようなお気持ちで歳の離れた私たち寮生と接してくださっていたのかわかりませんが、佐藤様のお話からは、楽しい記憶として残っていられように感じられとても嬉しく思います。それは私にとっても同じで、富田さんに見守られながら過ごしたYMCA一橋寮での生活は、決して忘れることができない楽しい思い出です。富田さんが亡くなられたのは今でも信じられない気持ちですし、本当に残念です。

富田さん本当にありがとうございました。富田さんのことは生涯忘れることはありません。どうぞゆっくりお休みになってください。そして、YMCA寮にいたころと同じように、私たちのことをいつまでも見守っていてください。

富田さんの思い出

峯村政孝(昭 61 社)

1982 年に入学し、1986 年まで、4 年間、お世話になりました。峯村です。

卒業後、38 年余りのサラリーマン生活ですが、中国に 24 年、今年で 25 年目の中国生活になります。

私は 5 年前に、永遠に死なないと思っていた母親が死にました。そしてまた富田さんという第 2 の母親にも旅立たれてしまいました。何歳になっても、この現実を受け入れるのは、難しいことです。富田さんは、寮生活わずか 4 年間でしたが、本当に第 2 の母、と呼ばせていただきたい存在です。

入寮の際の第一印象として、当時、髪の毛がストレートで長かった富田さんは、とてもお若く見え、後で御歳を知って、驚きました。入寮の時に同行した母は、いつまでたっても、「あのお姉さん」と言っていました。

富田さんに、時には大きな声で、「あんたたちいい加減にしなさい！」といった怒られ方をしたこともありますし、またある時には、寮生同士、ちょっと母親の前ではできないような話をしている時には、怒られると思いきや、「それでそれで、その後どうなったの？その場所、どんな場所なの？」と、文字通り身を乗り出して、目を輝かせて聞かれるようなこともありました。そういう時は、かなり話を誇張して教えてあげました。

いつも寮食がとても楽しみだったのですが、食べる時に、いきなり醤油や調味料をかけると、「食べる前からそんなにかけちゃうんだあ」と悲しそうに言われ「あら、食べるところを見ているんだ」と、申し訳ない気持ちでいっぱいになったことがありました。

何ととっても、毎週火曜日の聖研の日のカレーは楽しみで、一緒にじゃがいもの皮をむいたりもしました。今でも、じゃがいもの皮をむくとき、「富田さんに教えてもらったなあ、一緒に並んでむいたなあ」と、思い出します。カレーのご飯は 1 合だけ、と決まっているのに、たくさんとってしまい、「それ、多い！」と、よく怒られました。

時々、聖研などの際、富田さんに、開会や閉会のお祈りをいただくことがありました。内容は覚えていませんが、印象として、「この人は本当に常に神様と一緒にいるんだなあ。」と実感させられるお祈りでした。

そういう富田さんですから、今旅立たれて、新たな生活を楽しんでいらっしやることと思います。

いつまでも、健やかにお過ごしください。

ありがとうございました。

富田寮母さんを偲んで

大溝日出夫(平 1 法)

ブルーストの小説「失われた時を求めて」の中に、紅茶に浸った一片のマドレーヌの味覚から不意に幼少時代のあざやかな記憶が蘇る」という有名な一節があります。

私にとっては、井ぶりに盛ったカレーライスが、40 年近く遡る記憶を蘇らせます。毎週火曜日の聖書研究会。ゴロゴロという音。食材を入れたチェック柄のショッピングカートを引き、寮の玄関に入ってくる富田さん。9 月の少し涼しくなったある日。食堂で挨拶をし、私が「夏も終わってしまいました。秋はすることがないですね」。富田さんは「秋は秋で忙しいわよ。紅葉狩りとか」と答える。もっといろいろお話をしたはずなのに、なぜかこんなたわいのないことが思い出され、しかしながら、頭の中で富田さんのお姿と肉声をはっきりと再生されるのです。

私が入寮したのは 1985 年。崔兄、櫻井兄、山田兄と一緒にでした。また、短い間でしたが、インドネシアからの留学生のチャンドラー兄もいました。崔兄は、クラブ活動では、合唱団のコールメルクールに所属し、櫻井兄は体育会ゴルフ部、山田兄は体育会ダンス部に所属、私は当時乱立していたテニスサークルに入っていました。クラブ活動を最後まで立派に続けたのは崔兄だけだったという話はさておき、当初は皆それぞれに忙しかったと思いますが、富田さんの作ってくださる夕食は、キャンセルせずに頂いていたことが多かったように思います。夜に飲み会になった日は、ラップをかけて翌朝の朝食として頂いていました。

食生活が不規則になりがちな学生生活において、夕食にしっかりと手作りの食事を頂けるというのは、健康面で大変ありがたく心強いものでした。

寮母は寮の母と書きますが、当時、心身ともにお若く、サバサバとした感じで話し相手になって頂ける富田さんには、母というより姉に近い感覚を持っておりました。それは、5 月のお別れの会で諸兄が持ち寄られた当

時の写真のお姿を見ても、あらためてそう思いました。

お別れの会では、小栗兄から、富田さんの病床を見舞われた際に、意識もはっきりしない中で、小栗兄の声掛けに反応されたとのお話がありました。それを聞く私の手元には、形見分けとして、誰かが私の似顔絵をいたずら書きしたノートの切れ端が配られていました。こういうものまで大切に取っておいて頂けたとは、富田さんは、本当に私たち寮生一人一人のことを愛し、いつまでも覚えていて下さったのだと、こみ上げる涙を抑えきれませんでした。

私たちは、富田さんのおかげで学校を卒業し、それぞれ社会人としての役目を果たして年を重ね、そしてお別れの会では多くの諸兄と再会し、旧交を温めることができました。

富田さんに感謝申し上げるとともに、安らかな眠りにつかれますようお祈りいたします。

富田寮母さんを偲んで

小栗真吾(昭 57 経)

大変悲しいことに、富田さんが今年 2 月に天国に召されました。

ご主人の佐藤さんのお陰様で 5 月に開かれた富田さんを送る会には、YMCA 寮でお世話になったメンバーの約半数もの人数が集まって、当時の写真や富田さんが残して下さった資料を拝見したり、思い出話を語り合ったりして富田さんを偲び、悲しいながらも大変素晴らしい時間を過ごすことが出来ました。

佐藤さんや、幹事をしてくださった盛岡さん・滝澤さんには、改めて深くお礼を申し上げます。

富田さんが YMCA 寮に来てくださったのは、今から 45 年前のことでした。

昭和 54 年に建て替え後の新寮の寮生募集があり、私も 2 年生から入寮させて頂きました。新寮の寮母さんを探すに際して、諸先輩は大変ご苦勞されたと同ったことがあります。自らを振り返ってみれば、むさ苦しく我が儘な 16 人もの野郎共の世話を、進んで引き受けてくださる方が滅多にいないことは、容易に想像出来ます。

こうした中で、加藤先輩(昭和 47 年社会学部ご卒業)のご尽力で、同じ牛込払方町教会に通っておられた富田さんが、新寮スタートの翌月から寮母を引き受けてくださったことは、我々にとって大変ありがたいことでした。ただ、富田さんは当時 36 歳で若くて美人でしたので、住み込みではなく通いで勤められるとしても、諸先輩は心配されたと後に伺いました。

初めの頃は、食器や調理道具等を揃えるのが大変だったでしょうし、毎日の夕食を 16 人分もご用意頂くのは、食材の買い出し・運搬・料理等の、どれをとっても大変だったと思います。しかし、申し訳ないことに私は当時、そのようなことに気が回らず、一部の先輩は手伝われたのかもしれませんが、全くお手伝いしませんでした。

本人は大人のつもりでも、食事は親任せの実家の生活を当たり前と感じ、お母さんよりお姉さんの方が相応しい寮母さんにすっかりお世話になってしまい、今更ながら後悔しています。

ただ、今になっても大学時代や YMCA 寮での生活のことを考えると、富田さんが作ってくださった、豊潤でスパイシーな香りと深くまろやかな味わいのカレーのことが必ず思い出されます。また、食事の量やレパートリー、栄養のバランス等に細やかな心配りをしてくださり、実家の母親のように親身に声を掛けてくださったこと等も、懐かしく胸中に去来します。

卒業後、富田さんのご主人が亡くなられたことを知り、盛岡さんが幹事になってくださって、平成 13 年に富田さんを励ます会を開くことが出来ました。それ以降も盛岡さんのお陰で何回か、富田さんもお呼びして当時の寮生が集まり、懇親会を行いました。平成 24 年以降はコロナ禍が始まる前まで、富田さん(佐藤さん)のご自宅にお招き頂き、ご夫妻と一緒に親睦を深めさせて頂くことが出来ました。

ご自宅では、富田さんが寮母を退かれる際に捨てるに忍びないとご自宅に移された、多数の貴重な資料を拝見することが出来ました。昭和 53 年に故大平総理大臣が就任された時のお祝いの寄せ書きの色紙のコピーの他、「夕食の要否 ○×表」や、食材等を記載した家計簿、聖書研究会の時に発表者が作成・配付したレジュメ、一橋祭等の際に作成した文集等、我々が忘れていた数々の思い出の品を、大切に保管して頂いていました。

富田さんの祈りと無私の奉仕のお陰で我々の生活が成り立っていたことに改めて気付いて、感謝の思いを新たにしました。

ご自宅での会でもう1つ気付いたのは、ご夫婦がお互いを思いやり、慈しみ合っておられる、とても和やかな、ご家庭のご様子でした。お二人の馴れ初めやご結婚式の話、佐藤さんが住み慣れた家から富田さんの家に移ってくださった話、普段のご生活振りの話などをなさる時のお二人は、正に円熟した長年の連れ合いそのものでした。

富田さんは前のご主人に先立たれたり、ご自身や前のご主人のご両親の末期の世話をなさったりと、色々のご苦勞の多い時期も過ごされたと思いますが、今は愛に満ちた穏やかで幸せな生活を送っておられると感じ、私たちもとても幸福な気持ちになることが出来ました。

コロナ禍でしばらくお目に掛かれないうちに、ご主人のご不在時に転ばれたことが原因となって脳内出血で入院されることとなりましたが、それをお知らせくださった佐藤さんのお手紙にも富田さんへの愛情や、富田さんがYMCAの寮生たちを思う気持ちが綴られており、拝読して涙が止まりませんでした。

コロナ禍のためにお見舞いすることも叶わないまま2年が過ぎた頃、やっと規制が緩和されて、昨年6月に高尾にある病院まで佐藤さん・盛岡さん・滝澤さんと4人で伺いました。病院には似た状況の患者さんが多数入院されていましたが、都心から遠く離れていることもあり、佐藤さんほど頻繁にお見舞いに来られているご家族は、他におられないようでした。

佐藤さんや私たちが枕元で声を掛けると、医学的には意識がないはずですが、寮生が来たことが分かっているようにしか思えず、私たちと視線が合っている、私たちに話をしようとしていると感じました。賛美歌を歌ったら涙を流して聞いてくださいました。心からお見舞い出来て良かったと思い、佐藤さんも喜んでくださいました。

11月には再び、佐藤さん・廣瀬さん・滝澤さんと4人でお見舞いに伺うことが出来て、やはり同じ反応でしたので、これからも年に何回かは他の寮生にも声を掛けて、お見舞いに来ようと話し合っていました。

しかし、残念ながらその次のお見舞いが叶うことはありませんでした。

佐藤さんに何うと、富田さんは認知症になっても寮生のことを忘れることがなく、いつも心に留め、寮生の話や寮生に関する心配を口にしてくださっていたそうです。天国に召された今でも、きっと神様に私たち1人1人のことを取り成してくださっていることと思います。

私たちも富田さんのことを母としていつまでも心に留め、その思いと感謝を胸に生きて参りたいと思います。そして、これからも富田さんを偲んで皆さんで集まり、祈りをともにしたいと思っています。

弔辞 佐藤(富田)信子さんのご逝去

今橋 隆(昭56商)

年齢を重ねて高齢者ともなると、やむを得ないこととはいえ、多感な学生時代にお世話になった方の訃報は、心に沁みます。

私は寮の建て替わった1979年の入寮で、旧寮からの先輩たちにお世話になる一方、専門課程の2年間、新築された寮の副寮長などを経験しました。もっとも、同期で寮長であった、なくなった本田さんや、今もさまざまに貢献してくれている盛岡さんと違い、いいかげん寮生でしたけれど。

それまでの寮母さんが不在となり、キリスト教的価値観の薄れゆく昭和末期の状況から、佐藤(富田)信子さんは、「通い」の寮母さんとして、炊事に聖書研究会に、何くれとなく貢献していただく毎日でした。近畿の進学校から入学した若僧は、人生の先輩として、生活者として、とても多くの大切な事柄を彼女から教わったと、当時を懐かしく想起します。教師として人生の大半を過ごしましたが、顧問であった斎藤忠利先生とともに、教わったことを学生たちに還元できたか、自問すると、忸怩たるものを禁じ得ません。

有名な漢詩の一句に、「人生別離足る」というのがあります。井伏鱒二の名訳によると、「サヨナラだけが人生だ」。一路平安。

お別れの言葉

山崎 学(昭60社)

どうぞ心の母と呼ばせてください。その心の母である富田さんとお別れをする日がやってきてしまいました。1981年4月から1985年3月までのYMCA一橋寮での大学生生活4年間に亘り、時には凛として厳しくご指導を賜り、また時には大海原のように広く大きく慈しみに満ち溢れた優しいっぱいの心で私たち寮生を

温かく包み込んで下さった富田さんは、まさに「心の母」でした。精神的支柱といった面に留まらず、毎晩心を込めてお作りくださった数々の美味しい料理にも、小生を含む寮生諸兄はお腹いっぱいになると同時に、感謝の気持ちを持って「おふくろの味」を感じずにはいられなかったこと、間違いありません。「召し上がれ～」という、明るく潑潑としたお声が今にも聞こえてきそうです。中でも、聖書研究会開催日のカレーライス、それと青椒肉絲が私の大好物でした。

大学卒業後、早や 39 年もの年月が流れましたが、その間 26 年以上を隣国韓国の地で過ごしていることもあり、なかなかお目にかかる機会に恵まれなかったことが悔やまれます。南荻窪にあるお宅へ直近でお邪魔させて頂いたのが 2017 年 7 月 22 日ですから、そこからも既に約 7 年が経過しているのですね。本日も諸兄の皆様と共に小田急ホテル センチュリーサザンタワーの会場にて陪席させて頂きたかったのですが、あいにくソウルの地に居りますためそれが叶わず残念でなりません。

大学生活 4 年間で富田さんのもとで寮生諸兄と過ごせましたこと、心から感謝すると共に大変誇りに思います。かけがえのないたくさんの思い出を本当にありがとうございました。どうか安らかにお眠りください。」

富田さんの思い出

鈴木宗徳(平 3 社)

5 月 25 日に行われた佐藤(富田)信子さんのお別れ会は、初めてお目にかかる方も含めて多くの諸先輩のスピーチを聞き、その逸話のなかに故人の人となりを改めて確認する機会となった。聖書研究会の前に毎週カレーを頂いたことや、未熟な寮生の振る舞いにさぞやご心配をおかけしたことなど、心の奥にしまい込んでいた思い出が次々と甦ってきた。

そのなかである先輩のお話にあった「聖研での富田さんの発言が印象に残っている」という言葉は、私自身これまで自分から話したことはないが、心から共感した。寮生たちが聖書の字句のみから解釈をひろげてゆこうとするのに対し、富田さんはご自身の信仰を拠り所に率直にお考えを述べられていた。私の家族にもクリスチャンはいるが、信仰を語るという実践に私が初めて触れたのは富田さんを通してであった。聖書が自分を映す鏡となるように、富田さんの存在もまた、自分の生き方について考えるひとつのきっかけを与えて下さっていた。

多くの先輩が仰っていたように、最大 16 名の寮生の毎日の夕食づくりはさぞや大変だったろうと思う。富田さんは毎日の献立をその日のスーパーのチラシをみて考え、カートを引いてちょうど分量の食材を買ってこられていた。食材を運んで調理するだけでも大変な労力をかけておられただろうが、それに加えて、材料費の実費を寮生から徴収するため一円単位の計算を毎日されていたのもかなりのご負担だったと思う。お別れ会の当日は、富田さんが丁寧につけていた家計簿を久しぶりに拝見できた。夕食前に食堂でのんびりしている間に、富田さんが電卓を叩いていた姿が思い出される。

たくさんのことを思い出しながら、35 年前の自分たちがいかに未熟であったかが痛切に感じられた。いま自分の子どもがちょうど大学生であるせいもあるが、学生が自分の未熟さに気づくには時間がかかる。大人が何を気遣いどれだけ心配してくれているかは、しばらく経ってようやく分かるのである。病床の富田さんが寮生のことを心配されていたと伺い、ああどうして自分は一言でもお礼を申し上げる機会を作ろうとしなかったのかと、悔やまれる。

天に召された富田さんがどうか安らかに眠られますよう、心よりお祈りいたします。

あとがき

滝澤英一(昭 60 法)

当日会場では、当時の懐かしい写真が投影されました。また、富田姉が保管されていた、1979 年からご退職されるまでのすべての聖書研究会のレジメ、小平祭等用に作成した文集、食材費を細かく記した家計簿、が展示されました。讃美歌 405 番(また会う日まで)斉唱、佐藤様からお礼の言葉、小栗兄から閉会の辞をいただき、お開きとなりました。

私の構成要素

白川優太(経済学部 1 年)

私は文章を書くのが苦手である。高校の友人は、私が先輩に向けて書いたメッセージカードを読んだだけで「白川って文章書くの下手だな。」と言い当ててきた。そんな私には一つのテーマでたった 1600 字すらも書ききる自信がない。書きたいことがないわけではない。むしろ自分や身の回りのことに思考を巡らせるのは好きである。そこで、今までに考えてきたことを自分の構成要素としていくつか書き連ねてみようと思う。まとまりのない文章になるであろうがそこはご容赦願いたい。

楽しいことに正直に

私は、楽しいという感情に重きをおいて生活している。どうなりたいかよりも何をしたいかが行動の指針となっている。進路選択は将来役に立つかよりも今なにを学びたいかで選んできた。バイトも給料よりも興味のある分野や内容の楽しさを重視している。このような考え方の根本には自分が小学生の頃の父親がある。父は、私がしたいことに大人げないくらいに全力で相手をしてくれるひとであり小学生のころの一番の遊び相手であった。私がカードゲームをすれば、大人の資金力をもって相手をし、私がテレビゲームにはまれば、そのゲームを私が寝静まった深夜までプレイしていた。その姿は、ただ私の相手をする以上に自分が楽しんでいるように見えた。そして「目の前のことを全力で楽しむ」という今の自分の考えに強く影響を与えている。

笑うから楽しい

私は、笑顔を作るという行動によって楽しいという感情を生じさせることができる。元は部活の試合の際つらい場面で気持ちを切り替えるために行っていたルーティーンであった。最初は自己暗示のようなものであったが、今では笑顔でいることで大体のことを心から楽しめるようになってきている。「楽しいを優先していると怠惰になってしまう。」寮生に言われたことである。確かに的を射ている。自分の楽しいと思うことばかりをやっていると、やらなければいけないことを疎かにしがちになってしまう。だが、私は「笑うから楽しい」という考え方によってこの怠惰さを多少軽減できていると思う。やらなくてはいけないことも笑顔で取り組むことで楽しいことに変換し、前向きにとりくめるようになってきている。

小学生時代の重要性

私は、小学生はまだ自己が曖昧な時期であり、この時期に何を経験したかが後の自己形成に大きな影響を及ぼすと考えている。実際私は前述したとおり、小学生のころに見た父の姿が今の自分の根幹をなしている。そして私はこの時期の小学生に積極的に関わっていきたいと思っている。関わり方として私が重要だと考えるのは子供と同じ視点に立つことである。子供と同じ視点で楽しむ大人を見ることで子供は今の自分を肯定することができるからである。親や学校の先生は、どうしても大人の視点から子供を導くという関わり方になってしまいがちである。もちろんそういった存在も小学生には必要であると思う。しかし、だからこそ私は子供の視点にたって物事を楽しむ姿を見せたいと思っている。それを実践するためにわたしは今小学校の学童でアルバイトをしている。

寮での団らん

ここまで、自分が楽しむという感情がとても重視しているということを書いてきた。そこでここからは、今最も楽しいと思っていることを書いてみようと思う。今最も楽しいこと、それは寮での団らんである。寮の食堂になんとなくいると自然と人が集まってくる。こうして集まった人と他愛ない話をする時間がこの上なく楽しいと思える。この時間には実利的な価値は一切無いかもしれない。しかし、私はこの時間の積み重ねこそが幸せにつながっている。私がこれまでの 20 年間で幸せだったなと思えることを振り返ってみると、その多くは気心のしれた友人との他愛ない時間である。この寮の食堂にはそうした時間が流れている。また、寮生は十人十色である。共同生活の性質上、今まで関わってこなかった様な人と話す機会も多い。そうした人との会話からは、思いがけないような世界が見えてくることもある。多様で暖かい食堂での時間をこれからも大切にしていきたい。

自分の価値観とは

花田智紀(法学部 1 年)

0. ご挨拶

初めまして、4 月に入寮した法学部 1 年の花田智紀です。出身は群馬県高崎市です。サークルはサッカー同好会と KODAIRA 祭実行委員会に所属しています。4 年間どうぞよろしくお願いします。

1. 一元的な価値観の中で

私の高校は他校より長い授業時間と補習と大量の課題で雁字搦めに生徒を縛る、ボトムアップ型のいわゆる自称進学校だった。文系・理系の違いこそあれ、偏差値・模試の成績という同じ価値観で競い合っていた。極端に言ってしまうと、志望校でさえも「〇〇の研究分野に強いから××大学を目指したい」という崇高な動機を持つ同期は稀有で(東大に合格した数名の友人だけだった)、ほとんどの者は偏差値だけで志望校を選んでいて、もちろん学問だけがすべてではない、という建前で部活動の奨励も行っていたが、あくまで課外活動にとどまるものである、という認識だった。私も例に違わず、偏差値や目の前の模試の成績を追いながら高校生活の半分以上を費やした。しかし、ある時気づいたのだ。「もし自分が大学受験に失敗したらどうなるのだろうか」「自分は親の扶養の下でもう1年以上を過ごすのか」「何の生産性もない人生を親の金で生きていくのか」「自分はもはやニート予備軍でしかないのではないのか」と。その瞬間、私の中で何かが鈍く重くなった。自分を動かしていたはずの動力源というか、精神的な支えとなっていたものが輝きを失ってしまったように思えた。次の日から私は高校に行けなくなってしまった。輝かしい進学実績を持つ将来よりも、失敗して全てが上手くいかなくなるのが怖くなってしまった。今思えばこの絶望感にも似た何かは、私自身が学問以外の(自分自身に適用できる)価値基準を持っていなかったのが原因だったのかもしれない。

2. 苦悩

なんやかんやあり、理系特進クラスで医学部を目指していたはずの私は文転し、一橋大学法学部に来た。親の期待もあり、法学部に入ったからには法曹を目指そうと意気込んでいた。私は仮にも本学に合格している身ではあるし、高校内でも文系ではかなり上位の成績だったため、それなりに学力に自信や野心があった。しかし、クラスや同じ法学部の友人と話しているうちに、彼らの学力や勤勉さに自分は敵わないと悟った。また同じ不安や焦燥に駆られ、大学に行けなくなるほど精神的に追い詰められるのではないかと。今思えば視野狭窄の一言で済むことだが、高校三年間を通じて私の中に形成された「学力」という強く固定された価値観軸が私を縛っていた。「成績が優秀である」ことにしか価値を見出せなくなっていたため、法学部を卒業した後の将来のビジョンについて、法曹や企業の法務部、官僚といったものを漠然としか見えていなかった。「自分は(学内で相対的に見て)優秀ではないのだから、他の才気と情熱にあふれた人達のようにはいかない」「いわゆるエリートにはなれない」「将来どのような職業に就くことになるのだろうか」。信じ続けてきたはずの価値観から自分が否定されたようで、自分自身が信じられなくなった。自分に価値がないように思えてしまった。

3. 脱却

それからしばらくの間、私は自分の将来や価値観について深く考えることが多くなった。周囲の人々と接する中で、その価値観に疑問を感じ始めた。学力が高く学問にひたむきな姿勢で取り組む友人、法曹や官僚を目指して日々自己研鑽に励む友人らと比べると、自分が無力に思えて、だんだんと無気力になっていき、どこか自信を失っていく感覚があった。彼らが持っている強い信念や目標に対して、私の将来のビジョンはぼんやりとしていて、そのことがますます不安を増幅させたのだ。成績が良ければ自分の存在が肯定され、悪ければ自分には価値がないと考えてしまう。そのような考え方は、実際に私の成長や将来を限定していた。しかし、この YMCA 一橋寮に入寮し、(特に明記はしないが)各々の寮生と触れ合う中でそれぞれが大切にしている価値観やライフスタイルを知った。他人の評価を気にせず、自分の着たい服を着る。自分の好きなアニメを見る。自分の学びたいことをもって足繫く大学・大学院に通う。決して誰かに与えられたものでなく、彼ら自身で見つけ大切にしているものだろう。そこで気づいた。自分の持っていた学力中心的な価値観は、自分自身で見出したものというよりは家族や周りの環境により受動的に根付いていた・根付かされていたものだったのだ。周囲から与えられた価値観で生きるがゆえに、常に他人の目や評価を気にし、自分と他人とを相対的に測っていたのだと気づいた。

特に、かつて自分が挫折するきっかけになった大学の友人に夢・情熱やこだわりを聞くなど、人と関わりその生き方を観察する経験を通して、「学力」だけでなく、人間関係や興味を持つ分野、自分の強みを広げることの大切さを学ぶようになった。ある友人は「一般常識やモラルを持ちつつも、自分が最大限快く生きるための選択を行っている」と言う。またある友人は「自分自身の納得を全てに優先する」と言う。

その後、私は少しずつだが、自分にとっての新しい価値観を見出していった。学力や成績だけに固執せず、自分の個性や興味を大切にすることが、今の私にとって重要なのだと感じるようになった。また今よりも少しだけ自己中心的に生きていいのだとも思った。もちろん学生である以上、成績や学力が大事であることは変

わらないが、それがすべてではないと理解することができた。自分を価値ある存在だと認めるためには、他者と比較するのではなく、自分自身の成長や個性を大切にすることが必要であると気づいたのだ。

振り返ってみると、高校時代に抱いていた「学力至上主義」的価値観から解放されるのは簡単ではなかった。しかし、その経験を通じて、私は自分にとって何が本当に重要なのかを考える機会を得ることができた。そして、今は多様な価値観を持つことができる自分を少しずつ受け入れつつある。まだ完全には到達していないかもしれないが、その過程を大切にしていきたいと思う。

法と宗教

本田和士(法学部 1 年)

「法と宗教」は、古代から現代に至るまで、社会の秩序形成に深く関わり続けてきた二つの重要な要素である。法とは、国家や社会が維持・運営されるためのルールや規範であり、宗教は信仰を基盤にした倫理的な教えや価値観を与える。これらはしばしば重なり合いながらも、異なる役割を担い、時には対立を生むこともある。本論では、法と宗教の関係性について、歴史的・現代的な視点から考察し、その相互作用が社会に与える影響を探っていこうと思う。

1. 法と宗教の歴史的関係

古代社会では、法と宗教は不可分の関係にあった。例えば、古代メソポタミアやエジプトでは、王権は神の権威に基づいて正当化され、法も神意の表れとされていた。宗教的儀式や神託を通じて、法の正当性が確認され、人々は法の遵守を宗教的義務とみなしていたのである。こうした社会では、宗教が法の根拠を提供し、宗教的権威が法の執行に深く関与していた。

中世ヨーロッパにおいても、宗教と法は密接に結びついていた。キリスト教会は法の制定や解釈に大きな影響力を持ち、教皇や聖職者が法の執行者としての役割を果たしていた。例えば、教会法(カノン法)は宗教的規範をもとにした法体系であり、道徳や信仰に基づいて人々の行動を規制していた。また、世俗的な法も宗教的な価値観に大きく依存しており、キリスト教倫理が法制度に反映されていた。一方、イスラム世界では、シャリーア(イスラム法)が宗教的教義に基づく法体系として、社会のあらゆる側面を規律した。シャリーアは、クルアーンやハディース(預言者ムハンマドの言行録)に由来し、法と宗教が一体となって人々の生活を規制している。このように、宗教が法の根幹を成す社会においては、法の正当性やその遵守は、信仰に強く依存していた。

2. 近代における法と宗教の分離

近代に入ると、啓蒙主義や世俗化の進展により、法と宗教の関係は大きく変化した。ヨーロッパでは、フランス革命やアメリカ独立革命を契機に、宗教と国家の分離(政教分離)の考え方が広がり、法は宗教から独立した世俗的な規範として位置づけられるようになった。法は人間の理性に基づいて制定されるべきであり、宗教的権威に依存するべきではないとされた。これは、個人の信仰の自由を尊重し、多様な価値観を包摂する社会を形成するための重要なステップであったと言える。

アメリカ合衆国の憲法修正第1条は、政教分離の原則を明確に打ち出し、国家が宗教を支援したり、特定の宗教を優遇したりすることを禁止している。また、フランスではライシテ(政教分離主義)が国家の基本原則として確立され、公教育や公的機関において宗教的シンボルの使用が制限されている。こうした国家では、宗教は個人の私的領域に属するものであり、法は公共の利益を守るために宗教から独立した存在とされている。

しかし、この政教分離の原則が広がる一方で、宗教が法に与える影響が完全に消え去ることはなかった。現代の法制度においても、多くの国々で宗教的価値観が法の制定や解釈に影響を及ぼしている。例えば、中絶や同性婚といった倫理的な問題に関しては、宗教的信念が法的議論において重要な役割を果たすことがある。

3. 現代における法と宗教の相互作用

現代社会における法と宗教の関係は複雑である。グローバル化が進む中で、異なる宗教的背景を持つ人々が共存する多文化社会が形成されており、法と宗教の関係は新たな課題を突きつけている。宗教の自由は多くの国で基本的人権として保障されているが、それが法と衝突する場合もある。

例えば、宗教的少数派がその信仰に基づく行動を取ることが、世俗的な法に抵触する場合、どのように調整

すべきかという問題が生じる。フランスでは、イスラム教徒の女性がヒジャブ(頭巾)を着用することが、公共の場における宗教的シンボルの使用を禁止する法律と対立している。このような事例は、個人の宗教的自由と国家の世俗的価値観との間での緊張を象徴していえよう。

また、宗教が法の制定過程に影響を与えることもある。アメリカでは、キリスト教保守派が同性婚や中絶に対する反対運動を展開し、これが法的議論に大きな影響を及ぼしてきた。宗教的信念が個人の価値観や行動を形成するだけでなく、法の内容や適用にまで影響を及ぼすことがあるのである。

4. 法と宗教の未来

法と宗教の関係は今後も変化し続けるであろう。技術の進展やグローバル化により、異なる文化や価値観がますます密接に交わる中で、法がどのように宗教的多様性を包含し、調整するかが重要な課題となる。宗教的信仰と法の間を生じる緊張をどのように解消するかは、社会の安定と持続可能な発展に直結する問題である。

一方で、宗教の持つ倫理的な教えが、法の正義感や人権の保護に寄与することもある。宗教はしばしば、法の枠組みを超えて人々に高次の倫理を求め、社会の道徳的な基盤を提供している。そのため、法と宗教のバランスを適切に取ることが、平和で公正な社会の実現に向けた鍵となるであろう。

結論

法と宗教は歴史的に密接に結びついてきたが、近代以降は分離の方向へと進んでいる。しかし、宗教的価値観が法に与える影響は依然として強く、現代社会においてもその関係は複雑であり続ける。多文化共生社会における法と宗教の調和は、今後も重要な課題であり、双方のバランスを考慮した対話と調整が求められると言える。

センセーション

三浦 龍平(SDS1 年)

ある土曜日に浦和で「牛太」というかなりお得なしゃぶしゃぶ屋に行った後に国立に帰ることにした。国立に帰るまでには、浦和→西国分寺(乗り換え)→国立と乗ればいい単純な作業である。

しかし問題が最初に起きたのは、浦和駅。ツレが北浦和駅でしょ？とか言って逆方向の電車に乗った。直ぐに北浦和駅から南浦和駅に戻ってツレとそこでお別れをした。自分はそこから武蔵野線府中本町行きに乗れば着くのであるが、それに乗ったつもりなのに中々つかない。行きより長いな一って思ってたらなんと終点「南船橋」へ到着！はにゃ？

まあ一戻ればいいのかと電車に乗ろうとしたら府中本町方面がない！渋々終点の「新所沢」まで向かう。そこから西国分寺まで 4 駅くらい？だったので歩けば余裕かと思って特に気にしてはなかった。困ったのは、スマホの充電が 0%になったことである。モバイル充電器を借りることもできないし、初めての場所で地図もない。あら困った。どーしよー。線路上を辿れば着くか。とテキトーに歩いていった。しかしながらそう簡単に行かないんですね。途中から変な道を辿ることになるんですよ。変なあぜ道を通ることになるし、歩道がない道を歩くことになったり。町の方へ向かっていけばいいと思いつつも町の方がどこか分からない。人も目印となる看板もない。とりあえず、自分の感覚として、

- ・タクシーの来る方向(空車、割増)を確認する
- ・明るい方を目指す
- ・線路が通りそうな道を上空から想像する

これを意識した。

このようなことをしたら、東久留米市に到達。そこから秋津に來たのだが、そこで面倒くさい状況に遭遇する。男と女がいて、男が女に「お前、他の男に絡みすぎ」と切れてるのである。女は怯えてるし、手出したら対処しようと思ったけど、そんな素振りないし自分自身に余裕もないからそのまま歩き続けた。(早く別れるよと内心思う)後日談とはなるが、そのような余裕のない男に自分にはなりたくないなと強く思った。世の中は女性のほうが多いのだから、男はこの女と別れてもいいやという圧倒的な自信が必要なのである。自分はそこから筋トレをしようと強く決意したのである。来年の今頃には女子にちやほやされるような体になりたい。

さて、話を戻そう。そのまま歩いていると、「府中方面」と看板があったのでそのまま真っ直ぐ歩けばいいと思った。そこからが意外に長い。ひたすら何もない直線をひたすらに進むのである。面白くないなと思って歩いていたら、津田塾大学が見えた。初めて見たが、意外に大きい。津田塾大学は可愛い女の子が多いと思う。

しかしながら、話を聞けない女子はあまりにも多いため自分には合わないと感じる。人の話を聞くことは人間関係においてとても重要だなと感じる。このことを彼女らにしっかりと伝えたいなと感じた。このように言っているが、一橋生は仲良くしなければいけないのできちんとお辞儀をしたあとに歩くのを再開する。やっと国分寺駅の表記が見え、そのまま歩いて西国分寺。そこをあとは線路上にたどって国立駅に到着。長く、わからないことが多い24km程の旅であったが楽しかったのも事実である。

地図も何もないところで人間の感性に頼りながら模索するというのは非常に面白い。しかし、一人でやるのは危険なのでなるべくやらないほうがいい。自分事であるが、1回行った道は覚えてしまう人なのでもうこのルートで歩くことはできない。人工物が多くある現代であるが、半自然的迷路を楽しんでみるのもどうだろうか。自分の今後の展望としてはスマホを触らないで様々な場所を探検してみたいなと感じた。まずは日本で鍛えた後に、海外進出をしたいなと考えている。初めの行先は韓国である。韓国には様々な路地があると思う。地図なしでも様残な美味しいものにもありつくと考えている。スマホなしなのもとても気持ちいいし、歩くのもとても気分がいいものである。口だけにはならず、足をしっかりと動かして有言実行したい。

18 世紀フランスにおける反カトリック勢力出現の要因

山田 圭一郎(経済学部1年)

現在の日本では若者の宗教に対する無関心が顕在化しているが、それはキリスト教も例外ではない。事実、50 年以上前は寮生の過半数がクリスチャンだったのに対して、現在の寮生にはクリスチャンは一人もいない。そして、脱宗教化は日本だけに見られる現象ではない。キリスト教の本拠地ともいべきヨーロッパではむしろ 18 世紀の時点ですでにキリスト教に対して懐疑の眼差しが向けられることになる。1789 年に始まったフランス革命によって大多数のフランス人の宗教だったカトリックが弾圧されたのがその代表例である。例えば、国民議会時代には教会財産の没収や政教条約の破棄が実施され、国民公会時代にはカトリックの信仰が禁じられ理性の崇拝が強要されていた。ここで一つの疑問が生じる。フランス革命でカトリックが弾圧されたということは 18 世紀後半までにフランスにはカトリックに反発する勢力が出現したということになるが、この勢力はなぜ誕生したのだろうか。本文はその要因を3つ指摘したうえで、それぞれの要因に対して論証を試みる。1つ目の要因は啓蒙思想の興隆であると考えられる。まずはフランスを代表する啓蒙主義者であるヴォルテールとジャン・ジャック・ルソーの宗教観を検証したい。小澤亘は『フランス啓蒙思想における「宗教問題」研究の意義について：ヴォルテールとルソーをめぐって』(一橋論叢 105(2)、1991 年 2 月 1 日、p291-299)の中で、18 世紀フランスにおける宗教上の課題は次の二点に分類できるとしている。1点目はカトリック教会の権力を抑制することであり、2点目はキリスト教に代わる新たな信条体系を創り出すことである。同書では、ヴォルテールにとっての1点目の課題に対する解答は思想・出版・信仰の自由を保障することと寛容化が進んだ英蘭の実情を広めて寛容が社会的混乱をもたらさないことを訴えることだったと説明されている。また、2点目の課題に対する解答はキリスト教における非現実的で創作的な要素を排除した宗教を形成することだったと説明されている。具体的には、ヴォルテールはキリスト教の根幹である奇跡・原罪・復活といった概念を否定しモーセやイエスの実在に懐疑的だったと述べられている。一方で、ルソーにとっての1点目の課題に対する解答は次の5つの合意に違反した者を死刑にすることだったと説明されている。5つとは、①強く賢く善意に満ち、未来を予見し配慮する神の存在、②来世の存在、③正しい者の幸福、悪人の懲罰、④社会契約および法律の神聖、⑤宗教的寛容、である。神や来世の存在を認めることを市民に強要しているためこの案が真の意味で宗教的に寛容であるとは一概に言えないが、社会契約や法律という世俗的要素を神聖視する点で間違いなくカトリック教会の権力を制限することになると言える。また、2点目の課題に対する解答は次の3つの基本信仰箇条から成る宗教を形成することだったと説明されている第一および第二の信仰箇条は「善なる神」「正義を意思する神」によって世界に普遍的秩序が打ち立てられていることであり、第三の信仰箇条は「人間はその行為において自由であり、霊的存在すなわち神によって自由なものとして命を与えられている」ことである。ヴォルテールとルソーの思想は、どこまでキリスト教的価値観を維持するかという点で若干の違いがみられるものの理性によって神を把握するという意味において従来のカトリックに対抗しているという点では一致している。そして見逃してはならないのは啓蒙思想家によって提唱された啓蒙思想は彼らに独占されることなく 18 世紀末までには市民階級にまで普及したことである。主な要因としては書籍や雑誌が盛んに出版されるようになったことが挙げられるだろう。『教養のフランス近現代史』(杉本淑彦/竹中幸史

編著、ミネルヴァ書房、2015年6月25日、p19,20)によれば、18世紀フランスの男性市民の識字率は全国平均で5割弱、首都パリでは少なくとも7割近くに上っていたとされている。リテラシーさえあれば誰でもパトロンによって発行された啓蒙思想家の出版物を通して啓蒙思想に触れることができたのである。さらなる要因としてはカフェの急増が挙げられるだろう。同書はこうした出版物の内容について議論する知的サークルに対して具体的な場を提供したのが18世紀に急増したカフェであったと説明している。当局の監視が及びづらいカフェという空間がそれまでタブー視されていた宗教の批判的議論を可能にした側面を無視することはできないだろう。

2つ目の要因は社団国家体制の崩壊であると考えられる。まずはブルボン朝下で確立した社団国家体制がどのようなものであったかについて確認したい。絶対王政を実施するためには王が国内を隅々まで統治することが理想だが、フランスという国の規模を考えるとこれは現実的ではない。そこで、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトにかかわらず社会団体が中世期に獲得した権利を王が改めて承認することで社会団体を支配体制に組み込むことに成功した。換言すれば、特権を付与された社会集団のヒエラルキーの頂点に王が君臨したということである。これが社団国家体制の実態であった。ところが、17世紀後半になると社団国家体制は徐々に解体されていった。要因として次の2点を挙げたい。1点目は、一般市民によって創設された知的サークルの出現である。『教養のフランス近現代史』(p19,20)では、知的サークルの会員は特定の身分や職能を基準に限定されることはなく構成員は平等の立場にあったと説明されている。しかし、この平等で開放的サークルは階層的で閉鎖的な社団国家体制に明らかに反するものである。2点目は、重商主義政策の成功である。同書(p21)によれば、コルベールの積極策はフランスの商工業に2つの影響を与えたとされる。2つとは、①絹および上質毛織物の生産が急増して輸出産業に成長したこと、②フランス革命勃発までフランス西インド諸島、スペイン領アメリカ、レヴァントの3貿易においてイギリスを凌ぐ圧倒的優位を保っていたこと、である。こうした資本主義経済の発展に伴って非市場的と言える職能集団が力を失ってしまうのは想像に難くない。実際、同書(p22)では、恒久的労働者となった職人たちは独自に新たな組織を結成して親方を通さずに仕事をするようになったと述べられている。これは特権的な性格をもった社団が機能不全に陥ってしまったことを象徴している。そして、社団国家体制が破綻して王権が及ぶ範囲が狭まったことは、ブルボン朝と親密な関係にあったカトリック教会(絶対王政を維持するために王の権威は最高位でなければならなかったが、カトリック教会の権威が高まるほど王権神授説に基づいて自身の威厳を強調することができたからである)にとって好ましくないことであった。ブルボン朝への批判がそのままカトリック批判に繋がってしまうからである。折しも、18世紀後半のフランスではブルボン朝に対す人々の不満が強くなっていた。同書(p19,22)によれば、要因として次の4点が挙げられるという。1点目は、オーストリア継承戦争・七年戦争・アメリカ独立戦争といった大規模戦争が相次いでフランスは財政難となったが、テュルゴー・ネッケル・カロンヌによる財政改革がことごとく実を結ばなかったことである。これは、国家収入が売官や社団向けの公債による収入に依存していたため貴族や既存権益階級の反発を恐れた王権が抜本的な改革に着手することに弱腰だったからだ説明されている。2点目は、人口増加に対して穀物生産量が停滞してしまったため、一部の富農が農地を独占し大多数の農民が困窮化してしまったことである。3点目は、1770年代半ばからフランスは長期的な不況に入り穀物やワインの価格が下落してしまったことである。4点目は、1786年に英仏通商条約が結ばれたことでイギリス産の安価な綿製品が流入し、ノルマンディー地方の繊維産業に深刻な打撃を与えたことである。詰まるところ、これらの要因によって王権に対する民衆の不満が高まり、そのままカトリック教会への批判に繋がったということになる。

3つ目の要因は科学理論の発展であると考えられる。例えば、コペルニクスが唱えた地動説はそれまでキリスト教世界で自明視されていた天動説に逆行するものであり、ニュートン力学は世界を支配する自然法則を明らかにして非理性的な神話的要素を解体するものである。これらの科学はフランス発祥ではないが、ヴォルテールなどの思想家を通じてフランスに紹介された。例えば、ヴォルテールの『哲学書簡』(林達夫訳、岩波文庫、昭和26年3月、p100-114)には、「引力体系について」という章がある。この章に書かれている内容を要約すると次の3点のようになる。1点目は、「運動は衝撃によるのではなくては考えられないだろう」(p101)とあるように、物体が運動することは物体に力が働くことに等しいという考えである。2点目は、「それ(物体)の通過した空間はその時間の二乗に比例するであらう」(p104)とあるように、力学は微積分のロジックに基づいているという考えである(補足すると、物体の加速度を時間で2回積分すると物体の座標が得られる)。3点目は、「もしこの力(重力)が存在するとしたら、それは距離の二乗に逆比例して減少するに相違ない」(p104)と

あるように、惑星の運動を引き起こす力の正体は太陽の重力であり、物理法則に従って計算すれば宇宙規模の運動すら明らかにできるという考えである。実際に、105 ページでは地球の円周が1億 2324 万 9600 パリ尺であるという仮定から月の公転周期は 27 日 7 時間 43 分だと推論している。また、J・H・ブルックは『科学と宗教』(田中靖男訳、工作舎、2005 年 12 月 10 日、170 ページ)の中で、『科学の辞典』(1789)を編纂した事業家のジェイムズ・ケアは「一般的な知識と科学への嗜好がヨーロッパ諸国のあらゆる階級に広がっている」と報告したと述べている。ここから、一部の知的エリートのみが理解していた科学理論が 18 世紀末までには社会全体に浸透したことが窺える。では、当時の思想家たちは科学の発展をどのようにして宗教批判に結びつけたのだろうか。同書においてブルックは、カトリック教会を攻撃した啓蒙思想家は、啓示に由来する教義の権威を否定する理神論者、物質と精神の二元性を否定する唯物論者、神の存在を確認することは不可能だとする不可知論者に分類できるとしている。まず、理神論者の立場は次の3点に代表されると説明されている。1点目は、ニュートン力学が惑星運動の原理を解明したようにこれまで神話に頼っていた世界の理さえも理性的に探究できるという考えである。2点目は、科学という思考法によって人間は迷信を排除して物事を理性的に推論することができるようになるという考えである。3点目は、科学知識のように感覚経験に由来しない神の啓示のような直感的な形式の知識は根拠が脆弱であるという考えである。次に、唯物論者の立場は次の3点に代表されると述べられている。1点目はその名の通りこの世には神の介在する余地はなくただ物質だけが存在するという考えである。2点目は、宇宙の物体の運動はすべて偶然の産物であるという考えである。3点目は、精神的な作用は霊的な要素と関連づけなくても理解できるという考えである。最後に、不可知論者の立場は次の3点に集約されるとしている。1点目は、実験によって検証できる科学とは異なり神の存在を検証することはできないという考えである。2点目は、人間が知っているのは一つの世界だけなので比較することによって世界を捉えることができないという考えである。3点目は、自然の秩序を合理的に推論しても神の本質に関する知識は得られないという考えである。総括すると、理神論者は自然法則に基づかない神話的要素を否定するに留まったのに対して、唯物論者は神の存在を明確に否定し、不可知論者は神について語ること自体を拒否したということになる。いずれにしても、18 世紀フランスにおいてそれまで自明視されていたキリスト教の伝統的権威を科学理論の影響を強く受けた思想が解体してしまったのは間違いないと言えるだろう。換言すれば、理神論者・唯物論者・不可知論者という3勢は神の存在に対する態度こそ異なるが、伝統的キリスト教すなわちカトリックを痛烈に批判しているという点では一致しているのである。以上のような検証結果から、18 世紀フランスに反カトリック勢力が出現した理由は「啓蒙思想の興隆」、「社団国家体制の崩壊」、「科学理論の発展」の3点であると結論づける。

私の本棚【金史良の『天馬』を読んで】

金本知也(社会学部2年)

私は前期の授業で朝鮮の歴史と文化という授業を履修した。その時に授業内で読んだ金史良の『天馬』という作品が、当時の朝鮮の時代背景を明晰に表していてぜひ共有したいと思ったので、今回の会報に感想文として掲載する。

この作品では、自らを天才と勘違いしている玄竜という名前の主人公の物語である。彼は幼少期を貧困と絶望(日本と内による搾取と推測できる)の中で育ち、日本統治初期の政府に取り入り、身の丈に合わない栄誉を持ってしまった。物語の中で頻繁に日本かぶれの場面が出てくるので、時系列順に気になった場所を取り上げながら流れを見ていく。まず初めの場面であるが、娼館から出てきた彼が吸っていたたばこの銘柄は「みどり」であった。そして彼がいた娼館は京城(当時一番栄えていた日本人街)であった。この場面で既に、玄竜が日本人になりきろうとしていることが分かる。そして次の、日本人作家田中に会いに行く場面では、内地人が朝鮮に来ると朝鮮人のぐうたらな文学崩れ達が押しかけてくるという話が描かれている。もちろん玄竜もその一人であるが、授業資料⑧-2 にもあるように、この時代の朝鮮の著名な作家たちは朝鮮語に誇りを持って文学を描こうとしている。だがこの文学崩れたちは、日本の作家に取り入って成功しようとしている。そういう意味での、文学崩れという言葉であろう。そして次に文素玉が登場する場面では、茶房という当時の朝鮮社会独自の種族のことが示されている。彼らは朝鮮文化社会の住人であり、恐らく朝鮮総督府により表現の自由が制限され、居場所を失った人々であろう。この文素玉という人物についても本文で説明が入れられ、現代の朝鮮が生み出した不幸な女性と述べられている。ここでの封建制とは恐らく李氏朝鮮のことで、

物語の現在は日本統治の時代であるから統治が始まって約20年以内であることが推測される。おそらく彼女は封建制の打破を目指したにもかかわらず、日本の韓国併合によってその夢が潰え、日本に帰ってきた際にはすでに周りは結婚していて相手がおらず、自分は日本統治時代の新たな恋愛文化の開拓者として名を馳せようとしているのであろう。そして玄竜と文素玉は話すのだが、その内容として日本へ留学していたころの自慢話や、朝鮮語の文学がいかにダメかを説いている。回想シーンでは、文学に真剣に向き合っている朝鮮人たちが、どうすれば朝鮮語の文学を存続させられるのかを必死に議論していた。これらは当時の実際の朝鮮文学の状況を表しているものだと思われる。まじめでない文化人たちは、すぐに日本統治に迎合して自ら培ってきたアイデンティティを捨てているという示唆であろう。または、そもそもアイデンティティなど持っていなかったのかもしれない。それか、この作品自体が当時の朝鮮文化社会への皮肉の可能性もある。また、次の場面で源流の粗暴さについて描かれている。玄竜は低俗な文学を書いて朝鮮文化圏から追放され、ますます野蛮な行為に及ぶようになったが、大村という現地の日本人が後ろ盾にあるおかげで、巡査の逮捕から逃れていた。これは、朝鮮総督府の役人が何より偉く、法が機能していなかったことの示唆であると考えられる。この大村という人物は、朝鮮の愛国思想を深めるために日本から遣わされた人物であり、その彼が玄竜に目をかけたということは、当時の総督府は文学などから朝鮮人の愛国思想を深めようとしていたのだということが分かる。文素玉に逃げられ第3段落になると、当時の人々の状況が端的に描かれた。乞食が増え、ある男は死別した妻との大切な思い出である桃の木を売り、その金で酒を飲み死のうとしていた。授業でも、朝鮮総督府の農業の改革により失業した農業労働者が土地や資産を売却していく状態になったが、同じことが起こっているのであろう。そして、子供の乞食たちも玄竜に群がってきていた。次に玄竜が酒に酔った場面では、玄竜の現状が語られる。愛国主義者は、初めは朝鮮総督府の威勢を借りて大きい顔をすることができたが、愛国者が増えた現在ではその価値はなくなり、朝鮮総督府から見捨てられ、朝鮮をはじめに裏切ったものと知ってのレッテルのみを張られているということであろう。その後田中という日本人作家がやってくる。彼らに群がっていた文学崩れ達は、自らのことを朝鮮における一流であると名乗っていたそうである。それを聞き、田中は朝鮮の文学のレベルが低いと判断し、日本人の力で啓蒙する必要があることを説いた。これは当時の日本人作家の考え方を表している。田中と一緒に飲みに来ていた角井という人物は、内地における玄竜であると紹介されている。この人物は、日本人であるという事実によって優越感を覚えているが、他に何も無いという人物である。また、ここで朝鮮人の青年の説明がされている。悉く臆病でひがみ根性があり、図々しくしかも党派心の強い人間であると述べられている。そして、その全てを玄竜が持ち合わせていると述べられており、ここから玄竜は朝鮮人の代表的な人物として描かれていることが分かる。物語の終盤では、玄竜が文素玉と神社参りに出かけようとするシーンで、たくさんの朝鮮人が神社参りをしている様子が描かれる。その後玄竜は狂ってしまい、自身が朝鮮人ではなく内地人であると叫び、物語は終わる。この物語は、朝鮮社会に居場所のなくなった者たちが日本統治の際に朝鮮総督府に媚びるが、愛国心が一般的になるにつれ朝鮮総督府からも省かれてしまい、孤独となる話である。

『食欲の秋』なんて理想論

高瀬ひなた(社会学部3年)

ご無沙汰しております。社会学部3年の高瀬ひなたです。一橋Yの方々には常識かと思われそうですが、この会報の締め切りは例年10月。そう、秋も深まるころとなっております。今年は例年にも増してありえない猛暑日が続きましたが、何とか秋らしくなってきたかと思われそうです。と、言いたいところでしたが、なんと本日10月15日も夏日でした。昼間は半そでじゃなくちゃやってられません。

さあ本題に入ろうかと思えます。『○○の秋』という言葉はいくつもあります。私にとって秋は何といっても『食欲の秋』に限ります。これは生まれてこの方21年間貫いてきています。読書もスポーツも好きだけど、別に秋でなくても、、、と個人的には思います。まず読書。正直「寒中こたつで」か「暑い日にクーラーの効いた部屋で」の方が幸せな気分な気がする。次にスポーツ。私はバドミントン部に所属していますが、大抵9月からシーズンオフに入ります。したがって毎年『スポーツの夏』。9月はシーズンの終盤戦で追い込みをかける時期ではありますが、最近の9月なんて残暑がきつすぎる。秋なんて名乗らせません。「スポーツの残暑」なら認めます。次に「芸術の秋」これは認めます。私も今学期美術論を履修し楽しんでます。ですが、秋が旬の食べ物の魅力には正直かなわない。秋にしかない希少性という点で、やはり決め手に欠ける。そんなわ

けでなんといっても『食欲の秋』なのです。

ここまで食欲の秋がいかに『〇〇の秋』境界で私的トップランナーであるかを熱弁してきたわけですが、今年食欲の秋ができていない！これは由々しき事態です。おそらく今までの21年間で最もできていない。その原因と苦悩をつらつらと綴っていかうかと思います。

秋は新米の季節なのに新米が高すぎる！！朝ごはん多発

皆さん後存じかと思いますが、先々月あたりからスーパーからお米が消えましたね。やっと新米が出たかと思ったら、なんとまあ高いこと。背に腹は代えられず麺やらパンやらの食事が増えてしまっています。本当はもっと新米を堪能したい！！

忙しすぎる(1)

忙しいことの何が悪いって、自炊する気をそぎます。スーパーでのんびりお買い物する気力と体力と時間をじわじわとそいでいきます。スーパーに行けないうちで旬の食べ物がみられない。去年の秋は週に一回は大好物の鬼饅頭(あまり有名ではないですが、名古屋飯のひとつです。もちもちとした素朴な甘さの記事と、ゴロゴロとしたサツマイモのバランスが最高です)を作っていたのになあ。そもそも今忙しい原因は就職活動です。みんながみんな就活の早期化を嘆いているのに、なぜ就活は早期化しているのでしょうか。就活の何が悪いって本当にQOLが下がります。どうして下がるのかだけで、会報一本書ききれます忙しすぎる(2)他の『〇〇の秋』の自己主張が激しくて、食事が侵食されている。

でも就活だけじゃないよね、なんでそんなに忙しかって、他の活動の数々も何気に『〇〇の秋』に便乗して他の活動の山場を持ってくるからです。まずはスポーツ。うちの部活は初めに書いた通りリーグ戦のシーズンは無事終わり幹部代としての仕事はひと段落、、、かと思いきやそんなことない。試合しないだけで部の行事やオープン大会の予定がどんどん入ってくる。したがって毎週末がつぶれていく。部活をすると当たり前だが、体力がそがれて自炊する気力もそぐ。次に『勉強の秋』。実はゼミが佳境です。今年の調査報告をするためには今が頑張りどころですね。はあ。

就活のせい もはや就活の秋 in 都心のビル

就活のせいで忙しいから、他の時間が取れないっているのはもちろん今の生活を苦しめている一旦なのです。でもそれよりも就活自体にも問題があると思います。具体的には都心に通いつめたくないし、満員電車にも乗りたくない。都心の真ん中で秋らしい景色なんてありやしない。かろうじて紅葉だけど、そもそもビルの中であまり外を見ることができない。これは満員電車でも同じです。こんなこと言っていて、社会人になれるのでしょうか。

そんな感じなのですが、そもそもなぜ今『〇〇の秋』が乱発されているのか。よく言われるのは秋が活動しやすい季節だから。また春と違って日本ではあまり大した節目もなくシーズンのど真ん中という微妙な時期だから。ということでしょうか。『〇〇の秋』って単体なら全部すてきなんだけど、いっぺんに来られるとたまたまものではない。全部義務になって心の余裕がなくなってパンクしそうです。そうこうしているうちにたぶん冬が来てしまいます。秋の食べ物の旬も終わってしまいます。正直今秋はもう厳しそうなので、来年に期待しようと思います。来年こそ学生ラストイヤーを優雅な『食欲の秋』にして見せます。

では今年はこのあたりで筆をおきます。拙い文章をここまで読んでいただきありがとうございました。

信仰と法の交差点:キリスト教法思想の軌跡を探る

高天愛(法学部2年)

自序:大学入学以来、法学部で色々授業をとったが、中でも一番難解だと感じたのは西洋法史に関する科目(屋敷先生と周先生が各々開講するもの)で、「前期指定基礎科目」という位置付けにも拘らず、大学院の授業よりもややこしく取っつきにくいと覚えました。そこで、最近読んだ本や当時習ったもののキリスト教関連の内容を想起し、この機会に改めてキリスト教法観にかんして再考察しようとする動機で、拙文を作った次第です。一見して法哲学っぽいこの法理学分野の内容は自分の専門ではないが、あくまでキリスト教の法思想につき初歩的なイメージとして書かせて頂きます。

1. 歴史的流れ

キリスト教法思想は、その根源を古代に遡れる。中世においてキリスト教徒は皆、共通の宇宙観、つまり新約聖書や初期キリスト教の著述家たちの教えの中に明かされた諸理念を信じていた。他の科学や思想の枝葉と同様、法哲学も教会とその教えによって支配されていた。しかし古来の伝統がこれで途切れたわけではなく、特にプラトンやアリストテレス、ストア派の思想は、キリスト教哲学者たちによって再解釈され、神学と調和させられた。早期のキリスト教法思想の基盤は、実に中世以前の何世紀にもわたってすでに築かれていた：使徒パウロの『ローマ人への手紙』において、すでに「自然法」を扱ったのである。この手紙の中で、「(人の)心に書かれた律法」が指摘され、これは人々が自然に善に向かうよう導くもので、律法の聖典を持たなかった異教徒であっても、内在する道德感に従って善行できるとされた。これは、中世のキリスト教法思想の重要な基盤となり、その後の西洋文明の根底を形成したと評価された。この時期において、キリスト教法思想の基盤は古代の哲学と神学の融合から形成され、特に「自然法」の概念が中世の法体系において重要な位置を占めることになった。

2. 聖書から読み取る

数日前に読んだ、契約の精神を描いた記事を思い出した。200 年もの間、語り継がれてきた米国大統領グラントの墓碑の隣にある 5 歳の男児の墓の逸話を題材に、契約の精神に具現化されたシンプルで毅然とした事理、「何かを約束したら、必ず実行すること」をマッピングしたものだ。一般に、約束を守るというこの優れた精神は、古代ローマで発祥したのだが、国家の起源を説明するために契約を用いたのは、古代ギリシャの哲学者エピクロスから端を発するとされている。しかし、聖書の記載から明らかに、どちらの意味での契約も、上記以前に古代イスラエルに存在していたのである。最も、キリスト教法思想の核心には、聖書に基づく契約の概念が深く関わっている。これらの契約は、単なる合意の枠を超えて、宗教的、道徳的な義務としての性質を持ち、キリスト教社会の法律思想の基盤を形成したと言える。特に重要なものとして、『創世記』に記されているノアとの契約、アブラハムとの割礼に関する契約、そしてモーセの十戒が挙げられる。ノアとの契約は、神と人類との最初の契約であり、大洪水後に神がノアに虹を見せて立てたものである。アブラハムとの契約では、イスラエル民族が割礼を行うことで神の恩恵を受けるという約束が交わされた。また、モーセの十戒は、イスラエル人がエジプトからの脱出を果たした後に与えられた法律であり、神と人類との重要な契約として、彼らの社会生活の基盤となった。他方、聖書には人々の間で交わされる契約も描かれている。例えば、『エレミヤ書』には土地の売買契約が記され、この契約は、契約書の書面形式、証人の存在、取引の計量方法など、契約の基本的な要素が含まれている。更に国家間の契約も記録されており、ソロモン王は、レバノンのティレの王ヒラムと交わした木材の供給と穀物の提供に関する協定がその一例だ。これで聖書は、当事者の合意よりも、外面的な形式や荘厳な儀式に重点を置いた契約・請負のプロセスを描く。意思表示や執行可能性という法的観点から分析すればこれらの契約はまだ初期の粗雑な形であり、「形式的・儀式的な殻から徐々に切り離されていく」ように発展していくには至っていない。然し、契約精神から見て、全ての儀式は言論頭れの一形態で、誠意を伝える方法だ。聖書が儀式や契約の形態に至上の尊崇の念を抱くのも、人々が契約精神に献身していることの反映なのであると考える。次に、聖書における「法典」についてだが、前述したように、モーセの十戒は神と人類の間の契約であると同時に、ハムラビ法典に次ぐ二番目に偉大な成文法典ともみなされている。整合性と完備を求める現代的な意味の法典に比べ、モーセの十戒は独立的で簡潔だ。たった 10 個の要素からなる単純明快な用語で、古代の慣習を法の形で固定化し、人々の生活信条にまで発展させた。もっとも、『十戒』がクラシックとされる理由は、立法技術の巧みさ故ではなく、人間が精神性を持った一種の生命存在として、信仰を持つべきことを世に説いている点にある。実際、モーセの十戒だけでなく、聖書全体が信仰の重要性と力を強調し、そして法律も信じられなければ成らないのである。(西洋の法廷では、証言する者はみな聖書に手を置き、自分の発言が真実だと神に対して誓うことが義務づけられている。この儀式的な行為は、まさにモーセの十戒の第 9 条に由来する。信仰は人々に恐るべきものを与え、それによって束縛されていると感じさせる。むしろ、法律を守るとは個人的な功利的目的のためだけに必要なのではなく、従うこと自体が人間としての道徳的義理・責務であるという信念こそ、あらゆる人が自分の内面に確立すべきものであろうと)。

3. キリスト教法思想の二つの時期

キリスト教法思想史は、主に教父学派と経院学派の二つの時期に分けられる。教父学派の代表であり中世神学者の中で最も大きな影響力を持つと言われるアウグスティヌスは、キリスト教の基本教義を体系的に整えて、そこには法的な考え方が豊富であった。彼の創世説、原罪説、終末審判説、三位一体説は、キリスト

教教義を輪郭づけた。彼は、人類が墮落する前に「自然法」が完全に実現されていたと考えた。人々は神聖で正義に満ちた状態で暮らし、自由で平等な社会が存在したが、墮落によりその理想は崩れ、法律や国家、財産制度が生まれたと述べた。教会は神に由来する永久法 (lex aeterna) の保護者として、国家に対する絶対的な権威を持つと主張した。国家は教会を擁護しその命令を遂行し、世俗法 (lex temporalis) の適用によって人々の間の秩序を維持せねばならない。彼によれば、世俗法のある規定が明白に神の法(永久法)に反する場合、それらは何の効力も持たず、否定されるべきものである。遠い将来のある時点で、地上の国 (civitas terrena) が神の国 (civitas dei) に取って代わられることをアウグスティヌスは望んでいた。全ての人が忠実で敬虔な国と考えられるその天国では、神の永久法がとこしえに君臨し、アダムの子により汚された人間の原初的な本性も、その完全な美しさと至誠を取り戻されるはずだとしたのだ。一方、経院学派の代表人物トマス・アクィナスは、アウグスティヌスの思想を発展させた上でアリストテレスの理性哲学を融合させ、キリスト教神学をより精緻に体系化した。彼は法律を「永遠法」「自然法」「神法」「人法」の四つに分類し、自然法が永遠法に従い、人法がそれに従うとした。この理論により、神の意志が法律においてどのように表現されるかが説明され、キリスト教法思想の完成形が示された。

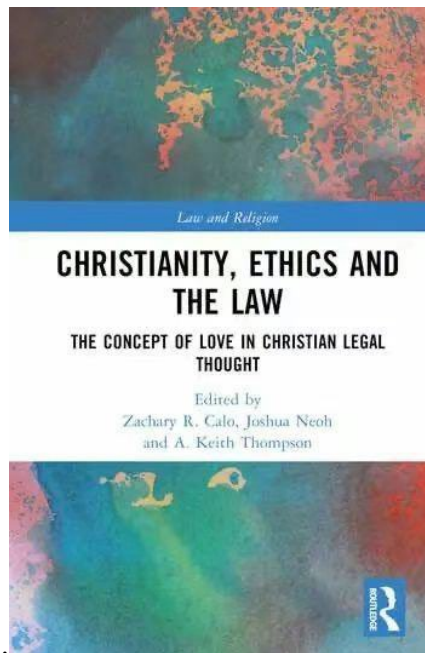
4. 近世におけるキリスト教法観の遺産

近代法は一見、民主主義や平等、自由を基盤にした世俗的な制度に見えるが、実際にはキリスト教法思想との深い関連性を持っている。中世のキリスト教は、禁欲主義を中心とした哲学体系を発展させ、その思想は『聖書』を基盤にしていた。マックス・ウェーバーが指摘するように、この禁欲主義は資本主義の発展に貢献し、法律体系の中でも特に私有財産の保護を強化した。また、イギリスの判例法においても、個人の意志が強調されており、14 世紀に成立した衡平法は「正義の実現」という、倫理に基づく正義感を反映している。法が個人の権利を守るものとして機能するのは、キリスト教における道徳的責任や信仰の影響を受けているからである。生産力の発展によってもたらされた生産関係の革新という要素を別にし、観念上のインパクトを追及するならば、宗教的世界観が近代法律の起源に寄与することを見過ごせない。法律が単なる規制ではなく、社会正義を実現するための手段という意識が生み出されることは、キリスト教法観が現代法に与えた重要な影響の一つであるといえる。これが実際に浸透され、人々は、法律をただの規制とみなすのではなく、正義の具現化として受け入れ、その遵守を神の意思として尊重した。その結果、近代法は信仰に支えられた道徳的基盤の上に構築され、個人の権利や自由を守る法律体系へと発展していた。

以上を踏まえて、キリスト教法思想は古代から中世、そして近代に至るまで、法に対する倫理的基盤を形成し続けてきたのである。信仰と法の交差点において、正義や道徳に基づいた法学問の発展が可能となり、現代の法体系に大きな影響を与えたこれ自体が、単なる歴史的遺物ではなく、現代の法制度にも深く根付いている重要なトレジャーであると見受けられる。

§ 最近読んだ本のお薦め:

① Christianity, Ethics and the Law: The Concept of Love in Christian Legal Thought (キリスト教、倫理、そして法:キリスト教法思想における愛の概念.) . Edited By Zachary R. Calo, Joshua Neoh, A. Keith Thompson, Christianity, Ethics and the Law: The Concept of Love in Christian Legal Thought, Routledge,



Dec 2022.

- ② The Lawyer's Calling: Christian Faith and Legal Practice. (弁護士の天職: キリスト教信仰と法律実務.)
 Edited By [Joseph G. Allegretti](#).
 ③ 正義と法: キリスト教法倫理の基本線 (Gerechtigkeit und Recht: Grundlinien christlicher Rechtsethik)
 ヴォルフガング・フーバー著 佐藤司郎, 木部尚志, 小嶋大造訳. 新教出版社, 2020.3

良書の紹介

平田華英(法学部3年)

大学に入学してから何度か本を読む機会が与えられましたが、読んでいて面白いと思ったおすすめの本を紹介していきたいと思います。

まず一冊目は、「哲学入門」(戸田山和久:ちくま新書)です。本書を手にとったのは、本屋の新書コーナーを眺めていて、ふと目に留まったのがきっかけでした。開いて見ると、哲学書とは思えない程軽快な語り口で書いてあり、これなら哲学の知識のない自分でも飽きずに読めそうだと思います。

本書の特徴に、筆者が唯物論の立場を取っていることが挙げられます。唯物論とは、「この世はようするに、物理的なものだけでできており、そこで起こることはすべて煎じ詰めれば物理的なもの同士の物理的な相互作用に他ならない」という立場の事です。この立場を取ると、「意味」「情報」「目的」「機能」「価値」「道徳」「意思の自由」「美」「人生の目的」といったものは、世界に存在しないとするのが妥当な結論であると言えます。しかし、これらのものは本当に世界に存在しないのでしょうか。筆者はこれらの存在を「ありそうでなさそうでやっばりあるもの」として、どうやって唯物論的世界観に書き込むか、ということを哲学的課題として本書で論じています。

「哲学」というと、社会学や神学的なアプローチをとる、よくわからない小難しいものといった印象がありますが、科学や物理といった自然科学的な視点から世界を解釈する手法は、私たち現代人の感覚に馴染みやすいものだと思います。戸田山先生の著作は、気さくで話しかけてくるように書かれており、随時ユーモアも織り交ぜられているため、肩の力を抜いて読むことができます。他にも「論文の書き方」「思考の教室」等の学生の役に立つ著作があるので、こちらもおすすめです。

二冊目は、「関係する女 所有する男」(斎藤環:講談社現代新書)です。斎藤環先生は医学博士であり、ひきこもり現場に精力的に携わる精神科医でもあります。他にも「承認をめぐる病」「ヤンキー化する日本」「なぜ母殺しは難しいのか」など、日本社会のサブカルチャーと精神病理の関係性を論じた著作を執筆しています。本書は、男女二元論の立場から、「おたく」のジェンダー格差、非婚化、ひきこもりや過食症といった精神医療について述べています。こうして精神分析の角度から出発するジェンダー論は、社会制度の問題点(例え

ば賃金格差や大学進学率、女性政治家の数、日本のジェンダー指数の低さ等)から出発するものとは異なり、かといって「女脳 男脳」のように脳の生物学的性差といった「生物学」に陥るわけでもありません。また、婚姻という制度になぜ人は固執してしまうのかという疑問も呈しています。著者は、本書の目的を、「ヘテロセクシズムの罠にはまらないため」と称しており、これが我々人間のすべての欲望の根源にあるといっています。従って、この最強の「イデオロギー」から抜け出すことも困難だが、逆にジェンダーの存在を完全に否定しシニシズムに嵌ってしまうことのないようにする勉強になる本です。タイトルにも斎藤先生の配慮が垣間見える所です。

三冊目は、「ドンキにはなぜペンギンがいるのか」(谷頭和希:集英社)です。この本は、Youtuber である、タイガキングダム(2024年9月26日現在登録者数29.7万人)のチャンネルで紹介されており、興味が沸いて購入したものです。ドン・キホーテという特異なスーパーマーケットがなぜここまで日本の中で定着・拡大したのか、都市論や経営理念から読み解く面白い本です。「おもしろい街はない。おもしろく街を見る目があるだけだ。」とい著者の指導教員の言葉は、都市を観察する上で重要な視座を与えているのではないのでしょうか。ここYMCA寮で国立という街を生活している以上、この街をどう面白く捉えるか、今後の日常生活で実践していきたいと思います。

四・五冊目は、「ちぐはぐな身体」(鷲田清一:ちくま文庫)「想像のレッスン」(鷲田清一:筑摩書房)です。同一作者によるもので、似通った点もあるので纏めて紹介させていただきます。どちらもエッセイ形式で哲学的な問いが綴られており、私は特にファッションと現代美術に興味があるため、その部分を断片的に読みました。例えば、人が身体にピアスを空けるようになったのは、コンビニエンスストアが都市の至る所に見られるようになった1980年代からで、その都市の浮遊性、押され流されるといった感覚が、反抗として身体に杭を打つ行為として現れてきた、といったものが挙げられます。鷲田先生は、日常を生きていく中でご自身の感じられたこと、思索されたことを、より深い解像度で考える、一度立ち止まって想像してみるということを大切にしており、雑に生きてしまう日常生活に、もう少し想像力を高めるのに最適な一冊であるといえます。

以上をもって、私のブログとさせていただきます。これから、寮生の方々と様々なお話をさせて頂くのが楽しみです。今後とも宜しくお願いいたします。

バーチャル YouTuber とは？

松尾圭祐(法学部4年)

2021年秋、大学一年生で暇を持て余していた私は YouTube で色々な動画を漁っていたところ、ある動画がお勧めにあがってきた。それは、バーチャル YouTuber のグループの一つである「ホロライブプロダクション」に所属しているタレントである兎田ぺこらと大空スバルの Minecraft というゲーム配信の見どころをまとめたいわゆる「切り抜き動画」であった。これまで全くとって良いほどバーチャル YouTuber という存在に興味関心を抱いていなかったが、なぜかおすすめにあがってきたのと、浪人中に友人がお勧めしてきたものであったのもあり、見てみることにした。動画時間を気にせず視聴していたが、あっという間に見終わって確認すると、1時間30分強、軽い映画並みの時間を退屈することなく楽しんで視聴することができた。内容は、自由度が高いゲームである Minecraft 内で兎田ぺこらと大空スバルがお互いに悪戯をしてその仕返しをするのを繰り返すというプロレス的な掛け合いであるが、ちょっとしたコメディを見ているようで非常に面白かった。配信者としてもともと備わっている話術やどうすれば配信が盛り上がるかなどの力量だけでなく、ゲーム画面と共に表示されているバーチャル YouTuber としての姿であるアニメ絵は、生身の人間ほどではないものの一定の範囲で表情を変えられることができ喜怒哀楽が明確にわかり、それにも注目がいった。そして、バーチャル YouTuber の面白さを知った私は、過去に友人から教えられたホロライブ所属タレントの知識をもとにいろいろ動画を漁るようになった。

このようにして、主にホロライブなのだが、バーチャル YouTuber (以下「Vtuber」とする)にはまっていった私は、暇さえあれば切り抜き動画だけではなく数時間もある配信者本人の過去配信のアーカイブを時間をかけてみるようになってすっかりホロライブに魅了、いわゆる「箱推し」になっていった。

その中で、「Vtuber への誹謗中傷」が話題になったニュース記事の見出しを見て、法学部である私は興味を抱いた。名誉毀損が成立するのは「特定の人・団体」に対するものの場合であるが、それでは姿も本名も晒していない Vtuber は「特定の人」にあたるのか、ただ単に「配信者である Vtuber」に対しての言葉なのであ

て、その配信を行なっている生身の人間、いわゆる「中の人」に対してではないと言えるのか、と言ったようなさまざまな検討内容が出てきた。さらに調べてみてもニュースになっていたものも含めて裁判例の蓄積も少なかったため、これを研究してみたいという思いで、ゼミを選択し卒論のテーマもこれを内容にした。研究の中で、「Vtuber に対する誹謗中傷」についての文献があまり少なく少し難航しており、法的観点からとは少し離れるが、最近、歴史の浅い Vtuber ではあるが、Vtuber の存在そのものについての研究も進められ、「Vtuber の哲学」と「Vtuber 学」という二つの書籍が出版された。これは、前述の通り法的視点とは異なるが、一步下がって、Vtuber そのものがいかなる存在なのかを検討することで、Vtuber に対する名誉毀損について考える一助になると考えた。この二つの書籍を一通り読んで、Vtuber についてどのような解釈の仕方があるかかなり興味深い内容であったので、今回は、この二つの書籍に加えてそれに関連する文献を踏まえて、表題にもある通り「Vtuber はいかなる存在か」をいくつかの説に分けてみていこうと思う。

1. 予備的考察

まず、今日一口に Vtuber と言っても、その数は数千もありそのあり方はそれぞれによって異なる場合が多い。そのため、今回議論していく Vtuber の範囲を限定するにおいて、Vtuber を類型化する。ここでの類型化は「Vtuber の哲学」を著した山野に依っており、前期のように Vtuber にはさまざまなあり方があり、一定の形で類型化することができないと考えられ、今回の類型化はあくまで一つの例である。

類型の一つ目は、「配信者タイプ」である。配信者タイプの Vtuber は現実世界に生きる配信者が元々活動していた名義の配信者と同一の存在であるという提示を公式に行いながら Vtuber 活動をしている者である。例を挙げると日本を代表する YouTuber である「HIKAKIN」はある企画の中で Vtuber の姿であるアニメアバターとなり、短時間であるがその姿で動画を撮影していた。その他にも、ゲーム実況者である「ガッチマン」は中の人と同じであることを公表しながら「ガッチマン V」という名義で活動している。

もう一つの類型は、「虚構的存在者タイプ」である。アニメやゲームなど虚構世界を出自とするキャラクターがそのままその世界を出て、キャラクターの設定や世界観を保ったまま Vtuber として活動する形のものである。これも例を挙げるとゲームアプリ「ウマ娘プリティーダービー」のキャラクターである「ゴールドシップ」は YouTube 上で自らが登場するアプリの宣伝担当としてゲームの最新情報などを告知している。

そして、これらの二つの類型に当てはまらない Vtuber が存在する。それが、今日 Vtuber 業界をひっぱっているホロライブやにじさんじをはじめとした企業に所属している Vtuber だといえる。私が Vtuber にハマるきっかけになった「兎田ぺこら」を例に挙げると、彼女は「HIKAKIN」のように中の人が何者かが公式には明らかにされておらず、一方で兎の姿がモチーフとなっているものの、何かしらの作品から生まれた存在ではない。これを「第三のタイプ」とよぶことにする。

このように配信者タイプより人間味がなく、虚構的存在者タイプよりキャラクター性がない Vtuber を今回の議論の対象とする。両者のように人間とキャラクターとの間に存在する Vtuberこそ誹謗中傷の際に、「特定の人」の同定可能性が問題になるであろうし、実際裁判例で原告になっているのはこの第三のタイプの Vtuber が全てである。

また、Vtuber がどのような存在か説明するにあたって、実際の Vtuber を例に挙げると、中の人の実名が公表されていない以上、「兎田ぺこら」と「兎田ぺこらの中の人」のように示すことになり、文面上わかりにくい表記になるため以下の架空の Vtuber を考えることにする。

生身の人間である「秋山花子」は猫のような見た目の 2DCG のアバターを用いて、化け猫である Vtuber の「尾無ティプ」としてライブ配信などの活動を行なっている

このようにすれば、中の人である「秋山花子」と Vtuber である「尾無ティプ」で区別が付きわかりやすい。

それでは、予備的考察もこの程度に何人かの論者の説をみていこうと思う。

2. 配信者説(篠崎)

これは Vtuber は中の人と同一であるとみとる説で最も単純かつ明快な見方である。Vtuber としての姿はある意味「衣装」で、その名前は「芸名」と捉えて一般の芸能人と同じようなものだと言えるだろう。例えば、実際の Vtuber の話を取り上げると、兎田ぺこらは同じホロライブ所属タレントである湊あくあと一緒に蟹を食べにいったという話は、Vtuber の配信上で Vtuber の姿として話題にあげたことがある。これは、うさ耳をつけたツインテールの女の子がメイドの女の子と一緒にご飯を食べたと認識するのではなく、Vtuber という活動は中の人を前提としているものとし、現実世界で実在する中の人同士でご飯を食べにいったと解釈する。このように、「Vtuber＝中の人」という見方をすることで以下のことの説明が容易になる。

(a)中の人の出来事とVtuber の出来事的一致

上記の例で挙げたように、うさ耳の女の子や悪魔、天使などの Vtuber が我々と同じような日常生活をしていることを話しても、中の人だと同一視することで不可解な結論を導くことなく簡単に説明できる。

(b)Vtuber の名前と中の人の名前との代替

大空スバルの中の中の人、あるアニメで声優として出演したことがある。その際クレジットに表記されていたのは「大空スバル」という表記である。これは、「大空スバル」という存在をキャラクターのように架空の存在として見做しておらず、「大空スバル」は芸名であることを示唆していると言える。

(c)誹謗中傷被害の現実性

この配信者説をとると、Vtuber への誹謗中傷は、架空の人物に対する中傷ではなく、現実にいる中の人に対する中傷であるとみることができ、被害が認められやすくなる。実際多くの裁判例の判旨からは配信者説によっているようなことが読み取れる。

(d)モデル交換・扮装事例における中の人の権威

Vtuber は配信の企画において、Vtuber のモデルを交換して配信することがある。例えば、ホロライブ所属の戌神ころねと宝鐘マリンはお互いのモデルを交換して配信を行っていた。この時、「宝鐘マリンの中の中の人」が戌神ころねのモデルに入った」と認識され、そのモデルの言動はモデルそのものの「戌神ころね」の者ではなく、さらに新たな人格としての「戌神ころね」でもなく、宝鐘マリンの言動として捉えられる。これは、中の人によって Vtuber の同一性が決定されていると言える。

さらに、キズナアイの担当声優が複数人体制になった時には、鑑賞者からの反発があったことから考えると、Vtuber と中の中の人は一対一の関係であり、中の中の人が Vtuber の本質だと言える事例である。

以上のように、配信者説には多くの利点があるが、問題点もある。「Vtuber＝中の中の人」を成り立たせているのであれば、尾無ティブは化け猫であるがそれは、秋山花子にも同じことが言うことができ、「秋山花子は化け猫である」という結論になってしまう。ただ、これは次のように考えれば解決できるであろう。いわゆる「中二病」の人を想像してみるとわかりやすいかもしれない。彼らの中には、何も根拠がないのに、「俺の右腕の傷が疼くぜ」だったり、「俺は世界を影から支配している」だったりと言ったような言葉を口にしている者がいる。これはある特定の人物を模倣するつもりで言っているのではなく、まるで本当にそのような力があることを信じていると思われる。この時、自分自身のロールプレイをしている状況だといえる。そのため、中二病であった過去を大人になって黒歴史として掘り返されるのには恥を感じている。他にも類似した例を挙げると、避難訓練の際には、実際に災害は起こっていないのに、自らを災害が起こっている状況においた自分自身のロールプレイをしているといえる。

このようにして考えると、秋山花子は、自分が化け猫である状況の中で、「尾無ティブ」という自分自身を演じているということができ、論理的には矛盾は生じていない。

3.ペルソナ説(富山)

この説は、結論としては配信者説と同じく Vtuber を中の中の人と同一とみなす説である。ただ、その論理は、我々と同じように、家族や友人、後輩、先輩、教師など様々な人間関係やコミュニティによってそれぞれ現れる人格(ペルソナ)が異なるように、Vtuber での配信活動でも、新たな「Vtuber としての人格」が現れていると解釈している。

4.キャラクター創造説(松本)

これは、中の中の人を漫画家や小説家と同じように捉えて、モーションキャプチャーによるモデルの動きや、自らの話術やゲームの腕前で Vtuber という「キャラクター」を創っていくとみなす説である。

ただ、Vtuber を架空のキャラクターである存在と簡単に結論づけられず、その Vtuber の配信から中の中の人の性格や日常生活事情を知ることができ、それに共感などをし、配信を視聴している者もいる。この事象をどのように解釈するべきなのかを以下で検討していく。

以下の図1はホロライブ所属の癒月ちょこと轟はじめと一緒に寿司屋に行った際のエピソードの切り抜きを漫画調にした動画の一部であるが、癒月ちょこが「轟はじめと一緒に寿司を食べに行った」という言葉を聞いて背中に悪魔のような翼の生えている魔界学校の保険医が、現実世界において寿司屋に行くということを了解するのは不可解である。しかし、このような切り抜きが存在していて、さらに他の Vtuber についても同じような切り抜き動画が存在していて、ファンアートまで数多く存在している。このような、非現実的な解釈をするのは Vtuber 癒月ちょこの配信がそのように創造するような世界観でなされているからである。その Vtuber のモ

デルが現実の人間のように動き、表情を変えることから、そういう想像をさせるのが自然だというように促される。一方で、現実問題そのようなことはあり得ないという認識もあり、想像する上でギャップが生じる。そして、そのギャップは、常識などから、そのような話をしている Vtuber という「キャラクター」を創造している中の人の出来事だと想像することができ、中の人の行為だと結論づけることで埋めることができる。この想像の過程によって Vtuber として話している日常生活のことは中の人に帰属するものとして捉えられる。



図1

このような、Vtuber のキャラクターを創造する行為の特殊性から、Vtuber を創造しているのは、表情や身体を動かしたり、配信でも台本が用意されることなく、中の人が配信内容を考え、雑談内容も考え、ゲーム配信では、中の人のゲームスキルが反映されるなど、中の人が Vtuber という「キャラクター」を創造する寄与度がほとんどである。そのため、Vtuber 活動は中の人自身の全人的な活動としての性格を帯びることから、誹謗中傷が中の人に対するものとみなす要因の一つになる可能性がある。

5.「身体」「魂」説(本間)

中世の哲学者が、人間を質料を有さず非物質的な生命原理である「魂」と、物質的な「身体」とから複合されたものであると考えたのを応用して、キャラクターとして架空のものである Vtuber のモデルを「魂」と見做し、他方で中の人を「身体」と見做して、これら二つの要素が合わさることで Vtuber という人間ともキャラクターとも言えない第三の存在が生まれると解釈した見方である。

このような解釈の方法をとると、「尾無タイプ」の化け猫であるという説明は、キャラクターとしての「魂」からの側面から説明することができ、コンビニに行ったり、飲食をしたりと現実味のある言動は人間としての「身体」の側面から説明することができ、「魂」と「身体」が複合した存在である Vtuber はそれら二つの側面を持っているため、矛盾なく説明ができています。

6.制度的存在者説(山野)

「大学」や「紙幣」、「国王」のように単に自然的に存在するものではなく、人間の認識にのみ依存する対象でもないものとする考えであり、ある者が一定の条件を満たすことによって Vtuber というキャラクターとも自然人とも異なる存在が誕生するとした。

その条件として「Vtuberとしてデビューし、Vtuberとして活動状態にある」という条件を満たす配信者(いわゆる「中の人」)が、Vtuber 文化において「Vtuber」という地位を有し、Vtuber としての機能を遂行する」という宣言を行うことで成立させるとした。

このままでは曖昧すぎるので「Vtuber として」という記述がどういう意味なのかを「Vtuber のアイデンティティ」の側面から検討する。

まず、Vtuber としてのアイデンティティができるきっかけになるのが、モーションキャプチャーを使ったモデルとの身体の動きの連動をした時である。モーションキャプチャーを使って、自らが右手を上げれば、Vtuber のモデルが右手をあげ、ウインクをすれば、そのモデルもウインクを巢と言ったように映ることで、Vtuber のモデルを見て「これは私だ」と認識するようになる。これが「身体的アイデンティティ」である。

そして、Vtuber としての活動の中では、尾無タイプを例に挙げると、「秋山花子」と呼ばれても、本人は秋山花子で間違い無いのではあるが、その呼びかけには応答せず、「尾無タイプ」という声かけに対してだけ応答する。これは他者からの呼びかけに対して、「尾無タイプ」に他ならない存在であることを示し、それを義務

として課すこと生起されるアイデンティティがあり、これを「倫理的アイデンティティ」という。
以上二つのアイデンティティにより Vtuber 活動を積み重ねていく中で、過去の活動内容からどのような配信を行うかを決定したり、どのような配信者を目指していくかを決定したりする。このように、Vtuber 活動の中で、自らの立ち位置を認識するようになる。これを「物語的アイデンティティ」という。
これら三つのアイデンティティが相互に結びつくことで、「Vtuber としての」アイデンティティが形成され、自ずと中の人とのアイデンティティからは離れていくようになる。このようにして、第三の存在としての Vtuber を解釈している。

以上が、Vtuber をどのように解釈するかを哲学的に考えた様々な説であったが、それも説得的であり優劣がつけ難い。Vtuber 業界というのは2016年から急成長した、歴史が浅く、特殊な文化であるのである特定の結論を出すのは早計であろう。実際、それぞれの説を検討してみて Vtuber によって説得的である説は異なるであろう。例えば、中的人是男性で、Vtuber のモデルは女性であるという形の Vtuber は、活動を重ねるにつれて自らのモデルの可愛さの見せ方に気づき、もっと「可愛い」と視聴者に言ってもらうために日々研究を重ねている。このような例を考えると、明らかに中の人とのアイデンティティとは分裂しており、制度的存在者説に親和的であるといえる。また、そのような「可愛い」キャラクターを作るという意味で、キャラクター創造説とも親和的である。一方で、ホロライブやにじさんじのような企業に所属している Vtuber は自らに課せられたキャラクター設定なるものも忘れ去られるぐらい中の人を想起させるような言動をとっており、極端を言えば、中の人に言及する者もいたり、中の人存在を前提にしたような活動内容であるため、配信者説と親和的である。

私は、様々な説がある中で、ホロライブのファンである点、Vtuber への誹謗中傷への考え方が容易な点、事実裁判例もその説によっている点、以上の3点から配信者説に重きを置くことにした。さらに、Vtuber は中の人姿や名前は隠されたままで活動を行うものの、声だけは中の人を隠すことはできない。たとえボイスチェンジャーを使ったとしても口調から中の人同一性がわかる場合もある。ゆえに、Vtuber としての活動には中の人存在を完全に隠すことができないという点からも配信者説が有力だと考える。

ただ、私はこれらの説について考慮すべき点の一つあると考える。それは、「視聴者の存在」である。Vtuber は活動の性質上、生配信が多く、リアルタイムで流れるコメントとのコミュニケーションでも配信が成り立っている。見られるための存在者である以上、そこで形成されるアイデンティティは視聴者からのコメントにも左右される可能性があり、Vtuber の存在を説明するには、これまで見てきたような説以上に複雑に多くの要素が絡み合っていると考えられ、今後の研究に期待する。

〈参考文献〉

山野弘樹『Vtuber の哲学』(春秋社、2023)
岡野健/山野弘樹/吉川慧 編『Vtuber 学』(岩波書店、2024)

海外だより(L S E・ロンドン)

吉田元喜(経済学部 3 年)

こんにちは。長期海外留学制度を活用し、渡英してから本日 10 月 15 日でちょうど 30 日が経ちました、経済学部 3 年の吉田元喜です。

来年も会報のテーマも留学体験記になりそうですが、今の私の生活の中で最も文章に残したい事柄といえはやはり留学の経験になるので多少の差別化を図るためにも今年の会報ではイギリスに来て感じた文化の違いについて紹介し、具体的な学校生活や留学で得られるもの、総合的なアドバイスなどについては来年に回そうと思います。

どこに行っても人種、考え方が多様

少し古くはありますが、財務省のデータによるとロンドンの人口に占める白人英国人(White British)」の割合は 43.4%、「その他の白人(Other White)」は 14.6%となっています(2019 年時点)。このことからわかるようにロンドンにはイギリス人やヨーロッパ人の街というよりも人種のサラダボウルといわれるアメリカに近い街です。

街を歩いていても実際に 4 割強は非ヨーロッパ圏の人のように感じます。

この傾向は大学生にも表れており、ロンドン大学を構成する著名な大学の一つである U C L(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)の留学生比率は約 60%、KCL(キングス・カレッジ・ロンドン)は約 40%、私が通う L S E は 70%と非常に多様性に富んだ学生構成となっています。私の住んでいる寮ではやはり多い中国人やシンガポール人、韓国人の他にもモーリシャスというマダガスカルの隣にある初めて名前を聞くような国から来ている友人やブラジルから来ている友人など多様なバックグラウンドを持つ人に会うことができました。

Social(社交)の場がたくさんある

イギリスに学生としてきていて感じることに学生の social(社交)の場が非常に多いということがあります。イギリスの飲酒年齢は 18 歳であるため大学生は入学時点でほとんど飲酒が可能であり、また、ナイトクラブやパブも学生の間では非常に人気で学期開始直前の1週間は新入生歓迎パーティーが毎晩ナイトクラブで行われていました。日本で学生をしているとナイトクラブやパブは大学生活に慣れてこないとなかなか行く機会がないと思うので実際に入学する前から友達と気軽にクラブに行くというのは大きな違いだと感じます。また、パブや bar も非常に身近で、それほど大きなキャンパスではない LSE でも私が知っているだけでも 4 つはパブ、bar があり昼間から学生がお酒を飲み交わしているのを目にします。これは LSE が大学院生の比率が多い大学ということも一因としてあるのかもしれませんが、街を歩いていてもテラスでビールやワインを飲んでいる人をよく見かけるのでイギリスという国においてお酒を飲みながら友人と会話を楽しむというのは日本よりもよほど身近なのだろうと感じます。

また、こちらでは人に声をかけることへの抵抗感が薄いように思います。というのも人種が多様とはいえやはり同国出身の友人を作る人が多く中国人は中国人の、スペイン人の集団でいることが多いため、一人での時の彼らと仲良くなると結果的にそのグループ全員と知り合うことになり、知り合いの輪が加速度的に広がっていくからです。自分の場合は学生証を受け取る際に前に並んでいた人に声をかけた結果今では大学ではスペイン人の友人が一番多くなっています。

他にも大学や寮、地域主催のイベントが非常に豊富です。例えば L S E では毎週、毎日講演会やセミナーなど何かしらのイベントが開催されており、自分の興味関心を上げるとともに似た関心を持つ友人を作ることができます。また、寮や地域のイベントも豊富で寮は入学してからこれまでほぼ隔日ペースで何かしらのイベントを主催しており、地域のイベントでは日本祭りというものに参加しました。

イギリス料理は不味くない

最後に、これは特に日本との違いというわけではないのですが、イギリス料理は別に日本で言われているほど不味くないということを強調しておきたいです。かれこれ1ヶ月滞在していますが本当に食べられないと思った料理はブラッド・プディングという豚の血をベースに色々混ぜたソーセージのみであり、寮で作られる料理はどれも美味しいものばかりでした。実際のイギリス料理として有名なフィッシュ&チップスも日本にいるときは油でギトギトで食べられたものじゃないと散々脅されましたが実際に現地のお店で食べてみても全くそんなことはなく、留学前にインドネシアのホテルルームサービスで注文したものよりもよほど美味しかったです。また、少々マイナーなイギリス料理であるコーニッシュ・パステイという牛肉やじゃがいも、玉ねぎをパステイに包んだ料理は若干肉じゃがのような味がして(醤油は使ってませんが)とても美味しかったです。

基本的に物価が高いため外食はお勧めできないものの、そんな中でおすすしたいのがバゲットなどのパン類で、これらは比較的安価な上日本のものよりもずっと美味しいので推しやる機会があったらぜひ試してみたいです。私は最近では白米党から完全にパン党にシフトしています。

確かに日本食と比較すると料理の手間や味わいの奥深さなどは劣るものの十分においしいということを最後に伝えて今年の会報は終わろうと思います。

ご一読ありがとうございました。

5 年一貫プログラム体験記

樋口祐熙(社会学部 4 年)

こんにちは、社会学部 4 年の樋口です。何を書くか迷っていましたが、最近一橋大学で始まった制度である学部・修士課程 5 年一貫プログラムの体験記はまだあまり世に出ていないと思いますので、この機会に記録に残そうかと思います。

1. 5年一貫プログラムとは何か

5年一貫プログラムとは、学部4年次にスタートする選抜プログラムであり、学部と修士課程を合わせて5年間で修了できる権利を得るプログラムである(通常は6年間)。学部4年次に大学院科目を先取りして履修することにより、翌年大学院へ進学した際、通常2年かかる修士課程を1年間に短縮することができる。そのため学部4年次は実質的に修士1年次となり、修士1年次は実質2年次となる。学部の卒業論文は修士論文の中間報告という位置づけとなる。学部3年次の冬に研究計画書に基づく選抜があり、プログラム参加が決まるが、その後いつでも撤回可能である(大学院に進学しなくてもよい)。なお、大学院に進学するには一般学生同様4年次の秋または春に大学院入学試験を受ける必要がある。

○メリット

このプログラムのメリットは何よりも通常より1年早く修士の学位を取得できる点にある。学部4年次で学部の単位を取り切っている学生にとっては時間の有効活用になるし、学費の節約にもなる。また将来のキャリアも通常より一年早くスタートできるという点も、魅力として挙げられる。

また、本プログラムへの参加がそのまま大学院への進学を意味するわけではない。学部4年次で得られる権利は、大学院科目の事前の履修である。そのため、大学院に行くかどうか迷っている学生にとっては、本プログラムを履修することで大学院の授業の雰囲気を知る機会となる。すなわち「お試し大学生」となることができるのである。なんだ、メリットしかないじゃないか。

○デメリット、あるいは大変な点

本プログラムは、大学院科目の早期履修および大学院早期卒業の権利であり、いつでも撤回可能である。そのため制度上はメリットしかない筈であるが、仮に本プログラムの権利を使い倒し、本気で早期卒業を果たすことを目指すならば、相当に大変な労力を割くことになるし、いくつか懸念されるべき深刻な問題も発生する。以下いくつか述べる。

1 時間の余裕がない

プログラムに参加している2年間(学部4年次と修士1年次)は、通常3年間でこなすべき様々な事柄を2年間で終わらせることになるため、人によっては多忙を極めることになる。学部4年次の授業(特に単位が残っている人)、卒業論文執筆、大学院試験、大学院科目の履修、修士論文の執筆、就活(博士に行かない場合)のすべてを2年間で、同時並行で進めることになる。

時間の余裕がないことは、メンタルヘルスにも影響する。学部4年生の卒業間近でありながら、同期よりも忙しく、進路も定まらず、そして正解のない研究という「極道」のような営みの沼にうっかり片足を突っ込んでしまった5年一貫生は、メンタルを安定させるための工夫が何よりも重要である。

2 勉学の自由度、および研究の質への懸念

以上に述べた点と関係するが、勉学／学問の自由度が相当低くなることが避けられない。余裕を持った履修や興味の赴くままの勉学をする時間は残されていないと考えてよいだろう。学部4年次が始まる時点で修士課程の勉学や修論の研究を見据えながら卒業論文の研究を始めなければならないため、寄り道も難しくテーマ変更もリスクになる。大学院授業は学部よりコマ数が少ないとはいえ一つ一つの課題は重く、より深い知的探求や深い思考を課せられるため、それだけで疲れる。「研究に関係のない勉学」ができた3年次までが羨ましくなるであろう。

同時にしばしば耳にする批判が、研究の質が下がるという懸念である。私自身は5年一貫だからといって一律に研究の質が下がるとは思わないが、研究の方法論や隣接領域の知識、問題意識や研究のセンスを涵養する時間が削られた状態で、果たして良い研究ができるのかという懸念は、誰もが突きつけられるであろう。その意味では、学部3年次までの基礎的な勉学の期間のうちに、興味の赴くまま読書したり授業をとったり、また実社会での見聞を広めたりすることが重要であるが、さらにより多くの良質な研究成果物(研究書、研究論文、紀要その他書籍)に触れ、研究のイメージを持っておくこと、そして自分の研究の核となる大きな問題意識を形作っておくことが非常に重要となると私は考える。

3 早期化する就活とは最悪の相性

そして何よりも残念なのが、早期化する就活とは相性が最悪なことである。早期化する就活への学生

の反感は今や広く知られるところだが、5年一貫プログラムはその被害がより際立つことになる。例えば、今私が体験したばかりの学部4年次の夏での状態を紹介しよう。

学部4年次の夏、この時期は一般学部生であれば就活も終わり自由であるところ、5年一貫生となると大学院科目の履修および卒業論文の準備、9月の大学院試験の準備、そして就職活動(夏インターンや早期選考)の四重苦を受けることとなる。この就職活動は、大学院修士課程修了見込みの学生として行うものであるが、この時点で5年一貫生は、まだ大学院に入学していないどころか、大学院入学試験すらまだ行われていない。履歴書に一体何と書けばよいのか。混乱を招くこと必至である。

院試の直前に、院卒の就活をするということ。これほど就活の早期化を苦々しく思ったことは無い。さすがにこの事態にはやるせない心境がある。勉学・研究の時間を奪うべからず。「大学院ではどんなことを研究されるのですか?」「まだ入学してないのですが、がんばります」こうしたやり取りこそが「ウソのようなホントの話」なのである。そもそも5年一貫プログラムというマイナーで複雑な制度を先方の企業に説明するところから始めなければならない。一度の説明でうまく行かず、誤解が生まれることもある。「結局、いま何年生なんですか? 修士ってことでいいんだよね?」「えっと、学部4年で、実質修士1年です!」「...なるほど?」

以上、主にメリット、デメリットと予想される懸念点について記してみた。「デメリット」ばかりが挙げられてしまったが、これも5年一貫プログラムによって可能になる最大限の権利を使い倒し、本気で5年で修士を卒業することを目指すからこそである。本プログラムはあくまで権利でありいつでも撤回可能であるから、少しでも興味を持ったならばぜひ参加することをお勧めする。

2. 私の5年一貫プログラム体験記

2-1.5 年一貫プログラム参加を決める

私が5年一貫プログラムへの参加を決めた時期ははっきり覚えていない。しかし3年次の秋頃には心が決まっていたように思う。後述する様々な要因で、半ば導かれるようにして参加することとなった。私はもともと研究者になることを将来の選択肢の一つとしていた。父が研究者であり、また私自身民間就活の論理やあり方に性格が合わないと感じていた。一橋大学に進学したのも、一橋に台湾研究の先生がいらっしゃったのが決め手であり、台湾研究に携わることを空想していた。そのため5年一貫プログラムもはやくから認知していたが、当初は通常通り6年間で修士を終わらせるか、5年に短くするかはこだわりを持っていなかった。

しかし、父から「大学院の費用、行くならできるだけ自力でお願い」と言われてしまった。なるほど、学費の支援を期待するなどということである。アルバイトや奨学金も含め、自力で学費を工面できるだろうか。2年間は気が重い、1年間だけならなんとかかなるかもしれない。その後のことは知らない。私の気持ちは5年一貫に傾いていた。

私が所属していた洪郁如ゼミ(台湾史)は、卒論指導が異常に早いタイミングから始まるという特性をもっていたため、3年秋の時点で研究テーマが決まっていた。また幸運なことに、自分が選んだ研究テーマに発展可能性があるらしく、下手すれば博論まで持っていけるといってお墨付きも頂いていた。研究計画のほうは、なんとかかなる。そしてまた、私のゼミはもう一つの特性をもっていた。ゼミ生が、殆どいない。先生に聞いたところによると、学部のゼミ生は平均学年一人である。一人ではゼミが成り立たないため、先生は学部ゼミと院ゼミを合同で開催していた。私が入った時も合同ゼミであり、学部3年生から博士課程まで幅広い学年の学生と一緒に議論する環境であった(しかしそれでも人数は少なかった)。大変であったが、気が付けば慣れるようになり、幸運にも学部ゼミに同期がいて楽しく過ごすことができていた。この体験のおかげで、大学院授業への心理的ハードルがかなり薄れていた。まあ、いけるんちゃう? の精神で、2024年1月、5年一貫プログラムに応募した。

当時の選考は、研究計画書を中心とした書類選考と、それに基づく口頭試問であった。これまで何を学んだのか、これから何を学び研究するのか、暫定的にテーマを決め、研究背景、先行研究、問題意識と具体的な研究内容・方法について大体4000字程度で書かされるものであった。こうした書類を書くのは初めてであったが、研究論文の序章をイメージしながら書くとなんとかあった気がする。当時決めた研究テーマは、3年次の卒論指導で固まりつつあった、台湾引揚者に関するものになった。口頭試問は2名の教員が20分で

行った。研究の実現可能性や妥当性、意義や研究史の知識などを問われた記憶がある。圧迫されたり詰められたりすることはなかった。選考は無事通過した。社会学部では 11 名いた。なお、よほどのことがない限り選考で落とされることはない。撤回する学生はたまにいらしい。

2-2.大学院授業開始(4 年次春夏)

選考が終わってから 2 月 3 月の間はひたすら研究のための調査をしていた。この時期に卒論の調査をしていたのには理由がある。私の研究は文献資料を大量に使うが、それらを所蔵している施設がやや遠く、文京区の本郷にあり、かつ平日の日中しか開館していないのである。授業が始まってからは調査する時間もない上、卒論を早めに進めて修論の準備もできるようにしたいと何となく感じていたので、ひたすら本郷に通い詰めていた。春先で暖かくなりつつあるというのに、懐は大層寒くなった。

4 月からは晴れて 4 年生(修士 1 年)となった。大学院の授業で履修したのは「演習」、「第二演習」、「社会科学研究の基礎 C」、「文化生成研究」の 4 つである。このうち「演習」は学部と院合同のゼミを指すから、実質的に負担が増えたわけではなくラッキーであった。「文化生成研究」も、文献の輪読という定番のもので、慣れていたので乗り越えられた。「第二演習」は、学部の副ゼミのようなものだが、選考はない。私は国際社会学のゼミを履修した。大した理由はないが、私の研究対象である台湾引揚者が「植民」と「(強制)送還」の両方を果たした国際移動の経験を持つという意味で、国際社会学の議論との接続可能性があると感じていたのが理由の一つである。参加の意思を伝えたところ、「うちは社会学であって歴史学のことは門外漢なので有益なアドバイスができないかもしれないがいいか」と懸念されたが、私はむしろ研究対象との繋がりを強く感じていた。参加してみると、議論の高度さ、白熱さはさることながら、先生やゼミ生の人柄や雰囲気も好きで、非常に心地の良い環境であった。どんな背景の人も安心して自らのことや社会的な 이슈 を学術的な議論の方法と水準によって語れるというセーフティさを併せ持っていたのは、かなり稀有なことだと思う。また国際社会学のゼミであるためか、一人ひとり多様なルーツや背景を持っていて、私には「日本人」で固められた空間よりも親近感があった。ただ、英語が絶望的に苦手な私にとって、英語での文献購読や議論は大変であった。なぜかプライドが邪魔をして翻訳ツールを使うこともしなかったので、毎度馬鹿正直に調べながら文献を読もうとしたが時間が足りず、結局途中まで読んで断念していた。文献や発表が日本語だとそれだけで勝利した気分になったものである。「社会科学研究の基礎 C」は大学院らしい必修科目であり、歴史学の研究方法論について学んだ。毎週の課題が大変重く困惑した記憶がある。ある週では 400 頁ほどある新書 1 冊が事前課題となっており、入手すら困難であるのに数日で深みのある読解ができる気がしなかった。色々な意味で苦い記憶となっている。

2-3.大学院入試(4 年次夏休みから秋学期)

学生が就活に向けて動き出す夏休みが近づくと、将来の展望を考えるようになり、「研究者にはならない」という選択をすることを考え始めた。春夏の間、私は日本台湾学会の大会(実質的に研究者のオフ会)に参加していたし、講演会の手伝いをする機会にも恵まれた。また先生から来年の学会での報告も打診され、日本台湾学会にも入った。研究テーマをうまく深めることができれば博士まで行ける。しかし、博士取得後に生計が成り立つのかという不安、アカデミアの世界の狭さや思考様式の特異性(無論悪いことではない)、そして自分自身の研究活動へのモチベーションの低下等を理由に、研究に人生を捧げる覚悟が持てなくなっていた。先輩に半分冗談で「研究、面倒くさいですよ」と言ったところ、「何で？研究楽しいじゃん」と頭の上に「？」マークを浮かべながら笑顔で聞かれた。二の句が継げなかった。違う世界に住んでいる。私は研究だけするよりも人と遊んだりゲームしたりするほうが楽しいかもしれない。人生のどこかの段階で博士課程に戻ってくることはあり得るけれど、一度は他の世界を見てみたい。

こうした気持ちのまま、秋の大学院入試を迎えていた。秋の入試は一般選抜と特別選抜の二種類あるが、一橋の 5 年一貫生はほぼ間違いなく特別選抜でよい(GPA の要件がある)。7 月末から研究計画書を含めた出願が始まり、9 月初めに書類選考通過者に対して口頭試問がある。研究計画書は、これまでの学修の経過と修士課程での学修計画についてそれぞれ 1200 字程度で書くことが要求された。5 年一貫プログラムの選考と内容はほぼ変わらないが、字数が短くなったことが大きな違いであろう。簡潔に自身の研究を精緻化・言語化する必要がある。ただ最も難しかったのは、修士課程修了後の展望について 400 字で書く欄である。未定であった。

口頭試問は、自身の指導教官と分野の近いもう一人の先生が二人で面接をしてくださる。研究計画書にもとづく質疑応答と、研究遂行上必要と思われる語学能力試験が行われ、合計 45 分である。語学能力試験は、史資料の翻訳であり、私は中国語(繁体字)を日本語に翻訳することになった。研究計画書よりも中国語の不安が大きかったため、最後の一週間はひたすら中国語の文献を読んでいたが、効果は不明である。試験は無事合格であった。現在は秋学期である。授業は週 4 コマと少なく、春夏よりも重いわけではないので、卒論と就活に集中しなければならない。ただ私の寮生活を見ている方ならお分かりになるかもしれないが、最近はかつてないほどの現実逃避が続いている。10 月になったらまた頑張っている筈であるから、温かい目で見守っていただきたい。

3.おわりに

以上で本編は終わりますが、字数が余りましたのでもう少し随筆を書きます。最近アルバイト先の学生と自己紹介をしていると、「大学院に進むってことは、理系ですか？」と聞かれ、仕方ないと思いつつも悲しくなりました。文系でも大学院に行く人、いるんだよ。大学 3 年以降になると、一人ひとり進路が分岐していくことが実感されるようになってきます。思えば一般的にイメージされるような王道ルートからは遠いところまで来てしまった感もありますが、そこで出会った人もいて面白いですね。ただ時々「この道でいいのか」と悩んだりもします。どこで何をして生きていくか、迷いながら、迷いを楽しみながらできれば生きていきたいですね。最近の好きな言葉は「落地生根」です。「故郷を離れ、移住した先で根を下ろして生活していく」という華僑の生き様を表現した言葉です。生まれ育った関西を離れて、国立のYMCA一橋寮に住んで 4 年が経とうとしています。はじめは見知らぬまちでしたが、寮を拠点に生活し、寮や大学、ボランティア先の地域の方々などに関わるうちに、根が伸び始めた感覚もあります。大学院を修了したらまたどこかへと飛び、いちから根差し直すことになるかもしれません。ただその時には、国立そして寮での経験を糧として、生きていくことができればと思います。

ミュンヘン大学留学体験記

角颯真(商学部 4 年)

2023 年 9 月から 2024 年 8 月までドイツ・ミュンヘン大学(Ludwig-Maximilians-Universität München)に交換留学していました、商学部 5 年の角颯真です。来年の卒業後は広告業界に進むこととなりましたが、進路決定にも交換留学の経験が大いに影響しています。寮生や理事会の皆様を中心にご迷惑をおかけしたことと思いますが、この度は留学をご支援してくださったことに心より感謝申し上げます。本稿では、ミュンヘン街及び大学、そして国際交流経験という観点から、留学レポートを記しています。

〈ミュンヘン〉

ドイツ南部に位置するミュンヘンはベルリン、ハンブルクに次ぐ第三の都市であり、文化的にも経済的にも重要な都市であります。景観保護がなされており、歴史的な建造物も多く残されています。街の中心であるマリエンプラッツにはミュンヘンを象徴する新市庁舎やフラウエン教会があり、観光客だけでなく地元住民の憩いの場にもなっています。カトリック文化も色濃く残るこの街では、先ほど述べたフラウエン教会の他にも、聖ペーター教会、アザム教会、ミハエル教会などがあり、朝の 9 時、お昼の 12 時、夕方の 6 時には町中の教会で鐘が鳴り響きます。また 11 月の末からはクリスマスマーケットが開催され、いたるところでグリューワインやソーセージ、オーナメントのお店が出没し、アドベントで街は活気づいていきます。ドイツ三大クリスマスマーケットであるニュルンベルクにも訪れましたが、歩くことが難しいほど賑わっていました。



建物も低く、東京と比較すると小さく感じてしまう都市ですが、トラムや地下鉄などの交通網もしっかりしており、商業施設も充実しているので、大変住みやすい街かと思います。ドイツの中で一番物価の高い都市ということもあって治安も落ち着いており、私や周りの留学生で危険な目にあった話はまず聞きませんでした。クリスマスマーケットだけでなくオクトーバーフェストやそのほかのイベントごとにも事欠かないのでドイツ文化を満喫する上では外せない都市なのではないでしょうか。私はとりわけ、Tollwood というバザール×音楽×ビールのようなイベントが大好きで、毎週通っていました。



〈ミュンヘン大学〉

派遣先である Ludwig-Maximilians-Universität München (ミュンヘン大学) は世界大学ランキングにも 20 位にノミネートされる、ドイツの中でも重要な研究機関の一つです。人文学や教育学などの分野で優秀な人材を多く輩出していますが、それ以外の領域でも優秀な学生が世界中から集まってきます。学部によって履修登録などの細かいシステムは異なるものの、学部を横断して受講することが可能であり、自分の興味関心を深めるにはうってつけの環境です。私は英独それぞれで授業を履修し、特に印象に残ったのが、Japanologie (日本学科) の日本事情についての講義でした。他学部生として飛び込みで履修したため、自分以外全員ドイツ人という環境でしたが、第一講のオリエンテーションから従軍慰安婦や北方領土問題への言及があったのは驚くべきことでした。学生たちもサムライ・ニンジャというようなキャッチーな日本観を超えて、そうした問題にも聞き入り、積極的に議論していました。



〈国際交流〉

ドイツ全体でも国民の 5 人に 1 人が外国にルーツがあるという状況もあり、ここミュンヘンの地では逆に日本人を探す方が難しいほど外国の地にルーツを持つ方が大勢いらっしゃいました。やはりヨーロッパということでイタリアやスイス、イギリス出身の学生が多かったですが、それ以外にもトルコやロシア、中国などの方も数多くお会いしました。海外渡航の中で実感したこととして、ドイツではトルコ、イギリスではインド、フランスではアフリカ系の人々が目立つということです。歴史的背景や言語・経済的な要因から、ヨーロッパといっても一枚岩ではなく、それぞれ国ごとに結びつきの強い地域が異なるのだと学びました。

そういった中で、様々な背景を持った友人ができ、価値観の変わる経験がたくさんありました。例えば、父親がセルビアとドイツのハーフで母親がモンテネグロ人という友人の家に及ばれた際、父がお母様に「Is it a typical German house?」というようなことを聞いてしまったのですが、それに対してお母様はすぐさま「First of all, we're not German.」と訂正していました。どれほどドイツ人に見えようと、どれほどドイツ語を話せようと、どれほど長くドイツに住んでいようと、アイデンティティはセルビア/モンテネグロ人であるということ、そしてドイツ人ではないということは変わらない、ということを学んだ経験です。



また、カトリックの聖職者養成コースで学ぶドイツ人の友人に、「恋愛したいと思わない?」と聞いたことがあります。その返答はとても印象的で、「聖職者は教会と結婚するんだよ」というものでした。教会と結婚すると、まにパウロが妻帯禁止の根拠とした、信仰とその実践という至上命題のためには妻帯および子どもは必要ない、という論拠と同じものでした。金輪際恋愛経験がなくとも、毎日の信仰の実践と余暇には同僚とキリスト教催事の準備と毎日が充実している彼を見て、確かにパートナーよりも広く、深く、より確実に救いと歓びを与えてくれるもの(=教会及び信仰生活)があるなら、恋愛なんて必要ないかもしれないと思われました。(後日談があり、彼が今夏来日した際、彼は聖職者養成コースから外れており、更にはキルギス人の彼女も

できていました。)



そして、本件「国際交流」につきましては、昨年度会報でも「留学先友人紹介」という題で 5 人の友人たちに関して記しておりますので、ご関心のある方はそちらもお読みいただければ幸いです。東北大生のイラン人や、中東育ちのインド系の友人、神父養成コースのドイツ人など、留学したからこそ出会えた友人たちを通じて留学の経験を振り返っております。

この度の留学を通じて、中高時代には想像もできなかった欧州 20 カ国渡航や現地での就労、そして素敵な友人たちに出会えたことは私の誇りです。今も連絡は続いていますし、これから人生の長い道のりの中で、欧州に再訪し、彼らにもまた巡り合えたらと思います。読んでくださりありがとうございました。

台湾国立政治大学留学記

猪股梨玖(法学部 4 年)

私は 2023 年 2 月から 2024 年の 1 月まで台湾の国立政治大学に留学していたため、今回は留学記として体験をまとめたいと思います。はじめに、私の留学先は台湾の国立大学である国立政治大学で、もともとは蒋介石のもとでスパイなどを養成する学校として設立されたものです。国民党が台湾に移転すると国立大学となり、政治学や地政学などを強みとしているほか、現在では数学科など理系学科もあるなど台湾大学に次ぐ総合大学となっています。所在地は台北市内ですが、少し郊外となる西南地区に位置しております。大学は丘の上にも広がっているため場合によっては移動が少し大変です。大学の前は学生街となっておりタピオカ、ドリンクなどを販売するドリンクスタンドが多く並んでおり、それ以外にも弁当屋やファーストフードなど学生向けの様々な飲食店が立ち並んでおり高級住宅街にある一橋大学と比較しても楽しい食生活を送れました。以下の段落では、この台湾国立政治大学での生活をトピックごとに分類して書いていきたいと思います。

キリスト教

私は留学中に政治大学の学生を中心としたキリスト教のコミュニティに参加していました。台湾の大学サークルには仏教関連のサークルや道教、法輪功など色々な宗教などと関連したものがあり、信徒同士の交流がメインのものやボランティアサークルとして活動しているものなど幅広く存在していました。詳しいことは昨年の会報に寄稿しましたが、特別な個性を持っていると感じる場面はあまり多くはなく、台湾の人々の生活と結びつきながら、比較的日本と近いような信仰活動が行われているようでした。もちろん、信徒の割合は日本よりも高く、活動もより盛んであるようには感じられました。またそのため協会の数も多くあるようでした。

勉強

私は向こうの大学のプログラムの関係で中国語学科に割り当てられました。中国語学科では必修の中国語の授業が週に 4 回、1 日 3 時間ありました。この中国語の授業はオールチャイニーズで行われ、生徒は欧米とアジアの人が半々位で、なかでも韓国と日本の学生が多い状況でした。ただし、私の後半の学期では、日本人は自分だけで、ほとんどが欧米の学生でした。授業は中国語で進行するため、中国語を二外で多少や

った程度の自分には少し難しく感じられましたが、一方でリーディングやライティングは欧米などの学生に配慮しており、漢字や漢語に慣れている日本人には比較的簡単であり、全体としての負担はそこまで大きくはありませんでした。この中国語の授業が留学生たちのクラスとしての単位であり、1 学期に何回か郊外活動として外に出て観光をしたり、台湾茶を楽しむなど台湾ならではの体験をする授業などもありました。それ以外に私が取った授業としては、一つ目に世界の食文化と言う授業があります。この講義は先生がトルコの方で、前半は世界の食文化の特徴について学ぶ講義形式のもので、後半は実際に先生がトルコを中心とした中東の料理を作り、学生に振る舞うというものでした。私自身トルコ料理については殆ど知識がなく、サバサンドやケバブぐらいしか知らなかったのですが、実際には豆を使った煮込み料理やオリーブオイルを使ったサラダなど、様々な料理が提供され、トルコが世界 3 大料理の 1 つに数えられていることにも納得するような美味しさでした。この講義はあまり真面目な形式の授業ではありませんでしたが、料理という私たちの生活に身近に結びついているもののため、その後の生活にも役に立つ、個人的にはとてもためになる授業でした。それ以外に取った授業としては、台湾の歴史に関する授業を 2 つ、どちらも同じ台湾人の先生の講義でしたが、異なる時代について前半の学期は英語で、後半の学期は中国語で行われる講義でした。この講義について特筆する点はありませんが、中間発表のプレゼンテーションをするなど欧米のスタイルに近いような講義でした。それ以外で特に印象に残った講義としては、日本人の先生による日本の学生のために日本語で行われる講義があります。内容としては、日本と台湾の関係、日本と中華民国の関係、そして台湾の中華民国の関係について、歴史をもとにひもといていこうとする講義でした。私自身、留学した際には、あまり台湾と日本との関係について詳しく知っているわけではなく、一般常識プラスアルファ程度の知識しかなかったのですが、この講義ではより深く歴史を学んでいくもので理解を深める事ができました。講義では台湾における光復(日本からの解放)に対しての台湾の人々の反応が紹介されたり、戦後の日本の自民党と国民党の関係の変化や日中平和友好条約にかけての経緯を学びました。それ以外にも台湾に住む人々にとっての自己のアイデンティティについて、彼らが台湾人だと自己認識してるのか中国人だと認識してるのか、あるいは台湾人であり、中国人として認識しているかと言う意識の変化等についてもアンケートを通して知ることができ、台湾がどのような歴史を歩んできたのか、日本ではよく台湾は親日な国だと言われているが実際にそうなのか、どういった意味で親日なのか、といったところについて学び、自分で考えることができました。実は今年の 7 月にへ所属するゼミの海外研修で香港に行き、そこで香港の総領事の方から香港と台湾における「親日」についてお話を伺うことができ、総領事の方は、台湾の人たちの親日にはもちろん物質的・文化的な親しみや愛着という部分もあるが、一方で、スピリチュアル的な親日さも感じられると述べており、香港の親日は、むしろ物質的な好感と、西洋と比較しての文化的な近さへの親近感などがあると述べておりました。私自身もこの意見に賛同しており、台湾ではもちろん歴史的な経緯があり、現在においても物質的文化的な近さに親近感を覚えていたり、好感を抱いているのはもちろんですが、それでは説明ができないような日本への愛着を持っているような気がします。

サークル

台湾では、毎学期ごとに新勧活動が行われており、交換留学生も比較的サークルに参加しやすい環境でした。他の留学生にはボクシングサークルや管弦楽団に入っている人もおり、大体の交換留学生が何らかのサークルに入っていました。私は台湾ならではのものをやってみたいとの考えから、台湾茶のサークルとウィスキーのサークルに入りました。台湾茶サークルでは、毎週火曜日に特定のお題に沿った形で複数のお茶が紹介され、お茶の特徴や入れ方等を知りつつ、自分たちでお茶を入れてお茶を楽しむような会が開かれておりました。もう片方のウィスキーサークルは、台湾でウィスキーが人気と言うもあり、非常に台湾らしさを感じるサークルでした。活動の内容は台湾茶サークルに似ており、毎週特定のお題に沿ってそれぞれの国によるウィスキーの違いや樽による味や香りの違いなどについてのレクチャーが行われた後、実際に試飲する流れでした。提供されるウィスキーはボトルで大体 3000 円から 10000 円程度のものが多く、実質的に好きなだけ飲めるような状態でしたので、サークルの活動費以外にも OB などから援助をいただいていることが伺われるラインナップでした。ただし、いくら台湾でウィスキーが人気であるとは言え、ウィスキーサークルは台湾国内でも非常に珍しいらしく、留学中にこのサークルがテレビに取り上げられていました。

生活

大学以外の生活では、前半の学期においては、大学の近くの学生寮に住んでいたこともあり、大学周辺を歩きまわって現地のお店を回ったりしていました。後半の学期になると、台北・新北・桃園・基隆のバスや電

車などを自由に利用できる定期券が1ヵ月1200元、大体5500円程度で利用できるようになったため、放課後や休みの日に少し離れた、新北のはずれの方や基隆等に向かうことも増えました。一方で、大学の授業が週4であったことから、遠くへ行く事は難しく、台湾北部以外を旅行する機会はあまり多くはありませんでした。長期休暇や帰国前にまとめて旅行することがあり、その際には台中や台南、台湾の東部などいろいろ回りましたが、内陸部にある山の方にはあまり行くことが出来ず少し心残りです。私が個人的に気に入った場所は、一つ目は台中から少し南に行った斗南・斗六で、これらの場所には昔ながらの観光地化されていない市場などがあり、街並みも懐かしさが少しあるような感じがしました。他にも台南には、歴史的な建物がたくさんあるほか、B級グルメも美味しく高雄の空港を使う際などには是非おすすめしたいです。それ以外では台湾南東部の富里や池上周辺は風情のある田園風景が広がっており、お米の名産地で美味しいご飯が食べられるため、旅行で胃や心が疲れた際にはお勧めしたい場所です。

食事

食事に関しては主に自炊をしており、スーパーのほか現地の伝統市場で食材を購入して調理していました。特に伝統市場では台湾ならではの食材が多く、ニンニクの葉やサツマイモの葉などのほか、台湾で好まれている比較的小粒な蛤があったりなど日本でも増えて欲しい食材が多くありました。他にもマンゴーが安くて種類も多かったり、日本では高級魚のシロアマダイが安く売られていたりなどお得に楽しめる食べ物もたくさんありました。また調味料に関しては日本メーカーのものが多く扱われていたり、お米に関しても台湾産の他にも日本産のものが売られていたりと特に生活において困る事はありませんでした。一方で外食に関しては、私は外食をする際は、どうせなら台湾ならではのものを食べようと言う考えがあり、特に火鍋屋さんによく通っていました。台湾の火鍋屋では自分好みのタレを作ることができ、醤油にんにく、唐辛子ネギなどをベースにタレを作るため、日本の鍋と比べてもパンチがあるため、カロリーが低いものの満足感が得られ、足繁く食べに行っていました。他には夜市に行くこともありましたが、どちらかと言えば揚げ物などの軽食や衛生的に怪しい汁物が多かったため、普段はあまり行く事はなく、台湾内を旅行する際に時々訪れていました。また台湾を散策している間に気付きましたが、台湾の比較的高級な料理屋は主に西洋料理や日本料理、広東料理などが中心であり、台湾料理の高級店はあまり多くない印象でした。もちろん、最近では懷石料理の手法を取り入れた高級台湾料理店であったり、かつて日本統治時代に栄えていた酒家料理の再現を目指す飲食店もあるなど、台湾ならではの料理にこだわって提供しようと言う店が増えているので、そういった店を訪れてみるのも楽しいかもしれません。

全体を振り返ってみると、やはり私が留学前に台湾を選んだ理由である親日さや、治安の良さといったものは本当にその通りであり、私自身も生活のしやすさを感じておりました。もちろん、食生活の違いなどで少し大変な部分もありましたが、全体としてはどうしても耐えられなくなるようなこともなく、無事に1年間を過ごすことができました。そうした中で感じたことは、昨年の会報でも少し触れましたが、台湾の人々の優しさです。私がちょうど留学していた2024年の1月1日には北陸で地震が起きるなど大変な災害が留学中にも起きてしまいました。そうした中でも台湾の人はすぐに日本に対して心配をしており、多額の金をしていました。もちろん日本だけではなく、トルコで大地震があった際には、行にもトルコへの募金を呼びかける大きな横断幕がかけられているなど、困っている人のために、力を貸そう、お金を差し出そうという意識がすごくあるということを感じました。私の1年間の台湾留学では、もちろん中国語のスキルや台湾についての知識も得られましたが、そういった人間的な優しさに触れられた事も大きな収穫だと感じております。最後になりますが、私の留学、そして5年目の寮の在籍を認め、支えてくださった方々に改めてお礼を申し上げたいと思います。

トーマス・マン『魔の山』

北川諒(経済学部4年)

スイス・アルプスの谷間のダヴォースという高原にあるサナトリウムが舞台になっているこの教養小説は、ドイツの作家トーマス・マンによって1924年に出版されました。

主人公の名前はハンス・カストルプ。船のエンジニアとして間もなく職につこうとしているカストルプは、軍人である従兄弟のヨーヒアムが療養しているサナトリウムに三週間の予定で滞在することになります。そのサナトリウムでは、世界各国から集まった上流階級の人々が「低地」とは異なる「高地」での退廃的な生活に墮

しています。

主人公のカストルプは、サナトリウムの中の人々が延々と流れる区切りのない時間感覚を共有している様に当初は驚きますが、次第に順応していきます。

「時間」も『魔の山』のテーマの一つです。時間とはなんでしょうか。定量的に測れると我々が認識している時間について、筆者はこう述べます。

「時間、時間そのものを純粹に時間として物語ることができるであろうか。いや、そういうことはとうてい不可能だ。」「そういう状態にあっては、時間の経過が完全にわからなくなり、したがって自分たちの年齢もわからなくなるのをいかんともしがたいのである。こういう現象が起るというのも、私たちの内部にはいかなる形式の時間感覚器官も存在しないからであり、したがって私たちが時間の経過を、自分たちだけで、外部の手掛かりなしに、ほぼ信頼するに足る程度にでも算定することが絶対不可能だからなのである。」

また、療養所の中では、死との関係性も通常の「低地」とは異なります。療養所は人の死が身近にある(亡骸は人目につかないように跡形もなく片付けられる)ため、不思議な浮遊感を持った死生観を住人同士で共有しています。このことにより、カストルプは幼いころから抱いてきた「死と病気に寄せる関心」を意識します。

そのうちに、健康であったはずのカストルプ自身も原因不明の発熱によって療養生活を余儀なくされ、当初は三週間だった滞在期間は七年に及びます。主人公はこの療養所で生活をともにするロシア出身のショーシャ夫人に恋をします。病を抱えたショーシャ夫人はその病によって肉体が意識され、ショーシャ夫人の肉体を具に観察することから元来抱いていた「死と病気に寄せる関心」を深めていきます。この恋が物語の前半部分の主題となっています。

物語の後半部分は、カストルプに強い影響を与える三人の年老いた人物とその間で揺れ動くカストルプの姿、そしてデカダンスから脱却せんとするカストルプの姿が主題となっています。

イタリア出身の人文主義者セテムブリーニは、療養所での滞在を伸ばし続け、退廃的な生活をしているカストルプにこう問いかけます。

『『やられる』ですぞ、お若いお方、これがどういうことかお分かりか。人生に対する感情の敗北、無力とはこれだ、この感情の無力には、救いも同情もない。何の価値もない。ただ容赦なく、嘲笑を持って蔑まれるだけだ。片づけられ、唾をかけられるだけだ。』

カストルプはセテムブリーニの膨大な知識と人の理性や素晴らしさを真摯に信じる姿に影響されますが、それと同時に、人間の理性とそれによる進歩や理性を社会において実現できることを疑わないがために現実の問題を歪曲してしまう彼の限界に気づきます。

その後、セテムブリーニの論敵であり、イエズス会の神父で独裁とテロによって神の国の実現を目指すナフタが登場します。彼はセテムブリーニの人道主義を「刺すような醜さ」をもって冷笑しました。

セテムブリーニが個人の権利を尊重した民主主義や自由主義に基づく世界的な共和国を目指しているのに対して、ナフタが目指したのは独裁とテロによって実現され、社会的な階層を前提とした神の国を目指していました。現代でいえば、「法の支配」と「民主主義」を唱える欧米に対して、その欧米のダブルスタンダードを指摘し、強権的な君主のもとで国家を運営しているロシアに当てはめることができるのかもしれませんが。

二人はカストルプの教育者とならんとするために、自己の正当性を激しく主張します。

この二人に感化されたカストルプは「タブラ・ラサ」の状態から次第に独り立ちをし、一人の主體的な人物として、彼らが話題にするような抽象的・歴史的な事物に関して思索をめぐらせる「鬼ごっこ」に時間を費やすようになります。

療養所で過ごす二年目の冬のある日に、主人公は一人で雪山に出かけ遭難しかけます。なんとか辿り着いた山小屋で摩訶不思議な夢を見たことから「人間は善意と愛のために思考に対する支配権を死に譲ってはならない」とこれまで抱いていた死に対しての関心や共感を改める気づきを得ます。

ここで、退廃的な療養所の生活に慣れていた主人公がデカダンスを克服する糸口を掴んだかのように見えます。しかし、この経験をカストルプはすぐに忘れて、元の療養所での日常に戻ってしまいます。

そんな折、退廃的な生活に耐えかねて療養所を抜け出した軍人である従兄弟のヨーヒアムが持病を悪化させ、療養所に帰還してしまいます。

療養所の医師の制止を振り切って軍務についたヨーヒアムの体は病に蝕まれており、間もなく亡くなります。従兄弟が、彼自身の軍隊的な「猛勉強」の性質によって亡くなったことも、カストルプの時間的浪費を悪化させ、始末の悪い永遠との戯れに拍車をかけていきます。

緩く切れ目のない時間の中で思索「鬼ごっこ」に耽っていたカストルブの前に、生命力に溢れて王者の風格を持ったパーペルコルンという人物が登場します。生命や肉体が持つ有無を言わせぬような圧倒的な雰囲気をもった、周囲の人々を自然と付き従わせるようなパーペルコルンの姿を前にして、二人の教育者の存在は矮小化されてしまいます。

「でもやはりあのひとの場合、肉体的な要素が一役演じていることは確かですね。腕力という意味ではなくて、もっと別の神秘的な意味での肉体が。肉体的なものが介入してくると、物事は神秘的になるのです。肉体的なものは精神的なものになっていくし、またその逆でもある。この二つは区別がつけられないし、同じようにばかりと利口の区別もつけられません。しかしダイナミックな作用というものは現にそこにある。」

しかし、生命力の象徴であったパーペルコルンが病の末に自死を選んだことを契機として、療養所は混乱し、物語も終焉に向かって走り出します。長い間療養所を出ることができなかったカストルブは、大戦の始まりという外的な世界の荒波によってやっと退廃的な生活を抜け出し、そして戦争に向かっていくことになったのです。カストルブが第一次大戦に現場の兵士として参戦し、敵軍と相見えたところで物語は幕を閉じます。

物語は以下の文章で結ばれます。

「君が味わった肉体と精神の冒険は、君の単純さを高め、君が肉体においてはおそらくこれほど生きながらえるべきではなかったろうに、君をなお精神の世界において生き延びさせてくれたのだ。

君は『鬼ごっこ』によって、死と肉体の放縦との中から、予感にみちて愛の夢が生まれてくる瞬間を経験した。この世界を覆う死の饗宴の中から、雨の夜空を焦がしているあの恐ろしい熱病のような業火の中から、そういうものの中からも、いつかは愛が生まれ出てくるのであろうか？」

一橋や YMCA 寮での生活もこの療養所に似ているのではないかと思います。大学や社会という選択肢に溢れた時間・空間に投げ出され、知的・身体的刺激に晒されることで、ようやくやっと自分の人生について考えることができると思うのです。

カストルブは人が生きる道には二つの道があると言います。一つは、ヨーアヒムが辿ったような「まともな道」。もう一つは、「厄介な道」です。「厄介な道」ではまず死に深く共感し、そこから生への奉仕に目覚め、しかしそれを実践するまでには時間がかかってしまい、時にはそのことを忘れてしまいさえします。

魔の山の中では、カストルブがデカダンスを脱したのかは明確にはされていません。どちらの道を辿った方が良いとも示されず、読み手に託されています。YMCA 一橋寮の学生にも是非『魔の山』を手にとってもらいたいです。

YMCA 一橋寮に住み、山に行き、気候変動を考える

加藤弘人(経済学研究科修士1年)

はじめまして、今年度より経済学研究科に進学し、新しく入寮しました加藤弘人です。ここでは、自己紹介を中心としつつ、最近自分が考えているトピックについても書いてみたいと思います。

■これまでの簡単な経歴

私は滋賀県出身で、高校は滋賀県立膳所高等学校、学部は同志社大学の経済学部を卒業しています。高校時代はラグビーに専念し勉強を一度放棄しましたが、1年間の浪人の末同志社に入学しました。

大学では、2年の秋から宮崎耕先生のもとで情報システムの研究をしました。このゼミでは、「社会に必要な情報システムとは何か」「いかに既存の情報技術を社会にとって有用な形で利用していくか」といったことを、実際にアプリケーションを開発しながら学びました。生成 AI が 2023 年頃から日本でも話題になり始めましたが、その前からゼミのグループワークで私たちのグループは生成 AI を利用したアプリを提案しており、最先端の技術動向に関心を持ちながらそれを社会科学の視点でどのように利用していくかということをゼミでは考えていました。ゼミに入った当初から、常識を疑う必要があるというスタンスを叩き込まれ思考力を鍛えられましたと感じています。

しかし、学部時代に就職活動を行う中で気候変動問題への関心が高まり、その分野でより専門的な学びを得るために一橋大学大学院への進学を決意しました。一橋大学には横尾英史先生という若手ながら大変優秀な業績と人脈を持っておられる環境経済学の先生が在籍されていて、現在は横尾先生と月2回ほどの研究室ミーティングを行い、指導を受けています。

■気候変動問題への関心

私が就職から大学院進学という大きな舵を切ったのは、斎藤幸平の『人新世の資本論』という本がきっかけでした。大変強い語調で書かれている本なのですが、その本の前半に、環境問題をなぜ我々が考える必要があって、なぜ行動を起こす必要があるのかということに関する記述があります。その本を読み、先進国に生まれた自分が環境負荷を外部化しているということに気づかされました。例えば、私たちは普段ゴミが最終的にどのように処理されているか、自分たちの行動がどれだけ温室効果ガスの排出に寄与しているのかということについて考えることはあまりありません。しかし実際には、ほぼ使えないような電子機器(e-waste)が中古として発展途上国に輸出され、不適切な処理により健康被害が出ていたり、地球温暖化を1つの要因としてパキスタンで国土の3分の1が洪水で水没していたり、という現状があります。私たちの普段の行動がまわりまわって誰にどんな環境影響を与えているか普段考えなくても良い状態、これが環境負荷を外部化している状態です。自分はこれに気づかされた時、目の前の就活を諦めてでも勉強するに値するトピックだと思いました。勉強したからと言って自分が許されるわけでも、すぐ誰かが助かる訳でもありません。しかし、私は自分に今出来る最大限の努力をする必要があると言い聞かせて、それを勉強・活動のモチベーションにしています。

■気候変動問題に関連する活動・最近気になっているトピック

環境問題の中でも特に気候変動に関して、影響が不可視化されており緊急性が高いと感じたために、何か取り組みたいと考え、関西にいた頃に地元で活動している人に話を聞き、環境 NGO に所属するなどして活動をし始めました。そういった活動をはじめてからある程度たった今、気になっているトピックがあります。それはエネルギー貧困です。これは、「社会的・文化的に必要最低限のエネルギーサービスを楽しむことができない状態」あるいは、「社会的・文化的に必要最低限のエネルギーサービスを楽しむと家計を圧迫してしまう状態」を指します。前者は発展途上国でよく聞く状態で、開発の文脈で取り組みがたくさん行われているものですが、後者は日本のような先進国でも起こり得るものです。この研究をされている方の発表を聞いたとき、灯台下暗しで、身近なはずの日本の貧困に目を向けてなかったことを反省しました。研究テーマはまだ確定はしていないのですが、こういったトピックに関心を持ったことを背景に、今は気候変動政策と貧困政策の望ましいあり方を経済の視点から研究したいと思っています。

■寮生活・一橋山岳部への入部

真面目な話を沢山してしまったのですが、関東に来てから楽しい経験ももちろんたくさんしています。まず、元気でにぎやかな寮に住めていることは私にとって大変喜ばしいことです。いつも食堂に誰かがいて楽しそうに話していたり、私に面白い話を聞かせてくれたりするのを楽しんでいます。今年の夏は寮生と一緒にピザ窯も作りました。学部1年生などのエネルギッシュな姿勢は私に刺激を与え、私自身も前を向いて頑張ろうという気になります。

また、大学では山岳部に入部しました。はじめてのテント泊は 8 月の短期合宿で南アルプスの北岳に、2回目は 10 月の定期山行で鹿島槍ヶ岳に行きました。部員はみな良い人で、登山に関することを少しずつ学びながら最高の景色を楽しんでいます。

私は大学院の修士課程の間のみこの寮で住ませていただくつもりで、この寮に住む期間は 2 年間だけの予定です。研究や部活、NGO での活動で色々と忙しい状態は続くと思いますが、寮生の皆と楽しく実りある時間を過ごしていきたいと思っています。

インドネシア研修旅行 訪問先レポート

はじめに

今回のインドネシア訪問先は以下のとおり6先であった。参加の学生は9名、うち女子学生2名であったことから、参加学生を3つのグループに分けて、それぞれのグループが訪問先2先を担当することで報告書を作成した。

訪問先の三菱 UFJ 銀行インドネシア支店、酒井重工業現地法人、三菱重工業の現地法人の3社については如水会ジャカルタ支部長の中島和重様と幹事の大家様にお世話になりました。また、インドネシア大学の

学生基督教団体(カトリック及びプロテスタント)のご紹介は、在インドネシア日本大使館の川窪百合子書記官(文科省からのご出向)にご紹介頂きました。また、インドネシア SCM(学生基督教運動団体)はインドネシア YMCA を通じてご紹介を頂き、インドネシア YMCA は日本 YMCA 同盟を通じてご紹介を頂きました。また、インドネシア大使館のご紹介は、在ワシントン国連日本政府代表山崎和之大使のご紹介によるものです。これらの皆様に心より御礼を申し上げます。

| 訪問先リスト一覧表及び面談者 | | | |
|---|---|---------------------|---|
| 9月2日 | 9月3日 | 9月4日 | 9月5日 |
| 午前10時～午後3時 | 午前9時～10時半 | 午前9時半～11時半 | |
| インドネシア大学 | 在インドネシア日本大使館 | Indonesia SCM | 自由行動 |
| インドネシア大学経済学部&ビジネス学部 | | | |
| FEBUI(Faculty of Economics and Business University Indonesia) | | Ms.Ria Claudia | |
| | | | |
| Mr. Bernard Rendra & Agnes Ruth | 午後1時半～3時半 | 午後1時半～4時 | 午後1時半～3時 |
| | 株式会社三菱UFJ銀行 インドネシア支店長 MUFJ Bank, Ltd., Indonesia Branch | PT. SAKAI INDONESIA | PT. MITSUBISHI HEAVY INDUSTRIES INDONESIA |
| | | 酒井重工業インドネシア現地法人 | 三菱重工業株式会社 インドネシア現地法人 |
| | 中島 和重支店長 | 馬場 洋社長 | 松永副社長及び三菱パワーインドネシア 吉田和宏社長 |
| | | | |

1. インドネシア大学

法学部 3 年 平田華英

初日に私たちは、インドネシア大学のカトリック・プロテスタント団体の学生と交流する機会を得た。インドネシアはムスリムが多くを占める中、キリスト教徒も 1 割弱を占める。プレゼンテーションで知った知識として、インドネシアは多民族、多宗教、多文化の国であるということ。ムスリム教徒が9割を占めるが、その他にも、仏教、キリスト教、原始宗教など多くの宗教が存在し、300 以上の民族と文化が共存している。国家を形成する島によって信仰する宗教も異なり、フローレス島は居住者の8割以上をカトリック教徒が占める。

その後の質疑応答で印象的だったのは、宗教が代々継承されるという点と法律によって宗教選択が義務付けられている点だ。ID カードに宗教を記載する欄があり、登録が義務付けられているが、国民は国家が宗教を管理することに抵抗はないのか気になった。その点も踏まえて質問することができると良かったと思う。日

本の宗教観への理解が浅かった為、神道と仏教の違いなど説明することができなかった。より宗教について知ろうと思うきっかけになった。

ディスカッションの後には、学生が構内を案内してくれ、食堂で昼食を食べた。食堂は学生でひしめいており、活気を感じた。インドネシア大学は自然豊かで、さすがモンスーン気候といった感じがした。キャンパスが広大で、食堂に行くまでに大きな橋を渡った。食堂の近くには人文学系の校舎があり、日本語で書かれたネームプレートが首からかけた学生が多くいた。日本に対する造詣が深く、知り合った学生はアニメの「あずまんが大王」を知っていた。個人的に、アニメ「日常。」でインドネシア語の「Srama Pagi」が有名になったので、その話題をしてみたところ、見てくれるそうだ。アニメは国境を超えて、日本とインドネシアをつなげてくれた。

インドネシア大学との交流に寄せて

—学びと友情の交差点—

法学部 2 年 高天愛

・「インドネシアの縮図」としての UI

1849 年に設立され、1950 年に独立した大学となったインドネシア大学 (University of Indonesia、公用語表記: Universitas Indonesia) は、インドネシアのトップ大学の一つであり、多様な学問プログラムと学生数で知られています。現在この大学は、300 以上の専攻プログラムを提供し、今年は 10,473 人以上の新入生を受け入れています。インドネシア大学キャンパスには、伝統的なインドネシア建築が取り入れられており、それに加えてインドネシア全土からの学生で構成されており、文化的に豊かな環境を提供しています。UI は、その多様性から「インドネシアの縮図」、「ミニインドネシア」とも呼ばれています。

・学生組織の紹介

UI 側のプレゼンテーションでは、2 つの基督教学生組織の代表者によりそれぞれの所属団体を詳しく紹介してくれました。カトリック学生協会 (KMK FEB UI) とエキュメニカルクリスチャンフェローシップ (PO FEB UI) です。これらの組織は、精神的な成長とコミュニティ形成を支援しています。

— **KMK FEB UI** は、カトリック学生の信仰と霊的な成長を目的とした活動を行う組織で、以下が詳細です:

—設立と歴史:

1986 年に「KUKSA FE UI」として設立され、後に「KMK FEB UI」と改名されました。現在は約 245 人のアクティブメンバーを持ち、組織としての成長を続けています。

KMK FEB UI はインドネシア大学全体の KMK (カトリック学生協会) の一部であり、ジャカルタ大司教区の学生パストラル (PMKAJ-US) と連携しています。

—活動内容:

金曜日の祈り (Friday Prayer): KMK メンバーが定期的に集まり、信仰を深めるための祈りの時間を持ちます。

スポーツデー (Sports Day): メンバー同士の交流を深めるため、定期的にスポーツイベントを開催しています。

社会奉仕 (Social Action): 社会的な奉仕活動を通じて、地域社会に貢献しています。

カトリック・コア (Catholic Core): 信仰の基本を学び、基督教の価値観を深めるプログラムです。

フードドライブ (KMK Food Drive): 食料を寄付することで、恵まれない人々への支援活動も行っています。

— **PO FEB UI** は、キリスト教徒の学生が集まり、互いに成長することを目指す包括的な共同体で、特に学生がキリスト教信仰を通じて成長できる場を提供しています。

—設立とビジョン:

PO FEB UI は 1969 年に設立され、現在も活発に活動しています。ビジョンとしては、神を愛し、他者に奉仕する学生や卒業生を育てることを目指しています。「世の光と塩」として、家庭、教会、社会、国家において役割を果たすことが求められています。

—活動内容:

礼拝(PASSION Worship Service): PO メンバーは定期的に集まり、礼拝を通じて信仰を深めています。

祈祷会(Prayer Fellowship): メンバー同士での祈りの時間が設けられ、精神的なサポートが行われています。

弟子訓練(Discipleship): キリスト教信仰の基礎を学び、神の言葉に従う弟子となるための訓練が行われます。

特別イベント: クリスマスやイースターといった重要なキリスト教の祝祭日には、特別なイベントが企画され、メンバー間の絆を深めています。

以上のように、今回はインドネシア大学の学生達からプレゼンテーションを頂き、インドネシア大学における多様な文化や宗教活動がいろいろ紹介されており、特にカトリックおよびキリスト教信仰を深めるための組織が、学生たちの霊的な成長や社会的な奉仕に積極的に取り組んでいる様子を見てきました。KMK と PO の活動は、信仰を通じた学生同士の連帯を促進し、地域社会や教会への奉仕を重要視していることも会後のグループディスカッションで分かりました。今回の学生同士の交流とインドネシア大学生たちによるプレゼンを通じて、多くの学びと感動を得ることができました。特に、異なる文化背景にも関わらず、似ているような信仰を持つ学生たちとの交流は、私にとって非常に貴重な経験となりました。最初は、プレゼンを非常に興味深く聴いて、彼らの熱意と努力が伝わってきました。インドネシアの文化や社会について多くのことを学ぶことができました。特に、彼らが直面している課題や、それに対する取り組みについての話は、私自身の視野を広げるきっかけとなりました。また、今回の交流を通じて、キリスト学生団体の活動に対する憧憬的な気持ちも感じました。彼らの団結力や、共に目標に向かって努力する姿勢は、非常に感動的でした。人々の文化や価値観を尊重し、他者との交流を大切にすることの重要性を再認識しました。この経験を通じて得た知識や感動を、今後の学びや活動にも活かしていきたいと思っています。



酒井重工業を訪問して

社会学部 2 年 金本知也

海外研修も終わりに近づいてきた 9/4 日に、我々は酒井重工業インドネシア支社(pt.sakai indonesia)を訪問しました。担当して頂いた馬場洋様は、1957 年経済学部卒で、東京銀行に長年お勤めになられた後、取引先であった酒井重工業へ入社、その後現在に至るまで約 10 年の間勤められているそうで、現在はインドネシア現地法人の社長をされています。以下に酒井重工業グループの基本的な情報をまず報告します。

酒井重工業は、道路舗装用ロードローラーをはじめとする道路建設車両及び機械の専門メーカーだ。「1929年に国内初のロードローラーを開発して以降、長い歴史の中で技術と信用を培ってきた結果、『ロードローラーといえば酒井』と言ってもらえる老舗ブランドに成長した。国内シェアは大型ローラーで70%、小型ローラーで60%。専門性の高い機械ほど当社のシェアが高い」と酒井一郎社長は説明する。1970年にインドネシアに合弁会社を設立するなど、早いタイミングから積極的に海外展開を進めてきた。現在は米国、中国とインドネシアに2社の計4社の海外子会社を有する。高いシェアを維持している大きな要因は、同社の技術力にある。道路の舗装には、アスファルトや土に圧力を加えて固める「締固め」作業があるが、温度や土質などによって必要な圧力、振動の振幅などが異なる。「条件に合わせて設定する機械のパラメータは膨大にあり、匠の技によって受け継がれている」と酒井社長。国内シェアでは約70%、世界シェアでも約10%を占める道路建設機械業界の日本最大手です。そのネットワークは日本を含むアジアを中心として、アメリカヨーロッパや、アフリカまで広がっています。我々が訪れたインドネシア現地法人は、海外輸出の拠点となっている場所であり、酒井重工業グループの売上の約5割を占め、海外製造及び販売の中でも重要な拠点とのことでした。場所は、ジャカルタ市内から約1時間の郊外にあり、工業住宅団地の一角に存在し、他にもエプソンをはじめ多くの日本企業がここに工場を持っていました。酒井重工業の工場は、古い工場を移築し、3棟の建物を連結しており、資材置き場、組立ライン、完成車の試験及び設置保管の3つに区分され、それぞれの役割に合わせた建物が印象的でした。到着してからは、上記のような会社概要を馬場社長様から説明して頂きました。特に記憶に残っているのは、ISO認証などの製品の質を保つための作業です。BNP(corporate benefit score)という認証では、審査項目の一部にインドネシアでの地域貢献度が一定程度ないと基本的に認証を受けられないという外資企業に対する政府の指導項目があり、日本との差を感じました。会社のご厚意で酒井重工業のグッズをお土産として頂いた後、質疑応答に移りました。普段接する大学OB先輩方の業界とは少し違った業界のお話でしたため、新鮮なお話が多く、製造業という業界について新たな発見を多く得られる質疑応答でした。やはり製造分野では中国と韓国の猛追がものすごく、特に価格競争力の観点からはなかなか太刀打ちできない現状もあるとのことでしたが、昔から酒井のファンとして培ったブランド力と製品に対する信頼により、取引を維持することに努めているとのことでした。馬場社長の御説明と質疑応答のあと、最後に工場見学をした際には、社員の方々が働いている姿を実際に見ることができました。社員はほとんどがインドネシア出身の方たちで、専門職として雇われるそうです。ですが日本人の工場長とも笑顔でコミュニケーションをとっている姿が印象的でした。工場は流れ作業に適した環境となっており、次の作業セクターが隣にあるような形でした。

訪問全体を通して感じたことは、酒井重工業という会社の気質が、海外進出にフィットしているものだということです。会社のポリシーとして、複雑で修理を必ずメーカーに依頼しなければならないような従来の建設機械ではなく、仕組みも修理も簡単なものにし、ユーザーが保守や修理をやりやすい製品作りを第一の目標にしているとのことでした。そのため作る側の技術も簡略化され、他の複雑なものを扱う製造業より海外進出に向いているのではないかと思います。現在、ジャカルタの平均月収は約4000万ルピアで、日本円にすると4万円です。人件費も大きく抑えられるため、今後についてもインドネシア現地法人の事業の重要性が失わ

れることがないのでは、と考えました。



海外研修レポート 第二グループ

経済学部3年見定和樹
法学部1年花田智紀
経済学部1年山田圭一郎

1. 在インドネシア日本国大使館訪問

- 当日のプログラム内容
- 大使館訪問は一時間設けられ、大使館からの挨拶、派遣団代表挨拶、そして、大使館からのレクチャーとして以下のテーマで行われ、その後質疑応答が行われた。

(1) インドネシアに対する日本の経済協力について

(2) インドネシアの運輸行政について

大使館内は天井が高く、床は絨毯でそろえられており、大使館の重厚さと荘厳さを感じた。

(1) インドネシアの政治経済状況と、日本の取り組み、感想

インドネシアの経済情勢について瞠目したのは、投資額における日本のプレゼンスが年を追うごとに低下していることだ。

大使館から頂いた資料によれば、対インドネシア投資額は2013年までは日本が第1位だったが、その後シンガポールに、2019年に中国に、2020年に香港に抜かれたため現在は第4位となっており、さらに韓国などに猛追されている。累積投資額では未だに第2位を維持するもののこのままでは順位を下げるのは時間の問題であり、東南アジアにおける日本の存在感の低下を改めて実感することになった。

ただ、このような状況はかつての高度経済成長を遂げていた日本をシンガポール、中国、韓国などがなぞっていると捉えることもできる。実際に、いまだインドネシアでは日本車が9割以上のシェアを取っており、日本の質の高いブランド力はインドネシアで認知されているように思う。また、日本はインドネシアにとって第2位の輸入元、第4位の輸出先であり、インドネシアは日本にとって欠かすことのできない貿易相手国になっているのだと気づかされた。(もっとも、両国ともに中国が最大の貿易相手国であるため中国の存在感の大きさを実感せずにはいられないが。)

この他に私の関心を引いたのはヌサンタラへの遷都である。交通渋滞や地盤沈下で都市機能に限界を迎えたジャカルタから首都機能をカリマンタン島に移転するという一大プロジェクトである。首都移転を行う意図としては、様々な考えがあるが、約1万7千の島からなる群島国家インドネシアを今一度一つの国家としてまとめる政治的な意図があるのではないだろうか。また、今年の10月に大統領が交代するということで、次の大統領プラボウォ氏が首都移転をどれくらい取り組むつもりなのか注目していきたい。補足で、都市開発の約8割を民間投資で賄う計画だという点には驚いた。残念ながら、目標の投資額はまだまだ集まっていない。

個人的には、首都機能がヌサンタラに移転した後もインドネシア経済の中心はジャカルタであり、ヌサンタラは政治の中心となっていくのではないだろうかと思う。(オーストラリアのシドニーやブラジルのリオデジャネイロなどの例はあり)



2. SCM 訪問

➤ SCM(Student Christian Movement)の歴史

学生キリスト教運動(SCM)は、1889年に結成された英国最古の学生キリスト教組織だ。1889年、海外での宣教活動に専念するキリスト教学生のための緩やかなネットワークとして始まったSCMは拡大し、英国最大の学生団体となり、英国のキリスト教学生の80%以上がSCMの会員となった。開放性、包括性、急進主義、キリスト教信仰に対するオープンで挑戦的なアプローチという価値観は、運動の初期においても現在と同様に重要である。

現在、SCMはまったく異なる種類の学生を対象とし、草の根レベルの運動にも強く焦点を当て、トレーニングやリソースの提供を通じて地域のSCMコミュニティをサポートし、地域や全国的なイベントを通じて学生が全国的に集まる機会を提供している。

➤ SCM所属の学生とのディスカッションを通して感じたこと

現地のキリスト教(カトリック・プロテスタントを問わない)学生と我々を混ぜ、グループごとに交流した。

まず、現地の男性から「Do you watch Japanese Animations? I like them!」と切り出されたのを覚えている。具体的にどのようなアニメを視聴しているのかを尋ねたところ、「Demon Slayer(鬼滅の刃)」や「NARUTO」との答えが返ってきた。私はこれらのアニメについて詳しく知らなかったため話が弾むことはなかったが、日本のサブカルチャーがインドネシアにも伝播していることが分かって感慨深い気持ちになった。

次に話題に上がったのは、インドネシア人と日本人の宗教観の相違についてだった。無宗教を自認する人が多い日本人にとっては驚くべきことだが、インドネシアではイスラーム・キリスト教・仏教・ヒンドゥー教・道教のうちから必ず一つの宗教を選択しなければならないという。自身の持つIDカードにその宗教が記載されるそうだ。逆に、現地の学生に日本人は特定の宗教を信仰しない人が多いと説明しても腑に落ちない様子だった。彼ら曰く、日本人は神道や仏教を信仰する人が多いのではないかと。実際には多くの日本人にとって神道や仏教は世俗化して受容されているわけだが、そのことを彼らに説明するのは大変だった。

宗教観という些か重いテーマについて一通り語りつくすと、話題は両国の紙幣に移った。現地の学生は日本の紙幣はインドネシアのそれに比べて装飾が丁寧で印刷技術の高さが窺えると評してくれた一方で、新札はインドネシアの紙幣に似通っており従来の日本の紙幣が放っていた特別感が喪失してしまったと述べていた。新札のデザインは一部の日本人からも評判が悪いが、海外にも旧札の支持者がいるというのは新鮮だった。

最後にお互いキリスト教に関する団体ということで、我々が行っている聖書研究(弊寮では、週に一度聖書を輪読、議論し聖書への理解を深めている)に似た活動を行っているのか聞いた。彼らによると、聖書の勉強は基本的に一人で行うものであり、SCMでは聖書を用いた勉強会というよりは、ボランティア活動などのより実践的な活動を行っているそうである。また、メンバーの1人が我々と会う前日にフィリピンにてSCMの大規模なイベントに参加していたそうだ。

<https://www.movement.org.uk/about-us/history>



海外研修レポート 第三グループ

法学部4年猪股梨玖、
経済学部3年
吉田元喜商学部4年角颯真

1. 三菱 UFJ 銀行インドネシア支店

海外研修 3 日目の 9 月 3 日は三菱 UFJ 銀行に訪問し、東京銀行に入行以来 30 年以上を同行で働いてこられた中島和重支店長にお話を聞かせていただいた。部下のスタッフのご説明では、丁度アジアのリージョナル・ヘッドの担当役員の方の査察があったご多忙中のところ、時間を割いてお話をされてくださったとのことである。中島支店長は、予め用意したものを説明するやり方はあまり好きではなく、一人ひとりの質問に答える方式でお話を進められた。理事長が、昭和60年に東京銀行に入行された当会 OB の稲永祐樹さんをご存知かと尋ねたところ、良く知っておられるとのことであった。

初めに三菱 UFJ 銀行のインドネシアでの概況の説明がありました。インドネシアでは国民の半数以上が銀行口座を持っていないという点で、銀行は国民になじみが薄いことがある。その中で三菱 UFJ インドネシア支店は、資金量は 166 兆ルピアでインドネシア外国銀行中最大の規模であり、また子会社にはバンクダナモン銀行という地方銀行がある。インドネシア支店は主に日系企業及びインドネシアの国営企業や大企業取引が中心であり、ダナモン銀行はリースなど主に中小企業金融を担っており、大企業取引から中小企業あるいは個人取引までのフルバンキング業務をカバーしている。ALM としても、ドルとルピアが半々で運用調達がスクエアになっている。

次に、銀行の概況と職業経験についてお話し頂いたのちに寮生全員に質問があるかを尋ね、その質問に一つ一つ回答する形で説明をしてくださったので、寮生としても質問を真剣に考え、また聞きたかった内容について聞けたように感じられた。質問には出世を意識してこれまで仕事をされてきたかどうか、嫌な仕事を任されたときはどうされたか、インドネシア支店でこれまでどのようにマネジメントをされたかなどの質問があり、出世を意識して業務を行ってきたことはなかったこと、また、幸いなことに嫌な仕事についたことがなかったことはラッキーであったこと、また、インドネシア支店では総勢700余名の職員に対して、日本人は6名で現地化が相当進んでおり、インドネシア金融庁の指導もあり出来るだけ現地職員を優先しなければならないこと、中でも上から命令するのではなく、下からボトムアップで業務を行うことが、職員一人一人のモチベーションのアップと業務の改善に繋がることを強調されたことがとても印象的であった。

また、これはインドネシア以外の地域での勤務のことになるが、アジア通貨危機に直面した際に銀行がどのように対応したか、他にどの国でどのような銀行業務に従事されたか、それぞれの異なる国での国際金融業務について、どのような印象を持たれたかなど、中島支店長の業務経歴の話も非常に興味深く、世界を舞台にインベストメントバンカーとして活躍されてこられた視野の広さと深さを感じることが出来ました。

一連の質問に対するご説明が終了した後、スタッフの案内で、支店内見学をしました、見学で印象に残ったのは祈祷室と授乳室、PS5 で遊べるプレイルームの存在です。加えて、女性社員の多さや、皆宗教や人種の区別なく同僚として働いていることも印象的でした。これらについてより深く質問する時間がなかったのが残念ですが、それを除いても非常に実りのあるお話を伺うことが出来ました。寮生の一人が、これまで銀行について極めてネガティブ、否定的な見方をしていたけれど、今回中島支店長のお話を伺い、考えを改めたと、帰路話していたことがとても心に残りました。



2. 三菱重工業

海外研修 5 日目、最終日となる 9 月 5 日の午後には三菱重工業を訪問しました。当日は丁度フランシスコローマ教皇がジャカルタ各地で集会を持たれ、特にムスリム指導者との宗派を超えた対話やカトリック信者とのミサ集会などを持たれたことから交通規制が行われ、時刻通りに到着できるか不安であったが、地下鉄を利用することで、時間どおりに訪問することができました。

「ジャカルタの丸の内」とも呼ばれる Senayan 地区(ここは日本の鹿島建設がオフィス、ショッピング、レジデンスの複合開発を手掛けたことで有名で多くの日本企業がこのオフィスビルに入居)に位置するオフィスに到着すると、三菱パワーインドネシア社長吉田と三菱重工業インドネシア現地法人松永副社長のお二方が対応してくださいました。本学 OB の三菱重工業現地法人社長吉岡様はご都合でお会いすることは叶いませんでしたが、二人から三菱重工業のインドネシアにおける事業やインドネシアにおける再生エネルギーの可能性、それぞれお二人の会社での業務経験などを含めてお話を伺うことができました。

三菱パワーインドネシアの事業は、インドネシアでの火力発電所の建設及びその保守が主な事業であり、インドネシアでは現在、石炭火力発電が主流となっているとのこと、今後 SDG を考慮し、脱石炭化が課題となっている。ジャワ島以外の島では、水力とか地熱発電資源が豊富であるが、それらの島は人口が少ないので、供給と需要のミスマッチが大きく、思うに任せないとのことであった。近年地熱発電所建設の話が増えている。松永副社長のお話は、CSR の一環として本社の海外拠点サポートを担当した時、日本へのベトナム留学生のための継続的な奨学金プログラムをイチから設立なさっていたということも印象に残りました。インドネシアからの留学生支援プログラムも今後行われたら良いかのでは、と思った次第です。

三菱重工業の事業内容は、BTB が中心であるから、消費財産業の企業とは異なり、日頃馴染みが薄いこともあって、三菱重工業の事業内容については、知らないことが多かったため、実際の現場で働いている方からのお話を伺うことができ、とても規模が大きく、時間もかかるビッグなプロジェクトを沢山抱えて、大変ダイナミックな会社であることを理解しました。また、一橋は文系だけであり、理工学部系の人と関わることがないため、三菱パワーインドネシアの吉田社長の技術系の方のお話を伺うことが出来たことは新鮮で興味深かったです。特に発電所の設計のため熱帯林が大部分の地域で数年間生活した話には強い衝撃を受けました。仕事のモチベーションとかやりがいとかはどのように持たれているか、という質問に対しては、そういうことを考

えている暇はなく、日々、目の前の課題をこなすことで精一杯であると言われましたが、付け加えると、その国のインフラ整備、大事なエネルギー、電力の供給に貢献できたということは、大きなやりがいであると、断言されていたことが印象的でした。



(海外研修旅行感想文)

インドネシア海外研修を終えて

法学部1年 花田 智紀

これまで私はインドネシアに限らず海外へ目を向ける機会が少なかった。インドネシアについては、私の好きな Youtuber が IT 企業で働くインドネシア人であったことや、高校時代の友人が東京外国語大学でインドネシアの宗教や世俗について学んでいることもあり、何となく親近感を持っていた。しかし、それでも私の中のインドネシア像は「親日的な東南アジアの一発展途上国」に過ぎなかった。だからこそ、首都ジャカルタを訪れた時の衝撃は凄まじかった。私は事前学習の段階でインドネシアの経済について調べ、「近年 IT 産業の発展が目覚ましく雇用創出や経済のデジタル化が進んでいる」「経済成長率はマレーシアやタイ以上であり、ASEAN のリーダー的存在を担っている」ということを知識の上では知っていた。しかし、ホテル付近の高層ビルの立ち並ぶ街並みや大型ショッピングモール、IC カードを用いた公共交通サービスなど、もはや日本を超えた発展ぶりに大いに驚かされ、インドネシアという国の成長性を改めて肌で感じる事ができた。現地の日本企業訪問はどれも新鮮で刺激的であり、インドネシアの経済と産業のダイナミズムをより深く理解する大きなきっかけとなった。

三菱 UFJ 銀行のジャカルタ支店では、インドネシアの急速な経済成長を支える金融業界の現状について話を聞くことができた。現地の経済に密着し、インフラや企業投資の面で強力なサポートを提供している様子が印象的だった。特に、デジタルバンキングの普及やモバイル決済の急増に対応するための IT 技術の導入についての説明があり、インドネシアではテクノロジーの進化が銀行業界にも大きな影響を与えていることを実感した。実際に私たちが利用したバス(BRT)や鉄道(MRT)等の公共交通機関のほとんどは共通の IC カードが使われており、商店での決済においては QR コード決済やクレジットカードが主流で、露店以外で現金を使う場面がほとんどなかった。

次に訪問した酒井重工業の工場では、現地のインフラ整備のための建設機械が製造されている様子を見学した。日本製の高品質な建設機械が、インドネシア国内だけでなく周辺諸国にも輸出されていることを知り、欧米や中韓の企業との競争の中で”日本”という国自体にブランド力がある点が日本人としてとても誇らしかった。また、工場の現地従業員たちが高い技術力を持ち、熱心に作業している姿を目の当たりにし、インドネシアの技術者育成や雇用創出にも、中韓の大企業に比べれば小規模ではあれ日本企業が大きく貢献していると実感した。

三菱重工業のオフィスでは、インドネシアのエネルギー産業や大規模インフラプロジェクトに対する技術支援の現状について学ぶことができた。三菱重工は、インドネシア国内の発電プラントや環境技術に力を入れており、地理的に太陽光や風力の再生可能エネルギーの利用が難しいこと、インドネシアの電力需要の現状と今後の高まりに備えた施策についてなど興味深い話を聞かせていただいた。

今回の研修で特に心に残ったのは、現地学生との交流だ。彼らの多くが英語を流暢に話し、アジア圏を中心に国際的な視野を持っている点には驚かされた。海外志向の強さや、日本の学生以上に学問に対して真摯である姿勢には感銘を受け、インドネシアの未来の明るさを強く感じた。同時に、私たち日本人学生もさらなる努力が必要だと痛感する貴重な機会となった。

インドネシアの研修を通じて、私の中でのインドネシア像は大きく変わった。かつて漠然と抱いていた「発展途上国」というイメージは完全に払拭され、急成長する国として、力強く未来に向かって進む姿が浮かび上がってきた。この経験を通して、私は今後もインドネシアやアジア諸国に関心を持ち続け、さらなる学びと成長を目指していきたいと強く感じている。

インドネシア海外研修の感想

経済学部1年生 山田圭一郎

海外旅行に一度も行ったことがなかった私にとって、此度のインドネシア海外研修は国外へと足を運ぶ初めての機会となった。フライトチケットの予約やパスポートの申請、短期海外保険の申し込みなど不慣れな事前準備に戸惑ったが、理事長・寮長を始めとする皆さんに助けられながら無事に当日を迎えられたことにまずは安堵した。前日の夜は理事長の邸宅に泊めていただいたばかりか夕食にイタリアンレストランでご馳走になった。理事長のキリスト教精神に基づく我々寮生に対する想いを早くも実感し、感謝の思いでいっぱいだった。翌日、理事長の車に成田まで乗せてもらい、シンガポール経由でインドネシアまで向かった。無事に現地に着くことができ胸をなでおろしたのも束の間、出国してホテルに向かうまでの道中は思いがけないことの連続だった。まず、インドネシアは日本人のビザなし入国を撤回しており入国には日本円で 5000 円を支払う必要があることが判明し物議を醸した。私としては、以前はビザが必要なかっただけに日本に対する排他的な措置に対して些か残念な気持ちになった。次に、出国を完了した後、駅前で待機していたインドネシア人にマイクロバスでの移動をしつこく迫られ、高額な支払いを強いられそうになった。幸いにも粘り強く拒

否の意思表示を示し続けてくださった先輩方のおかげで格安タクシーでの移動が実現したが、断られたことを根に持った彼らに後ろ指を指されるなど非常に不愉快な思いをした。ともあれ無事にホテルに到着した我々は晩御飯を食べるべく現地の屋台へと足を運んだ。そこでは、ナシゴレンと呼ばれる炒飯や鳥およびラムのソテー、果物のスムージーなどを味わいその美味しさと安さに満足したのだが、この食事が後に災いをもたらすことになるとは思ってもいなかった。2日目はインドネシア大学を訪問し現地のクリスチャン学生と交流した。そのときに痛感したのは自分の英会話力の脆弱さだった。私の場合、思ったことを脳内で英語に翻訳して口に出すまでに時間を要したのだが、現地の学生は訛りこそ強烈なもの考えたことを淀みなく流ちょうに言語化していた。あまりの落差に自分が情けなく思われた。日ごろから英語を英語のまま理解する訓練に取り組もうと決意した。3日目は午前中にインドネシア大使館を、午後に三菱 UFJ 銀行ジャカルタ支店を訪問した。前者で学んだことは別レポートに詳しく記したので後者について振り返ると、支店長の中島氏が非常に気さくな方だったのが印象深い。我々全員からの質問に丁寧に答えてくださり、金融業界志望の私は業界研究の大切さに気づかされた。4日目以降の行程については残念ながらほとんど記憶がない。というのは、初日の夜に屋台で食べたもので食中毒を発症し体調不良になってしまったからだ。下痢がひどく食事会など一部の集まりには参加できなかったことが口惜しい。そのような状態においても、酒井重工業を訪問した際のことは些か記憶に残っている。御社は道路整備に必要となる重機を生産・販売している会社で、我々は実際に工場の中を見学させてもらうことができた。当時何も食べることができなかった私にとって、見学の後に頂戴したポカリスウェットが生命線になったと言っても過言ではない。深く感謝している。最後に、インドネシアからは外れるが、経由地のシンガポールにも出国したため彼の地についても少し記したい(このころには幾ばくか体調が回復し記憶が残っている)。と言っても、私のシンガポールに対する眼差しは決して羨望ではなかった。むしろ、東京以上に都市化した彼の地の無機質さには嫌悪感さえ感じた。

インドネシア紀行ー学びと発見の旅ー

法学部2年 高天愛

今年度の海外研修旅行に参加することによって、インドネシアと言う独自性あふれる国に多くの素晴らしい思い出を残すことができました。改めてこの変化に富んだ国について再認識し、多元的な文化背景を織り交ぜた社会への理解を深めながらも、また新たな経験・知見を得ることができたことを非常に有意義に感じています。研修旅行は9月1日から6日まで、インドネシアの首都ジャカルタ(2024年から段階的にヌサンタラへと遷都予定)で行なわれました。ここでは、人口が1150万人を超えており、2019年の近郊を含む都市圏人口は3,436万人と、東京都市圏に次いで世界第2位であったと示されたように、世界屈指のメガシティであり、東南アジア有数の世界都市でもあります。現在でも、相変わらず経済、政治、文化の中心地として重要な役割を果たしているといえます。しかし、世界的に有名な交通渋滞都市でもあり、2023年のデータによると、世界で10番目に交通渋滞がひどい都市と評価されています。というのも今回は、新型コロナの流行時期は別として、実際に私が10年ぶりにジャカルタに来ることになります。急速に変貌しつつあるこの都市では、同時に文化的な面にも包摂的で、社会構造のあり方についても多岐にわたっており、複雑な様相を呈し

ているように見受けられました。当時のジャカルタといえば、交通渋滞は深刻で、特にラッシュアワーには道路が完全に詰まってしまうという印象は確かにそうです。市内の移動は非常に時間がかかり、公共交通機関の整備が急務とされたが、近年では、MRT(地下鉄)やLRT(軽量鉄道)の建設が進められており、少しずつ改善の兆しが見られます。10年前と比べて、都市のスカイラインは大きく変わり、モダンな建築物が立ち並んでいるだし、特に目立つのは高層ビルの増加とインフラの整備です。

ジャカルタの経済も、この10年間で大きく成長を遂げたというのが、一目瞭然と言っても過言ではないほどです。特にサービス業と製造業が発展し、多くの外国企業が進出していて、日系企業もその大部であり、トヨタやホンダなどの自動車メーカーが大きな存在感を示しています。また、インフラ整備や都市開発プロジェクトも進行中で、経済の多様化が進んでいきます。しかし、経済成長の一方で、貧富の差が拡大しているのも事実です。高層ビルや豪華なショッピングモールが立ち並ぶ一方で、スラム街や路上生活者も多く見られます。このような社会の二極化は、都市の持続可能な発展にとって大きな課題になるのだと想起しました。なお、他の国と比べて特に異なる点として、ジャカルタではバイクタクシー(GrabやGojek)が非常に普及していることが挙げられます。特にバイクの普及率が高く、Grabなどのライドシェアサービスではバイクを呼ぶことが一般的です。これにより、渋滞を避けて迅速に移動することが可能です。さらに、ジャカルタの社会構造は非常に多様です。多くの民族や宗教が共存しており、それぞれの文化が融合しています。特にイスラム教が主流であり、モスクが至る所に見られます。また、現地の人々は非常に親切で、外国人に対しても温かく接してくれます。けれども、貧富の差が依然として顕著であり、高層ビルや派手な広告看板が立ち並ぶ一方で、狭くて汚いスラム街や路上で寝ている人々も見受けられます。このようなコントラストも、ジャカルタの社会構造を象徴していると思います。

10年ぶりにジャカルタに戻ってきた私は、その変化に驚くと同時に、まだ多くの課題が残っていることを実感しました。特に交通渋滞や貧富の差は依然として大きな問題です。しかし、ジャカルタの人々の温かさや活気に満ちた街の雰囲気は変わらず、再びこの都市での旅を楽しみにすることが出来ました。

今回の訪問先は、インドネシア大学(University of Indonesia)、大使館、SCMというキリスト教のグローバルな民間組織、及び三つの日本企業です。まず訪問した企業は、三菱UFJ銀行ジャカルタ支店です。オフィスフロアを訪れ、非常に優れた中島さんが質問に回答をしてくれました。彼は忙しくて時間が少ない中、短時間で一人ずつ質問を受け、それぞれのジャンルへと要約して洗練された回答をしてくれました。美味しいコーヒーとお菓子もいただきました。その後、日本語ができる外国人社員が細かく説明してくれました。オフィス内を見学し、トイレ(mushola)や授乳室(lactation room)など、細かいところまで紹介してくれました。多様な文化背景を持つ社員への配慮が感じられました。仕事の実態を一見することができ、非常に有意義な訪問となりました。次は酒井重工業株式会社インドネシアです。三人それぞれの専門分野別にPPTで会社紹介が行われ、帽子やイヤホンなどのギフトもいただき、工場見学もさせていただきました。非常に丁寧にいろいろ教えていただき、環境に配慮した製品の開発や、アフターサービスの充実に力を入れていることが分かるし、工場内の最新技術や製品について学ぶことができました。最後には、インドネシア三菱重工業株式会社の事務所を訪問しました。インドネシア三菱重工業株式会社は、エネルギー、環境、インフラ、輸送機器など多岐にわたる事業を展開しています。近年では、再生可能エネルギーの導入や、スマートシティプロジェクトへの参画など、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを進めていくことが知られました。松永さんと吉田さんによる会社紹介が行われ、PPT講演を聞いた後、質問応答も行われました。特に松永氏の海外勤務の経験を交えたお話は印象的で、仕事に取り組む姿勢に深く感銘を受けたし、これから社会人となっていく新進気鋭の学生らにとっても、胸に刻むに値すべき一節だとも考えました。もっと外へ出てみるべきという教えには同感だし、これで今回の旅が決して無駄にならなかったと一層思わせられました。いわゆる「出世」

というのも、まずは自分のコンフォートゾーンから思い切って一步踏み出すことが第一なのではないかと考えるのです。結局のところ、想像や自己流の見立てだけでは実際のことを知れるはずもなく、「百聞は一見に如かず」ともいうが、今回は実際「一见」することによって、これまでのインドネシアに対して抱いた感覚や観念がくつがえされたのもまた事実です。今回の研修旅行で最後の訪問先となった場所でもあり、まさにラスト・オブ・ラストという意味においても、旅の締めくくりにうってつけの思い出ができたのではないだろうかと感じました。

インドネシア研修を終えて

社会学部 2 年 金本知也

インドネシア研修では、様々な学びを得ることができた。その記録として、ここに自分が学んだことを記していこうと思う。インドネシア研修で特に楽しかったのが、企業訪問とジャカルタ周辺部の街の散策である。企業訪問では、三菱 UFJ 銀行、日本大使館、酒井重工業、三菱重工といった名だたる企業を訪ねることができた。自分たちを快く迎え入れてくれた、一橋 OB の方々に心から感謝したい。三菱 UFJ 銀行の中島さんのお話では、どのようなキャリアを自分が描いていきたいかということについて、改めて考える機会になった。日本大使館への訪問では、国の責任を負いながら仕事をするということについて学ぶことが出来た、また大使館に訪問することは初めてだったので、自分の想像するお固い公務員のイメージと異なったことが面白かった。酒井重工業では普段全く触れない製造業という職種について知ることができたし、それが自分にあまり合わないという知見も得られたので、非常にいい経験となった。三菱重工の訪問では、一つのプロジェクトに 10 年関わることもあるという、自分には想像できない規模の仕事について学ぶことができた。自分の飽きっぽい性格や変化を望む性格であることから、このような仕事も難しいということが理解できた。この研修を通して、自己理解やキャリアの展望がとても深まったので非常に良い経験となった。

比較的夜には自由時間が多かったため、ジャカルタ周辺部を散策した。やはり 2 億 7000 万人という人口の多さから、町中は人で溢れていた。都心部は東京と見比べても遜色ない発展度合いで、これからの益々の発展が予測されるものであった。インドネシア大学との交流では、若い才能と触れ合うことができた。彼らと自分の英語のレベル差に愕然としたし、一人一人が未来への希望を抱いて努力していて、日本との差を痛感した。この研修を通して自分が得たものは、海外に出たいという意味である。若者の熱量や駐在する先輩方のお話を聞いて、自らの興味関心を絞ることができた。齋藤理事長を始めとする寮の先輩方のご尽力により、素晴らしい研修になったことを非常に感謝している。それと共に、来年はもっと自ら主体的に動いて研修を作り上げていきたいと思った。大学 ob へのアポをはじめとして、当日の動きなど、もっと責任を持って動くべき場面が多く反省したので、この教訓を来年に活かしていきたい。

インドネシア研修旅行 感想文

法学部 3 年生 平田 華英

今回、YMCA 寮の研修旅行に初めて参加したが、全日程を通して、感じたことを書きたいと思う。

まず、インドネシア大学の学生との交流をして感じたこと。インドネシア大学のカトリック・プロテスタント団体の学生と、将来の夢や、趣味、日本の興味のある文化について話すことができた。同世代の学生が、どういった将来への展望を持っているのか知ることができ、興味深かった。インドネシア大学の構内は自然豊かかつ敷地が広大で、キャンパス内に専用のバスが通っていた。

日本大使館では、インドネシアの文化、商業、交通などについて、ご説明をして頂いた。MRT は実際に搭乗して、日本の地下鉄と変わらない清潔さを体感することができた。

三菱 UFJ では、学生の質問にお答え頂いた。就職後もビジネススクールに通うなど、努力を惜しまない姿勢に刺激を受けた。

インドネシア SCM との交流では、インドネシアでの宗教について、メンバーの方々とディスカッションをすることができた。キリスト教を信仰する契機に付いてお話を伺ったところ、親がキリスト教徒で、生まれた時に洗礼を受けたのだそうだ。

酒井重工業では、道路建設に使用するロードローラー類などの生産と販売について、企業説明を行って頂いた。実際に工場を見学させて頂くことができ、ローラーの製造の仕方や、重機の振動数の計測に立ち会うこともできた。

三菱重工業への訪問では、世界各地に発電所を建設してきたお二人に話を聞くことができた。印象に残ったのは、海外で働くということ、現地の人の役に立っていると感じるのがやりがいだという言葉だ。異国の文化の中で逞しくお仕事をなさる姿に感銘を受けた。太陽光や、風力といった自然発電が気候の特色上向かない為設置が困難で、その為原子力発電の為に建設するのが目標とおっしゃっていた。

研修とは関係なく、自由時間や隙間時間にジャカルタの街を探索して感じたことを最後に纏めたいと思う。ムスリムがほとんどという国なので、朝方4時近くになると、祈りの言葉が外から聞こえてきた。発展しているとはいいつつも、路上で物を売る人は多く、格差は目に見えて存在する。しかし、三菱 UFJ の中島さんの話で、例えば格差があったとしても、周りと比べずに、何が幸せかを考えると不幸にならないというお話があったように、彼らも家族というコミュニティを持ち、比較的幸せそうにも見えた。

初めて東南アジアを訪れたが、ジャカルタの発展に、途上国とは思えなかった。デパートの中には高級ブランドが並び、日本にはない店も多々あった。再訪問し、さらなる発展をみてみたいと思った。

インドネシア研修 感想文

経済学部 3 年 吉田元喜

コロナ禍が明けた昨年より再開した Y M C A 寮海外研修ですが、昨年度は運悪く一橋大学の中国研修と時期が被ってしまい行けなかったのが今年が初めての参加となりました。海外旅行の経験がほとんどない私にとって今回の研修は実際に現地に行ってそこでしか感じられない空気を味わえただけで大いに意味のあるものでしたが、それだけでなく理事長のご尽力とご人脈により大使館や企業、キリスト教団体の多くの人の話を聞き、またこちらからも質問することで多くの価値観に触れることができたように思います。偶然かもしれませんがちょうどローマ教皇がジャカルタにいられていたということでキリスト教についての話題は尽きません

でした。また、全体を通しての振り返りとなると私の場合はやはり途中でお腹を壊してしまい最終日は一日中ホテルの部屋に篋きりになってしまったことが挙げられます。貴重な多くの機会を失った後悔はありますが、旅行で体調を崩した今回の経験は今後海外に旅行する際に食や水により気をつける良い教訓になったように思います。

また、個別の事柄の中で特に印象に残っているのはやはり日本大使館です。正直自分の将来の進路選択として外務省を少し考えていることもあり強い関心をはじめから抱いていたこともありますが、外務省の人々がどのような仕事をしているかを知る一助として経済分析官の方のお話を聞くことができたのは非常に貴重な経験であったと思います。

現在私は留学先のロンドンの部屋でこの感想文を書いています。今回のインドネシア研修に参加した理由の一つとしてこのロンドン留学の予行演習といった側面もあったのですが、今回の留学を経たことで得られた教訓を生かそうと思います。例えば、インドネシアでもロンドンでも言語は英語ですが、自分の英語に絶対の自信がなくてもとりあえず話しかけてみればジェスチャーなどを交えて意外と会話が通じること今回の研修を通して気がつきました。最初の友達作りの時期も自分の英語でネイティブの人に話しかけたりしたら通じないんじゃないか、変なやつだと思われるんじゃないかと過度に心配せず、とりあえずまずは声をかけてみるということを意識して積極的に動こうと思います。

最後になりますが、この度は貴重な経験をさせていただき誠にありがとうございました。

インドネシア研修の感想

法学部 4 年 猪股梨玖

今回の研修では 5 泊 6 日でインドネシアとシンガポールをまわりましたがいずれも初めての訪問だったこともあり、非常に多くの学びをえることが出来ました。正直なところ、研修参加前にはインドネシアについてあまり具体的なイメージを持っておらず、事前学習で旧宗主国のオランダのインドネシアの植民地支配への執着の歴史やインドネシア内部の 9.30 事件と呼ばれる虐殺の歴史や及びマレーシア、東ティモールとの紛争など、インドネシアが経験してきた苦難を知りました。一方で実際にジャカルタに到着するとむしろ人の優しさや真面目さが印象的でした。物価の関係で私達が利用したホテルや店などが現地における高級店であったことも理由の 1 つだとは思いますが、道端で地図を見ていると地元の人が場所を教えてくれるなど親切さを感じました。訪問先については、初めに訪れたインドネシア大学との交流会では突然決まったにも関わらずプレゼンテーションなどを用意してくださりととてもよく歓迎していただけました。その後学生達と交流しているとやはり 2 億 7 千万人ほど人口のいる国のトップ大学なだけあり、英語力の高さなど優秀さを感じたほか、多くの学生が政府などに進むなど将来の進路にも恵まれているようでした。大使館ではインドネシアのエネルギー事情や交通事情、首都移転などのトピックについて複数の職員からレクチャーしてもらえました。三菱 UFJ 銀行では現地スタッフの方がオフィスツアーなども含めて丁寧にもてなしてくださったほか、一橋 OB の中島様が銀行について、またインドネシアについてなど様々なトピックについて私達の質問をもとに答えてくださりとても勉強になりました。酒井重工業を訪問した際には日本人スタッフ全員で迎えてくださり事業紹介や工場見学をしてくださったほか、ホテルまで送ってくださるなどとてもお世話になりました。三菱重工業では理系職種の方が対応してくださり、一橋にいるとなかなか何うことの出来ない専門職の働き方について何うことができ、非常に興味深かったです。それ以外の面ですと、至るところで金属探知機があったり、ショッピングモ

ールが徒歩や公共交通機関ではすこし入りにくくしてあり、タクシーなどを使う人を相手にしているなど、格差の大きい国ならではの事情を感じました。最終日にはシンガポールを観光する時間があり、市街地を回って思っていた以上に皆中国語を使っており、個人的には好都合でした。また、物価についても香港が高過ぎるというのがありますが、意外と特別高いというわけでもなかったのが印象的でした。

今回の研修を通してインドネシアとシンガポールについて、実際に肌で触れることで両国に対する理解を深めることが出来たのが最大の収穫でした。改めて今回の研修でお世話になったインドネシア各所の方々や齋藤理事長にお礼を申し上げたいと思います。

インドネシア海外研修レポート

商学部 4 年 角颯真

初めて参加した海外研修及び初めての東南アジア訪問は、想像以上に刺激的で学びが多いものとなりました。インドネシア日系企業への訪問では、確かにこのインドネシアという国で国のため、会社のために尽力されている社員の方がたくさんおられたことに感動を覚えました。特に、母国とは文化も商習慣も全く異なるこの国で強気に取り組む続ける、その精神的強さに圧倒されました。また、オフィスを歩いて感じたこととしては、インドネシア出身の社員やまた別の国出身の社員が大多数であり、日本企業現地法人はもはや「日本人企業」ではないということです。日本が好きであろうとそうでなかろうと彼らはその会社のために働いているし、逆に現地法人は彼らの生活を支える義務がある、という不可分性を強く認識しました。また、自由時間では私自身の就職予定先のジャカルタ支店・シンガポール支店も訪れることができ、気が引き締まる思いでした。私も彼らのような、日本のプライドを持ち海外で闘える人間になります。

既定の研修外の自由時間も、刺激に溢れていました。特に、ドイツ留学期の友人とオンラインで知り合った友人に二人とも会えたことが大きかったです。偶然にも二人とも中国系インドネシア人であったため、マレー系をはじめとする Native 系インドネシア人と、中国系インドネシア人の違いについて深く知ることができました。中国系はやはり宗教では仏教やキリスト教を選択することが多く、また富裕層である傾向が強いようです。一方で、中国系インドネシア人の中でも違いがあるということを聞き、非常に興味深かったです。歴史的に、都市部の中国系は富裕層として白人に次ぐ地位を持ってきたが、地方の中国系はむしろ農業労働者として Native 系民族に同化していったとのことでした。中国系が多いとされるジャカルタ北部の PIK という地区にも訪問しましたが、想像の倍以上中国系だらけでした。中国都市部のような摩天楼がそびえ、ホテル顔負けの葬儀場や中国歌謡が流れる街は、ジャカルタにありながら完全に別の文化圏・経済圏であることを示していました。中国系インドネシア人の世界も奥が深いです。

末筆ながら、本研修の実施に多大なご尽力をいただきました齋藤理事長並びに、日々ご支援いただいている基督教青年会 OB の皆様に、心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

インドネシア徒然草

齋藤金義(昭和 46 経、48 年法)

1. はじめに

インドネシアを訪問するのは今回で3度目である。今回は6年前の2018年、やはりYMCA一橋寮の寮生と一緒に海外研修旅行として訪問した。6年前との比較では、日本が建設した地下鉄や中国が建設した新幹線が開業されたこと、高層ビルが増えたこと、所得水準も向上し、人々の活気が一段と増していることが印象的であった。今回、特に強く印象に残ったことの一つに、インドネシア社会のデジタル化が進んでいることだ。特に、タクシーをGrabというソフトで呼ぶことが出来るが、これが大変普及している。大体、5分、長くても7～8分で到着するし、大人数の場合は6人乗りとかの車種を指定できる。今回、ジャカルタ市内の移動では総勢10名という人数の問題もあって、マイクロバスをチャーターすることを当初は考えていた。事実、6年前は貸し切りのマイクロバスを利用するしかなかったが、費用が高いことや目的の場所を説明するのが一苦勞、英語でのコミュニケーションを必要とした。今回のGrabは目的地を指定して呼ぶので、目的地の説明が不要であり、かつ出発地と目的地が確定した段階で料金も確定するから、雲助タクシーのように遠回りされてメーター料金が上がる心配がない。また、地下鉄であるが、これは未だ15キロ程度しかなく、あまり利用はされていないし、運転間隔も15分以上であるが、切符の購入は現金ではできず、スマホのデビットカードでしかできないから、旅行者やスマホが利用できない人には購入が出来ない。しかしこれは大変不便極まりないが、発展途上国の場合、先進国以上に進んだシステムが当初から導入されることは、良くあることである。久しぶりにジャカルタを訪問し、色々気付いてとことを、雑感風に記してみたい。



2. インドネシア国家

インドネシアの正式名称はインドネシア共和国であり、日本が戦争に敗れたあと、旧宗主国であるオランダとの独立戦争を経て、オランダが正式にインドネシアの植民地の権利を放棄し、インドネシアの独立を承認したのが1949年12月のハーグ円卓会議とされている。インドネシアはオランダ統治の植民地をそのまま引き継ぎ、大小1万7千からなる群島国家を建国した。主な大きな島は、西からマレーシアと隣接するスマトラ島、その東が人口約2億8千万人の6割が居住するジャワ島、その真北がカリマンタン島、カリマンタン島の北海岸が天然ガスで有名なブルネイがあり、その東がパプア島である。チモールはパプアの南に位置し、東ティモールは宗教上旧宗主国ポルトガルの影響もあり、カトリックであることから、一時、インドネシアに編入されたが、現在は独立国となっている。こうした群島国家の場合、首都ジャカルタがあるジャワ島との比較では、他の島々は人口も少なく、産業も殆どない。インドネシア国家の成立が、旧宗主国のオランダ植民地時代の地政学上のテリトリーにより構成されていることは、民族も言語も異なるにも拘わらず、これらを飲み込んで統一国家を形成していることは帝国主義時代の植民地支配を継続している形に見て取れる。これもやむを得ないことなのか、疑問に思うのは私だけではあるまい。多くの島において、人種、宗教、言語、慣習が全く異なる中で、国家としてこれらを束ねていくことは、政治上きわめて難しい課題である。避暑地として有名なバリ島はヒンズー教徒が殆どと言われているし、フローレス島というジャワ島の東にある島は、殆どの人がカトリック教徒である。何をか言わんや、私が会員であったカトリック上野毛教会の神父様3名はフローレス島出身である。現在、ジャカルタの過密混雑解消という狙いもあり、首都をカリマンタン島のヌサンタラに移転中であるが、これはジャカルタの過密混雑よりは、インドネシアの統一を図る政治的な意味合いが強いのでは、と三菱UFJ銀行インドネシア支店長中島和重氏のコメントである。

3. 経済、産業及びアセアンにおける位置

インドネシアは資源に恵まれた国である。日本は大東亜戦争開始から間もなく、石油資源豊富なスマトラ島のパレンバンを落下傘部隊により確保したことは、良く知られている、原油に関しては言えば、インドネシアはOPEC加盟国であり、過去は原油輸出を行っていたものの、近年では石油消費量が生産量を上回っており、原油に関しては純輸入国になっている。ニッケル、錫、銅は埋蔵量も豊富で、特にニッケルの埋蔵量は世界一、錫は第2位、銅は第9位と言われている。最近では、これら第一次鉱物資源をそのまま原料として輸出せず、二次製品として、付加価値を高めて輸出することを政府は目指している。人口は、アセアン諸国の中で最大の約28百万人、しかもこの平均年齢は29歳と若く、日本の約50歳との比較では20年以上若い。出生率は2を大きく超えており日本の1以下を大きく下回る。人口は毎年1%以上増加し、人口ボーナスが見込める若い国であり、未来の成長と発展が約束されている。

(3) 人口 (2022年)

| | 人口 (万人) | 構成比 (%) | |
|--------------|----------------|--------------|--------------|
| | | 世界 | ASEAN内 |
| ブルネイ | 45 | 0.0 | 0.1 |
| カンボジア | 1,677 | 0.2 | 2.5 |
| インドネシア | 27,550 | 3.5 | 40.5 |
| ラオス | 753 | 0.1 | 1.1 |
| マレーシア | 3,394 | 0.4 | 5.0 |
| ミャンマー | 5,418 | 0.7 | 8.0 |
| フィリピン | 11,556 | 1.5 | 17.0 |
| シンガポール | 564 | 0.1 | 0.8 |
| タイ | 7,170 | 0.9 | 10.6 |
| ベトナム | 9,819 | 1.2 | 14.5 |
| ASEAN | 67,945 | 8.5 | 100.0 |
| 日本 | 12,512 | 1.6 | |
| 中国 | 141,218 | 17.8 | |
| 韓国 | 5,163 | 0.6 | |
| 世界計 | 795,115 | 100.0 | |

(出所) World Bank, World Development Indicators database

インドネシアの実質経済成長率は、このところ毎年、5%成長を遂げており、勿論、政府は8%の目標を掲げており、それは無理としても人口増加が期待できるので、基礎的な成長率は人口増加だけで1%以上ある。問題は人口が多く、失業率も8%と高いことから、一人当たりGDPはアセアン諸国中低位にあり、タイの下、ベトナムより少し上という位置である。中国なみの一人当たり1万ドルを超えるにはあと約20年が必要とされよう。今回、インドネシアの帰路、シンガポールに立ち寄り、市内観光を行ったが、一人当たりGDP8万2千ドル、日本の2.5倍のシンガポールはアジアの中で断トツの国であることを実感した。多くの企業がアジアのリージョナルヘッドをシンガポールに設置しているのも納得である。

(5) 1人当たりGDP (2022年)

| | 1人当GDP (米ドル) |
|--------|-----------------|
| ブルネイ | 37,152 |
| カンボジア | 1,787 |
| インドネシア | 4,788 |
| ラオス | 2,088 |
| マレーシア | 11,972 |
| ミャンマー | 1,096 |
| フィリピン | 3,499 |
| シンガポール | 82,808 |
| タイ | 6,909 |
| ベトナム | 4,164 |
| ASEAN | 5,331 |
| 日本 | 33,815 |
| 中国 | 12,720 |
| 韓国 | 32,255 |
| 世界平均 | 12,647 |

い (出所) World Bank, World Development Indicators database

4. インドネシアの宗教

インドネシアの人口の8割はムスリム、つまりイスラム教である。しかし、インドネシアのイスラム教は、サウジアラビアやイランとの比較では穏健派に属しており、左程厳格ではない、また、インドネシアは多宗教として有名で、ムスリムの他、カトリック、プロテスタント、仏教、ヒンズー教、儒教合計6つの宗教が公認されており、また、最近では土着的な先祖崇拜もこれに加えられて合計7つが国家公認宗教となっている。インドネシアのムスリムはサウジアラビアやイランなどとの比較では、あまり厳格ではなく、お酒を置いてないレストランも多いが、お酒を自由に楽しめるお店も結構な数がある。つまり、重要な点は、国家は憲法上、国民はこれらの7つの宗教から一つを選択しなければならず、選択された宗教はIDカードに記載が義務付けられる。つまり、無宗教はいないのである。外務省の2019年統計によれば、ムスリムは86%、カトリック3%、プロテスタント7%、ヒンズー教1.7%、仏教0.8%、儒教0.03%、その他0.04%となっている、キリスト教はムスリムに次いで、第2勢力である。私たちが滞在中の9月上旬、フランススコ教皇がジャカルタを訪問し、ムスリムのモスクで対話をされたとの報道がなされたが、キリスト教信者が相応にいることには驚いた。インドネシア大学では、カトリックとプロテスタントの学内団体の代表とその幹部メンバーと懇談の時を持つことが出来たが、あるプロテスタントの学生の通っている教会が会員規模五千人で毎週、多くの信者が礼拝を守っている写真を見せて貰い、こんなに多数が出席する教会があることに驚いた。日本の教会の今後についての質問がなされたが、高齢化が進み、若い世代が教会に来ないので、日本の教会の未来が閉塞状況にあることを説明せざるを得なかった。代わりにと言っては何であるが、お隣り韓国の教会の話をし、あそこは凄いと説明したが、韓国の教会が盛んであることは、インドネシアのクリスチャンの間では良く知られているようであった。最後に、インドネシア大学のクリスチャンと話をする中で、大変印象深いことが一つあった。それは、結婚を希望する二人の宗教が異なる場合、どちらかに改宗し、夫婦は同じ宗教でないと結婚が認められない。これは、インドネシアの憲法なり、政府が家庭と子供の教育の重要性を認識しているからである。教育は学校だけで行われるものではない。特に宗教教育は家庭で行われるのであるから、異なる宗教を信ずる夫婦の家庭では、宗教教育が出来ないことになる。私事であるが、僕の場合、妻は仏教徒であったが、子供の教育のために、進んで僕と同じプロテスタント信者になった。その時の妻の言葉は、「夫婦が同じものを信じていなかったら、子育てと子供の家庭教育は出来ない」と断言したことを思い出した。まさにインドネシアはそれを実践してる。

5. インドネシアと日本

インドネシアはアセアン諸国、アジア全体の中でも大変な親日である。大東亜戦争の時、オランダを駆逐し、日本軍政下となったとき、当時のインドネシア軍政官であった今村均大將が、オランダ独立運動の指導者スカルノを獄中から解放し、それが戦後、スカルノをリーダーとする独立戦争に繋がっていることは記憶に留めたい歴史の事実である。今村大將が戦後GHQの戦犯として訴追されたとき、スカルノをはじめ国民の

助命嘆願運動により、今村大將は死刑を免れ、懲役10年の刑に減刑された。戦後、日本はスカルノ大統領時代、多くのインドネシアの利権を得ながら、インドネシア復興の援助を行い、第三夫人まで貢いで、インドネシアとの友好を深めた。インドネシアへの日本企業の進出は活発に行われ、道路を走る車の9割以上が日本車である。新幹線も早くから日本が導入調査を行い、提案をしたが、これは中国に受注価格と日本の詳細な調査結果をインドネシア政府官僚が中国に横流したことで、中国に奪われたが、その後、中国の新幹線の話は当初の提案と大いに異なることになり、インドネシア政府は、話が違ったことに大変遺憾を覚えているとの報道がなされている。ジャカルタの地下鉄は、日本企業が受注し、開業し、無事運航されている。中国の受注工事の問題点は、工事が主に中国人労働者によって行われるので、インドネシアの雇用が増加しない、あるいは保守や運航管理が、地元インドネシア人ではなく、中国企業が行うことが多く、現地化が進まないという問題点が指摘されている。それでも中国の進出は凄まじく、その存在感が大きくなっていることは間違いない。インドネシアは中国とは領海問題で争いがあり、中国の海洋進出の積極化に伴い、この問題の対立が深まっている。そういう中で、インドネシア経済と社会の着実な発展のために、産業の高度化あるいはインフラ整備のために日本が今後とも貢献できる余地は大きいものがある。また、人口が多く、若年労働者が多いインドネシア人の移民の受け入れは、労働力の決定的な不足に悩む日本にとっても大きなメリットがあるだけに、これを積極的に行うことが必要であろう。そのための日本語教育やインドネシアの若者の日本への留学支援強化策を大に行うべきと思われる。

6. インドネシア料理

インドネシア料理については余り良くは分からないが、今回 Plaza Indonesia という高級ショッピングモールにある高級インドネシア料理を最終日の9月5日、打ち上げ会として味あう機会があった。もともとはジャカルタ如水会の皆さんと一緒にということで、如水会幹事大家様にご紹介を頂いた。Seribu Rasa という名前であるが、チェーン店でジャカルタ市内には沢山あるようだ。料理の内容は中華料理によく似ているが、概して甘味が強いのが特徴である。やはり一番無難でお勧めがナシゴレンというチャーハンであるが、これも色々種類があって、エビ入りや付け合わせが違って来るが中身は卵の入ったチャーハンで、揚げた煎餅が必ずついてくる。これが一番口にあう。料金は飲み物入れて一人5千円で十分であるが、安い店なら2~3千円で楽しめる。





インドネシア研修旅行 総括報告

理事長 齋藤金義

1. インドネシア研修旅行の概要

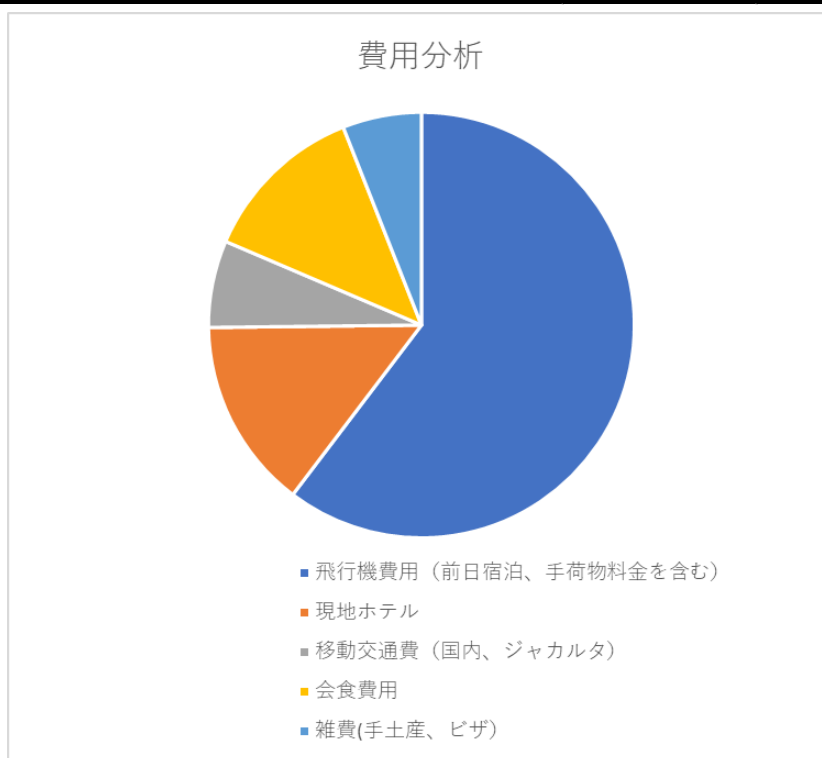
日程及び参加学生

| 学年 | 寮生氏名 | 学部 |
|-----|-------|----|
| 1年生 | 山田圭一郎 | 経 |
| | 花田智紀 | 法 |
| 2年生 | 高天愛 | 法 |
| 3年生 | 吉田元喜 | 経 |
| | 見定和樹 | 経 |
| | 金本知也 | 社 |
| | 平田華英 | 法 |
| 4年生 | 猪股梨玖 | 法 |
| | 角 颯真 | 商 |

| 9月1日 | 9月2日 | 9月3日 | 9月4日 | 9月5日 | 9月6日 |
|---|---|--|--|---|--------------------|
| 集合 6時00分 8:15 | インドネシア大学 | 集合 ホテルロビー | AM 9:30 | 自由行動 | ホテル出発 6時15分 |
| Scoot 809 | We will be very happy to have you and your students here at the Faculty of Economics and Business Universitas Indonesia (FEB UI). | 8時30分 | Indonesia SCM Ria Claudia | | 空港到着 7時30分 |
| 成田国際空港 | We also really understand your situation and conditions there. | 日本大使館 | Jalan Salemba Raya No. 10, Flat 21. | | |
| T1 南ウイング | | 訪問時刻 9時 | | | 9:45 |
| | | ホテル集合時間は追って連絡 | | | Scoot 275 |
| ジャカルタ到着 19時10分 | Mr. Bernard Rendra | | | | シンガポール到着 |
| ホテル | | 午後1時30分 | | 午後1時30分 三菱重工業株式会社 | シンガポール観光 |
| Holiday Inn Express Jakarta Wahid Hasyim | Here is my WhatsApp number (also my phone number): | 株式会社三菱UFJ 銀行 MUFG Bank, Ltd., Jakarta Branch | 午後1時30分 酒井重工業株式会社 | PT. MITSUBISHI HEAVY INDUSTRIES INDONESIA | シンガポール出発 22時15分 |
| 1 ルピア は 0.0093 円 | And this is the https://g.co/kg | 中島 和重 | PT. SAKAI INDONESIA | Sentral Senayan II 12th Floor JL Asia Afrika No.8, Gelora Bung Karno-Senayan Jakarta | |
| タクシー 20万ルピア | | Trinity Tower 6th fl. Jl. H.R. Rasuna Said Kav. | 馬場 洋 EJIP Industrial Park, Plot 6G, Cikarang Selatan | | |
| 約2千円 | 62(821)4098-0613 | C22 Blok IIB Jakarta 12940 Indonesia | Bekasi-17530, Indonesia | +62-811-895-907 (松永氏) | 9月7日 |
| | | 811-1915-5032 | | | 成田到着 7日6時15分 |
| | 如水会ジャカルタ 支部懇親会 | | 813-1463-6357 | +62-811-1901-8166 (ヒカム氏) | |

2. 会計と費用分担

| 項目 | 合計 | 一人当 |
|----------------------|-----------|---------|
| 飛行機費用（前日宿泊、手荷物料金を含む） | 701,120 | 77,902 |
| 現地ホテル | 168,400 | 18,711 |
| 移動交通費（国内、ジャカルタ） | 76,833 | 8,537 |
| 会食費用 | 146,185 | 16,243 |
| 雑費(手土産、ビザ) | 69,624 | 7,736 |
| 合計 | 1,162,161 | 129,129 |



| | | | |
|----------|-------|-----------|-----------|
| 如水会からの補助 | 予定 | 費用総額の3分の1 | 387,387 |
| 寮生負担金 | 一人4万円 | | 360,000 |
| YMCA寮会計 | | | 414,774 |
| 合計 | | | 1,162,161 |

| 2024年 | | 領収書番号 | 日本円 |
|-------|--|------------|-----------|
| 日時 | 目的内容 | | |
| | 航空券 成田ージャカルタ往復(個人別領収証別添) | 別添航空券参照 | 554,420 |
| 8月31日 | 訪問先手土産 ヨックモック 3個 1600*3 | NO1 | 5,184 |
| 8月31日 | 訪問先手土産 たねや 最中 6個 3千円*6 | NO2 | 19,440 |
| 8月31日 | 仮払金 | | |
| 8月31日 | 成田前宿泊ホテル費用 | NO3 | 32,400 |
| 8月22日 | ジャカルタホテル ホリデイインエクスプレス 5部屋*5日合計 | NO4 | 168,400 |
| 9月1日 | 成田空港駐車料金(学生行き2名、帰り3名同乗) | NO5 | 8,000 |
| 9月1日 | 手荷物追加払い | NO6 | 15,600 |
| 9月1日 | 手荷物追加払いJCB法人カード支払い 領収証なし | NO7 | 46,800 |
| 9月1日 | 成田空港 朝食(早朝のため、領収証なし、JCB) | NO8 | 5,830 |
| 9月1日 | シンガポール空港乗り継ぎ ランチ 領収証なしJCB | NO9 | 7,382 |
| 9月1日 | インネシア入国 ビザ費用 5千円*9名(学生分のみ) | 領収証添付P23参照 | 45,000 |
| 9月1日 | ジャカルタ空港ーホテル タクシー(別途タクシー費用明細) | 無し | |
| 9月2日 | 理事長学生懇親会(第1グループ、金本、平田、高) 費用計上1/2 | NO10 | 10,763 |
| 9月2日 | インドネシア大学訪問タクシー費用 (別途タクシー費用明細) | | |
| 9月3日 | 理事長学生懇親会(第2グループ 見定、山田、花田) 費用計上1/2 | NO11 | 12,487 |
| 9月3日 | 大使館訪問は徒歩、三菱UFJ銀行訪問タクシーは別添明細 | | |
| 9月4日 | SCM及び酒井重工業訪問タクシー費用は別途明細 | | |
| 9月4日 | 理事長学生懇親会(第3グループ 猪股、角、吉田) 費用計上1/2 | NO12 | 11,714 |
| 9月5日 | 三菱重工業訪問 地下鉄とタクシー利用 別途明細 | | |
| 9月5日 | 打ち上げ会 インドネシア料理 Seribu Rasa Plaza Indonesia | NO13 | 37,076 |
| 9月6日 | ホテルー空港 タクシー(別途タクシー費用明細参照) | | |
| 9月6日 | ジャカルター成田 手荷物費用 | NO14 | 17,300 |
| 9月6日 | ジャカルター成田 手荷物費用 | NO15 | 17,300 |
| 9月6日 | ジャカルター成田 手荷物費用 | NO16 | 17,300 |
| 9月6日 | シンガポールお茶 齋藤支払い | | |
| 9月6日 | シンガポール空港 ランチ | NO17 | 9,536 |
| 9月6日 | シンガポール空港 夕食 Din Tai Fun(シンガポール在住城さん参加) | NO18 | 51,398 |
| 9月8日 | ジャカルタでの現地移動タクシー費用 | NO19 | 24,690 |
| 9月8日 | 国立ー成田空港往復交通費 合計 | NO20 | 44,143 |
| | 小計 | | 1,162,161 |
| | 参考 一人当たり | | 129,129 |

➤ 会計についてのコメント

- 今回 SCOOT というシンガポール航空傘下の LCC を利用した。表面的には56千円～77 千円と購入時期や座席指定の有無により航空券は安いと見えたものの、手荷物料金が1個20キロ未満で15千円～17千円が徴収され、かつ出発日が早朝であったので、成田前日宿泊が必要であり、また、乗り継ぎ地のシンガポールでの乗り継ぎ時間が長時間となり、その間ランチや帰路の場合の夕食費などが必要となり、一人当たりの航空券はこれら前日宿泊と手荷物費用を入れると1人当たり8万円近いものとなった。これは6年前、キャセイパシフィックで香港経由の航空機費用が 69,930 円であった比較で言えば割高となった。今後は SCOOT は利用しない方が良いと思われる。なお、今回航空券チケットは各人が考究したので、購入したので、購入タイミング及び代理店経由の購入と SCOOT の HP での購入などで差異がでたが、今後は一括購入が分かりやすく、領収証の管理からも好ましい。
- 今回の会計で特筆しておきたい点は、現地ジャカルタでの移動交通費がグラブというソフトの利用により、マイクロバスの貸し切りに比較し、各段に安かったことである。空港ーホテルの往復及び2～5日の訪問先への移動全て含めて、現地移動タクシー費用は 24,690 円であった。2026 年のマイクロバス貸し切り費用は3日間、96 千円でこれ以外にホテルと空港のタクシー費用 16 千円が別途かかった。この点は寮生の金本君、角君の貢献が多であったこと、ここに特記し、謝意を述べたい。
- 総費用は 1,162 千円、寮生一人当たりでは 129 千円、寮生自己負担は4万円(一律)で合計9人分 360 千円、如水会補助予定 387 千円、寮費から拠出金 414 千円、合計 1,162 千円の見込みである。

墨田区の保育の歴史とキリスト教

佐藤周一(昭和 54 法)

1. はじめに

私は昭和30年(1955 年)に生まれ、小・中・高は自宅から徒歩通学できる公立校で学んだ後、一橋に入学した者ですが、高校を卒業するまで墨田区という東京の下町を代表する地域で暮らしました。小学校に入学する前は「興望館」という自宅から徒歩 10 分の保育園に通いましたが、そこはキリスト教精神に基づく保育を実践していた施設であり、4 年前に上梓した自分史にも記述した通り、後年の YMCA 一橋寮での学びや、卒業後の受洗に繋がる素地の形成に影響したと考えています。

実は先日、自主上映形式による映画会で『あの日のオルガン』という作品を鑑賞する機会がありました。この映画は、昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲の数カ月前に、墨田区内の保育園がいち早く幼児疎開を実施していた史実を元に制作された作品で、それを観た私は、当時の保育園の実態や興望館保育園との関係を知りたくなり、少し調べた成果を以下に報告させていただきます。

2. 我が国における保育園の歴史

保育園の歴史は、古くは各地域で自主的に運営されていた「農繁期季節託児所」を原型とするようですが、明治維新以降の社会変動の中で、農村から都市への人口流入が進行する一方、旧士族や職人階層の分化が進み、都市貧民層が形成されたことが都市型民間託児所が登場する背景となっていきます。記録に残る保育園としては、1911 年(明治 44 年)東京・麹町の双葉幼稚園に併設された保育園が貧困家庭の幼児保育を行なったのが嚆矢とされています。実は幼稚園の方が誕生は早く、1875 年(明治 9 年)には東京女子師範学校(現在のお茶の水女子大学)附属幼稚園が最初の幼稚園とされ、文部省の後押しもあって官民各種の幼稚園が各地に設置されていきました。

現在でも「幼保一元化」が課題とされているように、幼稚園と保育園は明治時代からその設立主旨が異なり、幼稚園は「学校」の一種として教育に重点が置かれる一方、保育園は「保育が欠ける」幼児を対象に、救貧事業すなわち「福祉」の一環として位置付けられたことが似て非なる二つの園の出発点となりました。幼稚園が文部省⇒文部科学省が管轄であるのに対し、保育園は内務省から厚生省に所管が移り、現在は「こども家庭庁」が所轄官庁となっています。

救貧事業としての保育は、キリスト者・石井十次による岡山孤児院(1887 年・明治 20 年)にその原型が見られるほか、大阪愛染橋保育所(1909 年・明治 42 年)など都市部にも拡大していきます。岡山孤児院は、その後、大原孫三郎の妻・寿美子が経営する「倉敷・若竹の園」に継承されていきます。

公立保育園は、大阪市の鶴町第一託児所の開設(1919 年・大正 8 年)が国内初とされています。その 2 年後(1921 年・大正 10 年)には、東京市本所区(現在の墨田区)に江東橋託児所が東京市初の公立保育所として誕生しています。関東大震災後の 1927 年(昭和 2 年)には、東京市月島託児所が震災後初の耐火建築構造による保育園として活動を始めました。以後、公立保育園は増え続け、1930 年(昭和 5 年)には全国で 110 園が運営されていました。

墨田区における保育園の歴史とキリスト教の影響

墨田区(戦前は向島区と本所区)は、江戸時代から水運が発達した地帯だったことから明治時代の半ば以降、様々な規模の工場建設が進み工業地域化しました。そこに地方からの工場労働者が集まり、人口が急増していきます。特に繊維産業(鐘ヶ淵紡績など)では女工と呼ばれた女性労働者も多く、工場労働者同士が結婚すると共働き家庭となり、さらに子どもが生まれると託児が課題になっていきました。そこで企業の中には、優秀な労働力確保の目的もあり、工場内託児所を設ける所も出てきました。区内では 1902 年(明治 35 年)鐘ヶ淵紡績株式会社内鐘ヶ淵乳児保育所が設けられたのが最初で、前出の民間保育所

(双葉保育園)より9年も早く設置されています。

戦前は社会保障制度が十分に整備されておらず、公的補助は対象者が限定されていました。そこで明治時代の後半から、キリスト教や仏教など宗教系団体が社会事業として保育所の開設を始めていきました。興望館保育園は1919年(大正8年)に日本基督教婦人矯風会外人部会に集った人々を中心に設立されたセツルメント(注)「興望館」での託児から始まります。東京市初の江東橋託児所よりも2年早い開設で、初代館長は吉見静江(のちの厚生省初代保育課長)が務めました。

興望館は当初、本所松倉町にありましたが、1923年(大正12年)9月1日に発生した関東大震災とその後の火災で保育園は焼失。震災復興事業により、現在の墨田区京島に拠点を移しました。同様に震災復興事業として開設された保育園としては、震災を期に神戸から東京に来たキリスト者で社会事業家の賀川豊彦が創設した本所基督教産業青年会による「光の園保育学校」があります。震災後の活動は1924年(大正13年)1月に本所の安田邸跡に仮設されたテント張りの託児所から始まり、やがて東京市の要請で本所の興望館跡地に移設されました。また、同時期に菊川保育園を運営するキリスト教系のベタニアホームが母子寮を開設したほか、現在の共愛館保育園(墨田区押上3丁目)を運営する共愛館のルーツも、カナダ人宣教師らの活動が基盤になっています。

(注) セツルメントとは、1870年代に英国で始まった社会福祉運動で、学生など若者が貧困問題等を抱える地域で暮らしながら、地域や住民のために問題解決を実践する活動拠点のことも指します。日本では関東大震災の被災者救護に参加した東大教授の末広巖太郎(民法・労働法)穂積重遠(民法)らと学生救護団による活動が契機となって誕生した「東京帝国大学セツルメント」が有名です。正式な活動は1924年(大正13年)に本所区柳島元町(現在の墨田区横川4丁目付近)に拠点を置いて始まりました。1926年(大正15年)には託児部を設置して本格的に託児事業へも取り組んでいきます。しかし日本が戦争に向かう社会状況の変化を受けて、東大セツルメントは特高警察から左傾化した団体として監視を受けるなど思想弾圧を受けた結果、1938年(昭和13年)には閉鎖が決定。拠点施設は恩賜財団愛育会に譲渡され、保育施設は愛育隣保館となりました。

3. 昭和の戦争と保育園

昭和に入ると、無産者保育所という労働者のための保育園が作られます。その系譜を継ぐのが1937年(昭和12年)に設立された厚生館保育園です。吾嬬無産者託児所を引き継いだ城東託児所を職員の西條億重が買い取り、厚生館託児所を開設しました。この頃、前出の通り、東大セツルメントは解散に追い込まれ、その保育施設を引き継いだ愛育隣保館も保育活動は行ないましたが、どちらかと言えば研究保育施設としての側面が強く、発達心理学などをテーマとする学者や見学者の来園が相次ぐなど、活動内容に変化が見られました。

太平洋戦争下、戦局の悪化で空襲の危機が増すと、愛育隣保館並びに愛育会系列の戸越保育所(品川区)の園児を疎開させる疎開保育が計画されました。当時は既に小学校以上の児童・生徒を対象とした学童疎開は実施されていましたが、乳幼児は対象外とされ、計画発表当時は保護者の反対も大きかったことが映画『あの日のオルガン』でも描かれています。しかし、園長や保育士たちの強い危機感と責任感から1944年(昭和19年)11月に、埼玉県平野村(現在の蓮田市)の妙楽寺が疎開先に選ばれて疎開保育が始まりました。3歳から6歳までの園児53名と保育士ら職員11名での疎開生活でした。翌年3月10日の東京大空襲で本所の愛育隣保館は焼失し、少なくとも数名の園児は孤児になりましたが、区内の多くの保育園では多数の園児や家族、職員が犠牲となりました。

焼失した墨田区内の各保育園では、戦後の復興のあゆみはそれぞれ異なりました。光の園保育学校は東駒形教会の復興に合わせて1949年(昭和24年)に再開されています。共愛館は、戦前の愛清館と亀戸にあった共励館の合併により生まれ、1956年(昭和31年)共愛館保育園として認可されました。ベタニアホームや厚生館では、国の要請もあり母子寮の再開を保育園より優先していました。外地からの引揚げ者や夫を戦地で失った母子家庭が多かったことが背景にあると思われます。

東京初の公立施設である江東橋保育園も空襲で被災しますが、建物は修理され、1991 年(平成 3 年)まで使われました。1961 年(昭和 36 年)には墨田区立保育園となっています。園長を務めた鈴木とくは戦前の東大セツルメント託児部や愛育保育園での保育事業に携わった人物で、他の保育園から「お手本」とされた運営を行ないました。

4. 高度成長期から現在まで

戦時下から社会保障制度は徐々に整備が進んでいきました。戦後は GHQ の指導もあり、一層の制度充実が図られる一方、ベビーブームや高度成長期前後の核家族化の進展で、保育の必要性は急速に高まり、区内でも私立保育園の開園が相次ぎました。革新都政と言われた美濃部亮吉都知事の時代には、公立保育園の増設も積極的に行なわれました。

1985 年(昭和 60 年)に施行された「男女雇用機会均等法」により、女性の経済的自立が実現可能となり社会進出が進む一方、保育所の不足や待機児童問題が一般化していきます。東京都では 2001 年(平成 13 年)に自治体認証保育所制度を取り入れ、保育所不足の解消を目指しました。国は 2012 年(平成 24 年)に待機児童対策として「子ども・子育て支援法」を成立させました。

その後、子どもの出生数が減少に転じ、少子化が進行しても、バブル崩壊以降の経済停滞を背景とする実質賃金の低下は共働き家庭の増加に繋がり、保育の必要性が低くはなりません。特に墨田区は平成後期の「東京スカイツリー」建設効果や、メトロ半蔵門線の乗り入れで交通の利便性が高まったことから子育て世代の転入率が高く、区民の保育に対する期待は依然として高い状態が続いています。(墨田区人口:スカイツリー竣工時の 2012 年は 24 万人⇒10 年後の 2022 年は 28 万人に)

以前から全国的な課題となっている「待機児童問題」に関しては、墨田区は種々の施策の実施により、令和 5 年(2023 年)度以降、待機児童数はひと桁になっています。一方、年齢別の独立した保育室の無い保育園が以前より増えていたり、保育士などスタッフの低賃金問題などが課題として残されています。因みに令和 6 年(2024 年)現在、区内の認可保育園は、区立が 26 園(公設民営含む)私立が 61 園、幼保連携型認定こども園が区立・私立合わせて 4 園、合計 91 園が日々活動しています。

5. おわりに(雑感)

私が生まれた昭和 30 年(1955 年)は、戦後復興が一段落し、政治的にも「55 年体制」と云われる自民党の一強与党としての地位を確立した年でもあります。しかし、その頃の墨田区は経済的に困窮する区民も多く、山田洋次監督の映画『下町の太陽』に描かれている通り、バラック建ての家屋も目立つ一方、下水は未整備で不衛生であり、道も未舗装で雨が降るとぬかるんで歩きにくい箇所が相当ありました。墨田区の中心部である向島地区は東京大空襲でも焼け残った区域が多く、焼失面積の大きかった本所地区や江東区が早期に再開発に着手し復興が早かったのに比べ、消防車両も入れない道幅の細い路地区域に低層木造住宅が今でも密集しており、高齢化に伴う独居老人世帯も多いことから、首都直下型地震発生時には火災被害も想定され、大きな課題として残っています。

私の両親は共に高等小学校卒で学歴は低く、父は現業職の地方公務員(東京都交通局)、母は近所の町工場の食堂で賄い婦をして家計を支えていました。共働き家庭の為、必然的に通わされた興望館保育園での日々は思いのほか楽しいものでした。保母さんが紙芝居をしてくれたり、蔵書数の多い絵本もよく読んだものです。クリスマスには園児による寸劇があり、私はヨセフ役をやったことを覚えています。生まれて初めての聖書との出会いでした。

今回、あらためて興望館保育園の歴史を紐解きながら、墨田区の保育の歴史を概観してみると、予想した以上にキリスト教の影響が大きかったことが判明しました。欧米宣教師たちの関与も見られますが、関東大震災(1923 年)と東京大空襲(1945 年)という二つの大きな災厄(前者は自然災害、後者は戦災という違いはあるものの)で焼き払われた町に、いち早く保育施設を再建・再開させたエネルギーは何処からきたもの

だったのでしょうか。前者に関連しては、東大セツルメントの活動が特筆されて良いと思います。賀川豊彦の影響の下、多くの学生セツラーが当時の社会課題と向き合い、真摯な活動経験を糧に巣立っていきましたが、戦時下の思想弾圧により、僅か十数年で終息させられたのは誠に残念なことでした。因みにYMCA 一橋寮創建時の貢献者の一人でもある大平正芳氏の親友でもあった一橋大学名誉教授の吉永榮助氏(1912～1998:商法)は、その自叙伝に自宅近くにあった柳橋セツルメントのことを記述しておられます。氏は墨田区出身で私の高校(都立墨田川:当時は府立七中)の大先輩でもあります。

現在の寮生で、保育に関心を持つ学生は決して多いとは思いませんが、明治以降の近代化の中で、下町固有の社会的事情から保育園が発達し、その展開過程に多くのキリスト者の関与があったことを認識して貰えれば幸甚です。偶々昨年秋から、東京 YMCA の事業として、外国にルーツを持つ学童への支援を週 1 回、YMCA 一橋ホールを会場に実施されていますが、こうした事業にも幾ばくかの興味を持って頂きたいと切に願いつつ、本稿を終えたいと思います。

【参考文献等】

「あの日のオルガン 疎開保育園物語」 久保つぎこ著 朝日新聞出版(2018 年 7 月)

映画「あの日のオルガン」 平松恵美子監督・脚本 主演:戸田恵梨香(2019 年 2 月公開)

「すみだの保育の歴史」 すみだ郷土文化資料館のパネル展示より抜粋

寮祭実施報告

下記のとおり寮祭が実施された。

参加寮生、欠席は女子寮生全員欠席(うち高、平田の女子寮生は無断欠席、男子寮生は松尾君、大学院受験)、三浦君(午前の講演会のみ欠席、試験のため)を除く寮生。

OB 出席者:講師崔勇、関和義、滝澤、今川、建内、齋藤 以上6名

1. 日時 2024年10月26日土曜日

2. 場所 YMCA 一橋ホール

3. プログラム

第1部 講演会 10時半～12時 講師 崔勇様(平成2年法卒)

演題「職業選択としての資産運用ビジネス PE ファンドの概要、そして FIRE(Financial Independence, Retire Early)を目指して」

講師:崔勇氏 アダムズ・ストリート・パートナーズ・ジャパン 日本代表
Team (adamsstreetpartners.com)

職業選択としての資産運用ビジネス

PE(未公開株)ファンドの概要、そしてFIREを目指して

崔勇(平成2年法)

議事録作成者 石井直樹

1. これまでの経歴

長銀からファンドビジネスに従事

今日は私の仕事を中心に、学生には資産運用業界に入ってほしいという思いもあり、説明いたします。大阪出身、高校は岐阜県加納高校

1990年に長銀に入学し、外為や企業向け営業活動を行っていた。長銀の最後で資産運用ビジネス、外為に配属、その後長銀破綻の直前にUBSに入社

2000年代頃からは現在のビジネスに従事し、2013Adams Street Partners 入社

アダムス ストリート社の資産規模は9兆円規模、ファンド会社としては上位10だが中堅くらい
資産運用の資金の出し手は大きく変化し、金融機関がメインの顧客になった。

伝統的株債権では運用が難しくなり、PEに移ってきている

今学生には直接関係ないが、日経の一面には必ず書かれているし、人生を通して一生のかかわりがある。

本日の主な講演の項目は以下となる。

- ・資産運用ビジネスとは
- ・PEファンドとは
- ・金融リテラシーを身に着ける
- ・FIREを目指して
- ・Q&A

2. PE＝未公開株について

身近な例で言うと三菱商事がKFCの株をKKRに売却するということがありました。

KFC: 商事が買収して上場させた。カーライブがそれを買取り、非上場化、更に大きな会社にして収益を得る。

上場している会社を非公開化する意味は、公開企業だと、四半期に決算を出さないといけない→株価にノイズが出る。

じっくりとその会社に対して投資をして成長させることが難しくなる。一旦非上場化して経営者を入れ替える。

新規ビジネスも実行しやすい。投資した資金の2倍にして回収するのが彼らの目的

日本でも大きな存在

3. 金融リテラシー

日本は文化적으로お金の話を嫌う、金融教育も行ってこなかった。これがしっかりとないと金融トラブル、犯罪に巻き込まれる恐れもあります。一橋の学生でも金融の知識は少ない。

これから生きていくにあたっていくら必要なのか、それをどう稼ぐのか知識を身に着ける必要がある。

また、FIRE: 会社を辞めて投資だけで生きていくことも話題になっている。これは億り人を単に目指しているわけではない。自分で会社をもって生きていく

資産運用: トレーディングを想像するかもしれない。アセマネビジネスはトレーディングとはかなりほど遠い。

トレーディングは資産運用のごく一部であるし、そこまで儲からない。最近では人ではなく機械にトレーディングを任せるケースも多い。

就職先の規模が大きいのか、時間とコストに対して収益が大きいのかを考えるのは非常に重要です。

これが何を意味するかと言うと、就職先が儲かっているビジネスか、規模感を見て考える必要がある。処遇に直結する

資産運用ビジネスの世界的規模は3兆円で、どんどん増えています。

投資家がたくさんいる。日本年金機構の資産規模は250兆円、世界第一位。

年金: 若い人の掛け金を集めている。積立金を持っている国は少ない。しかし日本は積立金がある。

250兆円を運用しなければいけない。昨年は45兆円の収益。約20%が一年で儲けられたという計算

GPIFはもっと運用したい。年金を払わない人が多いから。若い人は、自分が高齢化したときに年金を受け取れるか分からない、不信感を持っている人が多い。

年金:国がお金を半分拠出されている。

掛け金+税金が入っていて、それを将来受け取れる。

資産運用のプロがビジネスとして成り立つ。

アメリカ:職域の年金がある。カリフォルニア州州職員の年金:74兆、スタンフォードの寄付金運用:5兆
規模感が大きい、投資家が多い。

日本は低金利。将来性がある魅力的なビジネス。

資産運用ビジネス

投資家からお金を集め、運用のプロが株式に投資して配当を渡す。

カストディ機能もある。信託銀行がお金を集めるが、それを管理する金融機関が必要。

日本カストディ、マスタートラスト銀行など

4. 儲かるビジネス

Bank of New York Mellon、

集めたお金を持っているだけで手数料が入る、また集めた債権を人に貸す。資産運用は儲かるのか? 投資は博打なのか? という疑問が出てくると思います。

日経平均を見ると、年初から14%儲かっている。8月に一日で4000円暴落している日もあり、不安になるかもしれないが長期的にみると収益は上がっています。

ダウ平均株価は、1990年1月を100とすると、2002年には1200、12倍になっている

これを前提に投資していくという感じです。

リーマンショック、コロナショックなどで大きく下がると、持っていて大丈夫か? と不安になって売る人が多いですが、長期視点で運用すると大きな増大が見込める。運用は取れるリスク量と見ながら投資をしていくべき
運用と博打はどう違うのか?

博打:胴元が儲けを取り、残りを分けるというスキームです。

当たった人が儲かるという仕組みになっています。

一方、資産運用は皆さんの資産を運用して増やすという仕組みなので、

GPIFの資産が短期的に値下がりすると、博打だという批判があるが、長期目線に立つと儲かっている。

アメリカと日本の平均をしてみる。S&PというINDEXがある。ダウは50社、S&Pは500社 2000年ごろから
S&Pは7.7倍になっているが、日経平均は2倍程度、アメリカにおいては長期目線に立てば儲かっている。

だからこそ、投資しようという流れになっている。

5. ファンドマネージャーの仕事とは?

非常に地味な仕事。

トヨタ自動車を例にすると、「大きな会社だが、無条件にトヨタの株を買ってもいいのか」と疑問符。EVに弱い、テスラ株を買った方がいいのでは? という声がある。

トヨタがEVに遅れているのか? テスラなど同業他社と比較したときにどうなるのか? という疑問を

アナリストが定量的に分析しつつ、会社に赴いてトヨタから話を聞き、現場の工場、関係会社の受注状況などを見ながら他のアナリストと議論して将来の分析を行う。

そしてトヨタが売りなのか? どれくらい買いなのか? 売り買いのアドバイスなどを作成

朝から売ったり買ったりという世界ではない。

武田薬品とジョンソンエンドジョンソン、JR東日本とユニオンパシフィック、日本マクドナルドと米マクドナルドの比較を行うと、日本株は明らかに低い傾向にある。

ヘッジファンドなどは株を借りてきて売却し、差額を儲けている。

日産株を借りてきて売却し、トヨタ株を買って差額を設ける。

オルタナティブ投資の資産規模はどんどん増えている。PEはオルタナティブの一形態。

株は短期的にはぶれる。長期で持てない投資家がいる。1〜2年で儲けたいという投資家は安定的に伸びていく資産に投資する。

PEファンド:カーライブ、ペインなど

取っている戦略によって少しずつ違う。

VC、バイヤーファンド、アクティビストファンドなどに大別される。

セブン&アイの株をアメリカ人が買う(元々割安かつ円安で安い)

イトーヨーカドーに対して経営の注文をする。

儲からないビジネスを止めよ、配当を上げろ、など

昔は敵対的にやっていたが、今は株主として圧力をかけて経営改善を求める

村上ファンドと阪神電鉄など阪神は阪急に形式的に身売りして圧力回避

日本企業の問題は株式の持ち合いにより経営効率が低いことの例としてブルドックソースは株価が低いのがキャッシュをため込んでいた。外国人投資家が配当を要求、既存の株主の価値を下げて新株を発券し、防衛しようとした。差し止めは認められなかったが、経営効率が低い日本企業の株は海外に狙われやすい。

PEファンドはハゲタカ、反社会的というイメージが強くなっている。最近では敵対的なファンドは少なくなっている。

VC:ベンチャーを分析・投資・支援(ハンズオン)。紙と鉛筆の会社に投資して大きな収益を生む。

ex. ウーバー:数兆ドルの収益

アイデアを会社にしてビジネス化する。

VCに対するベンチャーの不信感が増す。

ex. Facebook:VC に対する不信感を感じ、ハンズオンを拒否、ハンズオフに切り替え。

VC は必要。10 年ごとにベンチャーは収益を生む新たなトレンドを生み出してきた。

80 年代:企業向けコンピューター、90 年代:デスクトップ PC、2000 年代:Facebook や Amazon など、2010 年代:スマホとソフトウェア、2020 年代:AI

VC は次の 10 年何が儲かるか?と考えて投資を行う役割。

AI はこれからの世の中を大きく変える。

ヘルスケア、自動運転などに応用可能

AI はディープラーニングによるものの背景にあるのはマイクロチップであり、半導体

内視鏡検査を画像分析で精度向上

ハイリスクハイリターンだが得られる利益は大きい、銀行や商社などが投資を進めている

バイアウトファンド:不採算ビジネスを買い、リストラや経営者交代、仕入れの見直しなどの経営指導、他の買収先との統合・経営効率向上、上場など

大江戸温泉の買収事例

ペイン:500 億円で大江戸温泉を買収し、1000 億で買収したフランチャイズ化して経営効率向上

KKR による Panasonic のヘルスケア部門の成長、ドイツやアメリカの同業他社と統合させ、PHC に。投資金額の 2 倍で回収

1 回あたり 3〜5 年くらいかかる、これを一人の担当者が同時に複数社担当する、成功報酬も大きい

KKR もペインもアメリカの会社、日本にもそのようなファンドはある

KKR:薄まる政治色(以前は政府高官などを採用していた)

オリオンビールの買収

ベインキャピタルはトロリーアセットにターゲットを絞る:皆が知っているような大型案件

事例:東芝キオクシア

すかいら一くの被買収案件

日本に対する期待は大きい

日立と東芝の差:日立はいらないビジネスを売った:日立工機など

KKR はそれをバリューアップして売却

東芝の半導体部門:外資が入ってきたがる

日本政府としては戦略的に残しておきたい→産業革新機構という官製ファンドを中心として買収

このように、PE ファンドで働く人の報酬は高い

日本企業:高額 of 役員報酬は批判の対象。

そのような文化は PE ファンドにはない。

金融リテラシー

国が音頭を取って金融リテラシーを高めていく、小さい時から基本的な知識を植え付ける。

インサイダー取引(裁判官の事例)など、大きな問題になっている。

金融庁は証券会社から文書を出させ、追跡する→インサイダーはほぼバレる。ペナルティは大きい。

若者にはお金はない。

40 代の人は貯金が 800 万円くらい、住宅ローンなどで場合によっては負債の方が大きい

メッセージ

①若いうちから金融知識を持って運用しよう

②ほとんどの人はお金を使い切れないまま死んでいく、しっかり使おう。

日本人の特性:老後への不安があまりにも大きい、倹約生活。

お金は持っていないといけませんが、使わないといけなくない。

FIRE:40 代で会社を辞めて株の配当を基に生きていく。

金融リテラシーをもって運用しないと実質損することになる。

どれほどの割合を定期預金にし、どれだけを運用するのか?リスク許容度はどれくらいか?

一つの投資先に熱狂しない、分散投資

一度に投資してはいけなくない。

一番いいタイミングを言い当てることは不可能。

定額を少しずつ積み立てる方が最終的には儲かる by リソな銀行

投資したことを忘れる方がよい。

毎日チャートを見るようではいけなくない。

NISA は活用した方がよい。

通常では税金で 2 割取られるが、NISA は非課税。

年金は思ったより安全。税金が半分。事業主が半分掛け金を払ってくれる。

借金して運用するのは NG

若い人:自分に投資することを考えた方がよい。

一か月 5~10 万長期投資するよりは、自己に投資を。

日米の差は相当開いている。留学にお金を使うことがよい。

借金を返すことは一番のリターン。

Q&A

Q: 自分は金融に関係のない業界に就職するが金融は関わるのか?(猪俣)

A:必ず関わる。常にアンテナを張っておくのがよい。商社とPEファンドは接点が多い。

Q. どのような情報が参考になるか？(金本)

A:複数のソースをもつこと、加熱している情報に惑わされない。

Q. PE ファンドはどのように社会貢献するのか？(加藤)

A:証券会社も Engagement:影響力行使

JT に機関投資家は投資しないなど

ガイドラインを示して軍需産業への投資を控えるケースも多い。

ネガティブリスト、ホワイトリストを投資先に示す。

Q. 学生時代の活動が仕事・人生にどのように活きるのか？(角)

A:民法のゼミ。法制度はPE ファンドにとって非常に重要。

途上国はいい加減ではっきりしない。

役人の指示が優先される。

税制、会計がないと成り立たない。

課外活動は男声合唱団をやっていた、人脈として現在活きている。

Q. 日本はDX や AI も遅れている。外国への資金流出、日本の衰退(建内)

日本の勝ち筋は？どのような業種？

A:海外の投資家は日本に来ている。日本に投資したい。

日本は基礎研究力もある、中身の部品は日本がリードしている。

中国に投資できない、円安などの影響もあるが、日本の未来は明るいのではないかな？

手数料が海外に行かないように資産運用業界に人を送ってほしいという政府の意向。

日本は成熟化し、お金を運用しないといけないフェーズに入っている。

米のPE ファンドの25%は製造業。テック企業だけではない。

Q. ウェルスナビ、素人が何を考えずに運用できるが、手数料が高いのでは？そのあたりの見解は？(関)

A:長期分散積み立てというコンセプト、結論から言うといいと思う。

創業者:元経産省、アメリカ人の妻、資産運用を他人任せで自分でやらない人が多い。

資産運用のために時間を取られないサービス、手数料の問題はあるが、ほったらかしでできるという点では非常にいいサービス。

2024 年度秋季修養会実施報告

1. 参加寮生及び講師

| 学年 | 修養会参加 寮生氏名 | | |
|---------------|------------|-----|-------------|
| 1年生 | 三浦龍平 | SDS | 秋田高校 |
| | 山田圭一郎 | 経 | 日本大学第一高等学校 |
| | 本田和士 | 法 | 都立小石川中等教育学校 |
| | 花田智紀 | 法 | 高崎高校 |
| 2年生 | 金本知也 | 社 | 札幌北高校 |
| 3年生 | 平田華英 | 法 | 女子学院高 |
| 5年生(昨年度留学のため) | 猪股梨玖 | 法 | 室蘭栄高校 |
| | 角 颯真 | 商 | 大手前高校 |

- 今年度は8名の参加と過去最大です。特に1年生は法事でやむを得なく欠席の白川君以外全員参加、金本君と「猪股君は昨年に引き続きの参加で、皆さん、お忙しい中、ご参加、有難うございます。
- 講師は、僕と同期の江藤直純ルーテル教会引退牧師と齋藤です。宜しくお願いします。

2. 日程及びプログラム

| | |
|-------------|-------------------------|
| 2024年 | 11月2日（土曜日） |
| | 午前9時半 御殿場東山荘 集合 |
| | 到着後 受付 部屋割り |
| 午前10時 | 開会礼拝 |
| 午前10時半 | 僕にとってのキリスト教（講話） 齋藤金義 |
| | |
| 午前12時まで | |
| 12:00~13:30 | 昼食 休憩 |
| 午後1時半～3時 | 聖書をどう読むか （第1部） |
| | 江藤 直純（昭和46年社会卒） |
| | ルーテル教会引退牧師 |
| 午後3時半～5時 | 聖書をどう読むか （第2部） |
| | 同上 |
| 5:00~6:30 | 入浴休憩 |
| 午後6時半 | 夕食 |
| 夕食後 | 皆での談話 |

- 当日は雨模様でしたが、寮生4名は理事長の車で寮から朝7時出発、残りは金本君の運転のレンタカーで4名がほぼ同時期に出発、途中渋滞があったものの、9時半杉に全員が到着、YMCA 東山荘での会議室において、予定通りのプログラムが実施された。
- 約1日の時間でしたが、午前、午後、そして夕食後の雑談会はビールを飲みながら、午後10時過ぎまで寮生と講師の懇談会がもたれました。
- YMCA 東山荘は、設備も充実しており、部屋もまずまず小綺麗であり、食堂での食事量もお変わり自由で十分、味付けも良く、とても良いと思います。今後、この施設は当会の行事、例えば新入寮生歓迎会合宿で利用したいところです。
- なお、今回は当初佐藤理事も参加予定でしたが、インフルエンザになり、残念ながら佐藤理事は欠席と

なりました。

3. 会計報告

- 今回、利用料は講師の江藤直純牧師の費用を含めて大人9名、合計費用は1泊3食付き(うち2名は翌日の朝食は無し)で合計 118,816 円でした。(別添領収証参照)。
- 一人当たりでは、13千円です。なお、交通費はレンタカー費用を含め参加寮生の負担ですが、一人2千円程度と思われます。勿論、行きは理事長の車で同乗した分は理事長負担でゼロ、帰りも2名(平田さん、山田君)が理事長の車で帰った分、安くなっている。
-

(秋季修養会感想文)

科学的な世界観とキリスト教の伝統的な世界観の共存

山田 圭一郎(経済学部1年)

はじめに

秋修養会の中で最も私の印象に残ったのは、理事長が語ったキリスト教的世界観の捉え方であった。以前の私がそうであったように、科学的な世界観とキリスト教の伝統的な世界観は、しばしば対立するものと見なされる。しかし、これらが必ずしも対立するものではなく、むしろ共存しうるのだと感じたときは目からうろこの思いだった。ここでは、科学的な世界観とキリスト教の伝統的な世界観の特質を明確にし、具体例を挙げながら共存の可能性を論じる。したがってこの文章は感想文とは言えないかもしれないが、私がキリスト教的生活を営む上で非常に重要な問題なのでご容赦願いたい。

科学的な世界観

科学的な世界観は、自然現象や宇宙の構造を理解するために、観察、実験、分析を基盤とした体系的なアプローチを取る。このアプローチは経験主義に基づいており、仮説の立案と検証を通じて知識を得ることを目的としている。科学は常に再検証可能であり、誤りを修正して進化するプロセスである。

主な特徴として、以下の点が挙げられる。

1. **経験と観察:** 実験や観察を通じてデータを収集し、そのデータに基づいて仮説を検証する。
2. **再現性:** 他の研究者が同じ方法で同じ結果を得られることが重要である。
3. **仮説と理論:** 仮説は実験で検証され、理論は広範な観察や実験に基づく総合的な説明である。
4. **客観性:** 個人的な信念や感情から独立した、客観的なデータに基づいて判断する。

科学的な世界観は、物理学におけるニュートンの万有引力の法則やアインシュタインの相対性理論、生物学におけるダーウィンの進化論など、多くの分野で深い洞察を提供してきた。

キリスト教の伝統的な世界観

キリスト教の伝統的な世界観は、聖書の教えと神の存在を中心に据えている。この世界観は、宇宙と生命の起源、人間の存在目的、倫理的な行動指針などに対して宗教的な回答を提供する。キリスト教の教義は、神の創造、原罪、贖罪、復活などを含んでいる。

主な特徴として、以下の点が挙げられる。

1. **神の存在:** すべての創造物は神によって作られたと信じている。
2. **聖書の権威:** 聖書は神の言葉として、信仰と生活の指針を提供する。
3. **道徳と倫理:** 神の教えに基づいた道徳的・倫理的な行動が重視される。
4. **人間の目的:** 人間は神に似せて作られ、神との関係性において生きることを目的としている。

キリスト教は、個々の信者の生活における精神的指導や社会的な支えとなるだけでなく、歴史的に多くの文化や社会に大きな影響を与えてきた。

共存の可能性

科学的な世界観とキリスト教の伝統的な世界観が共存し得る理由は以下の通りである。

1. 異なる問いへの回答

科学と宗教はそれぞれ異なる種類の問いに答える。科学は主に「どのように(How)」、すなわち自然現象のメカニズムやプロセスに焦点を当てる。一方、宗教は「なぜ(Why)」、つまり存在の意味や価値、倫理的な問いに答えることを重視する。

例: 宇宙の起源

- **科学的視点:** ビッグバン理論を通じて、宇宙がどのように始まり、どのように進化してきたかを説明する。
- **宗教的視点:** キリスト教は神が宇宙を創造したという教えを通じて、宇宙の存在意義や目的について語る。

2. 補完的な視点

科学と宗教は、互いに補完し合う視点を提供することができる。科学は物理的世界の理解を深める一方で、宗教は人間の内面的な問いや精神的なニーズに答える。これにより、両者は人間の理解を全体的に豊かにすることができる。

例: 生命の進化

- **科学的視点:** 進化論は、生命がどのように変化し、多様化してきたかを説明する。
- **宗教的視点:** キリスト教は生命の神聖さや人間の使命について、倫理的・精神的な洞察を提供する。

3. 歴史的な共存の例

歴史的に、科学と宗教の共存の例は多く存在する。例えば、イサーク・ニュートンやジョージ・レマイトルなどの著名な科学者は、信仰と科学の探求を両立させてきた。彼らは、自然の法則を解明することで、神の偉大さを理解しようと努めた。ニュートンは、科学的探求を通じて神の秩序と調和を見出そうとした。彼の視点では、宇宙の規則性は神の存在を示すものであり、科学はその証拠を提供する手段とされる。一方、レマイトルはビッグバン理論の提唱者でありながら、カトリック司祭でもあった。彼は科学と宗教が異なる領域で互いに補完し合うものと考え、科学は物理的な宇宙の理解を、宗教はその存在意義を説明するものとした。

4. 現代における対話の深化

現代において、科学と宗教の対話はさらに深化している。多くの科学者や神学者が、両者の関係を探求し、より豊かな理解を追求している。例えば、進化論を受け入れるキリスト教徒や、倫理的な問題について科学的知見を踏まえた宗教的議論が行われている。

例: 環境問題

- **科学的視点:** 気候変動や環境破壊に関するデータとその対策を提供する。
- **宗教的視点:** キリスト教は、創造物の保護や持続可能な生活に対する倫理的責任を説き、科学的知見を実践に生かすための指針を提供する。

結論

科学的な世界観とキリスト教の伝統的な世界観は、互いに補完し合う関係として共存することが可能である。科学は物理的世界の理解を深め、具体的な現象やメカニズムを明らかにする。一方、宗教は存在の意味や倫理的な問いに答え、人間の内面的なニーズや精神的な充足を提供する。歴史的な共存の例や現代における対話の深化を通じて、両者は共に人間の知識と理解を豊かにし続けている。この共存は、異なる領域の問いに対する回答を融合することで、より包括的な世界観を形成する助けとなる。このようにして、科学的な世界観とキリスト教の伝統的な世界観は、相互に補完し合いながら共存することが可能であると考えられる。両者の対話と共存が進むことで、より深い理解と調和が生まれる可能性があるだろう。

日々の生活と聖書を読む楽しみ

花田 智紀(法学部1年)

秋の修養会で、私は江藤牧師による聖書を読む上での前提知識や「罪」についての講義を受けた。この講義は私にとって大きな気づきのきっかけとなった。それまでは主に新約聖書に親しんできたが、私は今回の講義を通じて旧約聖書にも豊かな学びと深い示唆が含まれていることを改めて認識した。

江藤牧師の講義では、聖書を読む際に時代背景や文化的文脈を理解することの重要性が説かれた。例えば、私は旧約聖書に記されている「罪」の概念が単に道徳的な過ちを指すものではなく、神との関係に

おける逸脱として捉えられていることを学んだ。この視点は、これまで私が抱いていた罪のイメージを覆し、私が人間と神の関係性をより深く理解する助けとなった。

時節柄、私は体調を崩すことが多くなり、自室で一人きりの時間が増え、友人との会話が減ってしまった。しかし、私は本を読み自分と向き合う時間が増えた。私は昔から本の虫だったが、修養会以後は私が好きなジャンル以外に聖書に関する本も読むようになった。会の中で紹介された理事長のパワーポイントの中で、私は聖書の「コヘレトの手紙」に強く惹かれるようになった。元々この書物を読むよう知人に勧められていたことを思い出し、私は今回改めて読む機会を得たことに感謝している。コヘレトの手紙の中でも私は序文にある「空」や「無常」を思わせる表現に仏教思想(特に般若心経の内容)との共通点を感じ、宗教や文化を超えた普遍的な人生観に深い感動を覚えた。「すべては風を追うようなもの」という言葉に象徴される儚さの中にも、私は日常を豊かに生きる知恵が示されていると感じる。

また、江藤牧師が講義で紹介された「聖書を実存的に読む」というアプローチも、私の聖書理解に新たな視点を加えてくれた。私は聖書を単に知識としてではなく、自分の体験や価値観に照らし合わせて読むことで、その言葉が持つ力が一層明確になった。私は修養会以後に読んだ「天の下にはすべて時がある」というコヘレトの一節を自分の人生に当てはめて考えることで、結果を急ぐのではなく、今を生きることの大切さに気づくことができた。

今回の修養会を通じて、私は聖書が単なる宗教的な教えにとどまらず、私たちが生き方や人間関係を見つめ直すための深い洞察を提供してくれることを再認識した。私は江藤牧師の講義で得た知識を基に、これからは旧約聖書にも積極的に触れ、その教えを自分の人生に生かしていきたい。私は他者との関わりを通じて、この学びを実践していきたいと考えている。

聖書を通じた新たな学びと自分への問いかけ

本田和士(法学部1年)

今回の秋修養会を通じて、聖書の持つ普遍的なメッセージや現代社会とのつながりについて深く考える機会を得た。これまで、聖書の物語を歴史的な出来事や神話的な話として捉えていたが、その中に私たち自身の生活や価値観に影響を与える多くの教えが含まれていることに気づかされた。

修養会後に個人的に聖書の気になる箇所を読んでいたのだが、その中で特に印象に残ったのは、ヨブ記に記されているヨブの物語である。ヨブは信仰心が厚く、善良な人物として描かれているが、神からの試練として家族や財産を失い、重い病に苦しむことになる。この物語を通じて、私は困難に直面したときの自分自身の姿勢を振り返る機会を得た。ヨブは多くの苦難に耐えながらも、信仰を失わず、最終的には神から大きな祝福を受ける。彼の姿は、現代に生きる私たちに、試練を前にしたときに何を大切にすべきかを問いかけているように感じた。特に、友人たちとの議論を通じて彼が神に対して正直であろうとする姿勢は、どのような状況でも自分の信念を貫くことの重要性を示しているように思う。

また、今回の学びで注目したのは「隣人愛」の教えである。ルカによる福音書に登場する「善きサマリア人」の例え話は、私たちが日常生活の中でどのように他者に接すべきかを鮮やかに描いている。この物語では、旅人が強盗に襲われ道端に倒れている場面において、宗教的指導者や社会的地位のある人物が彼を見て見ぬふりをする一方で、敵対する民族であるサマリア人がその旅人を助ける。この話は、単に「助け合いの重要性」を説くだけでなく、

自分の偏見や先入観を乗り越え、すべての人を隣人として受け入れる心の広さを求めていると感じた。現代社会においても、異なる価値観や背景を持つ人々と接する場面が多い中で、この教えは非常に意義深いものだと考える。

さらに、江藤先生の講義を通じて学んだ「聖書を実存的に読む」という考え方は、私にとって大きな転換点

となった。これまで聖書を知識として受け取ることが多かったが、自分の経験や価値観に照らし合わせて読むことで、物語の持つ意味がより一層深く感じられるようになった。例えば、ヨブや善きサマリア人の物語を自分自身の生活に置き換えて考えたとき、他者への思いやりや困難に立ち向かう勇気を再認識することができた。この視点は、単に聖書を読むだけでなく、自分自身の生き方や人間関係を見つめ直すきっかけにもなると感じている。

また、今回の修養会を通じて、知識を深めるために積極的に調べる姿勢の重要性も実感した。聖書には時代背景や文化的な文脈が含まれており、それらを理解することで物語の持つ意味がさらに明確になる。例えば、善きサマリア人の物語を学ぶ際に、当時のユダヤ人とサマリア人の関係性を知ることで、この話が持つ挑戦的なメッセージの重みをより強く感じることができた。

今回の修養会で得た学びは、聖書が単なる宗教的な教えではなく、人間としての在り方や他者との関係性を深く問い直すための道しるべであることを改めて実感させてくれた。これからは積極的に聖書を読み、その中から得られる教えを自分自身の行動や考え方に取り入れていきたいと思う。そして、周囲の人々との関わりを通じて、その教えをより豊かに生かしていきたいと考えている。

修養会に参加しての感想

三浦龍平(ソーシャルデータサイエンス1年)

今回の秋修養会を通して、聖書に対する見方が大きく変わりました。これまで、聖書に記された「創造」された物語をどのように「現実」に落とし込むのか、その点で悩みを抱えていました。現代に当てはめることが難しいにもかかわらず、未だに世界中で読み続けられている聖書。その理由には何かしら深い意味があるのだらうと疑問に思っていました。

今回の江藤先生のお話は、そのような不安や疑問を解消してくれるものであったと強く感じています。創世記の第3章において、これまで素晴らしい人物だと思っていたダビデ王の倫理から逸脱した一面を知ったとき、驚きを隠せませんでした。兵士の妻と不倫をし、托卵を企んだという事実には衝撃を受けました。豊臣秀吉も同様に、権力者がなぜそのような行為に及ぶのか不思議に思うとともに、歴史は国や時代を超えて繰り返されるものだとして強く感じました。

それと同時に、皆の意見に耳を傾けることで、より実りのある議論となり、現代の私たちの生活にも当てはめられることが多いと感じました。歴史的な人物に見る、人間の普遍的な姿に一種の共感を覚えます。歴史上の人物の話は逸話や想像と捉えられがちですが、そこから見える人間模様を自分たちに当てはめるとするのは非常に新鮮な感覚でした。

その後も、聖書の物語を題材に江藤先生のお話を拝聴していくと、垣間見える人間性だけでなく、現代人がどのように考え、行動すべきかという行動規範も見えてきたように思います。一人の人間としての在り方はもちろん、複数人で行動する際には何を重んじるべきか、といったことまで考えさせられました。特に、人間の行動単位は夫婦であるため、死別した後に再婚することは全く悪いことではないという考えは、これまでの私の常識を覆すものでした。ただし、不倫や、生きている妻がいるにもかかわらず再婚するような形は許されず、それは憎むべきことであるというのは当然のように感じました。聖書にはこのような読み方や楽しみ方があることを知り、大変興味深く思いました。

また、『放蕩息子』の話に関しては、自分にも通じるものがあると感じました。自分の好きなこと、やりたいことをやらせてもらっているにもかかわらず、親への感謝が足りないのではないかと感じました。これは、神にも謝らなければならない事態だと強く思いました。親への感謝の気持ちは絶対に忘れてはならないものであり、その気持ちを失っていた自分がとても情けなく思います。これからは親への感謝を持つだけでなく、しっかりと伝えていきたいと思います。これは寮生に対しても同様で、普段一緒に生活しているからこそ安心感や安らぎを得ているはずで、それにもかかわらず、それを当たり前のように思いすぎて

いたかもしれません。今まで以上に寮生に優しく接し、感謝の言葉も積極的に伝えていきたいと思います。

このように、一つの物語から多くの学びを得ることは非常に新鮮な経験であり、とても楽しく感じました。自分でも積極的に聖書を読み、多くの学びを得たいと思います。その際、江藤先生がおっしゃっていた4つのポイントを大切にしたいと思いました。前述のように、「実存的に読む」ことは非常に重要であり、知識も総動員して読むことを意識したいです。これまで分からないことがあっても曖昧にしてきたことが多かったため、積極的に調べて、有意義な聖書研究を行い、自分の人生に彩りを与えてくれるよう主体的に取り組みたいです。

秋季修養会の感想文

金本 知也(社会学部2年)

先日、静岡県御殿場にあるYMCA山荘で行われた一泊二日の聖書学び合宿に参加しました。この合宿では、聖書を深く学ぶ時間と、同じ志を持つ仲間たちとの交流ができる貴重な機会を得ることができました。特に印象に残ったのは、聖書の中で神が述べる「原罪」についての学びです。それは単にアダムとエバが禁じられた木の実を食べた行為そのものではなく、神に対してアダムが正直に答えず、言い逃れをしたことにある、という解釈です。この話を通じて、神との関係において「真実であること」「誠実に応答すること」がいかに重要かを学ぶことができました。普段の生活でも、自分の言葉や態度が他者との信頼関係にどのように影響を与えるかを考えさせられました。

また、食事も素晴らしい体験の一つでした。給食のようにバランスの取れたメニューが並び、味も美味しく、つい食べ過ぎてしまうほどでした。山荘の清潔で温かみのある雰囲気と相まって、食事の時間はとてもリラックスできるひとときでした。食卓を囲むことで、他の参加者たちとの交流もさらに深まり、まるで大家族のような和やかな空間を楽しむことができました。

夜の飲み会では、牧師の江藤さんが人生について語ってくださり、深い感銘を受けました。江藤さんがどのようにして信仰を持つに至ったのか、またどのような困難を乗り越えてきたのかを率直に語る姿に、信仰がどれほど人を支え、導くものであるかを実感しました。特に、江藤さんが「人生の中で神を信じることによって得られる安心感と希望」を話してくださったとき、自分自身の生活にも新たな視点を与えられたように感じました。このような深い話を聞く機会は日常ではなかなかないため、大変貴重でした。

全体を通して、この合宿は非常に楽しく、有意義なものでした。信仰について学び、日々の生活でどう生かしていくべきかを考えるきっかけがたくさんありました。また、新しい仲間と出会い、互いに励まし合いながら過ごす時間は、心を豊かにするものでした。この合宿で得た学びや経験は、これからの自分の人生にも大きな影響を与えたいと思います。ぜひ来年以降も参加し、さらなる学びと交流を深めていきたいと思っています。

修養会感想文

平田華英(法学部3年)

今回の修養会では、聖書をどう読むか、というテーマの元、江藤先生と共に聖書に向き合う姿勢について学んだ。

創世記の箇所印象的だった箇所がいくつかある。3:9のイエスの「どこにいるのか。」という問いは、イエス自身はアダムの居場所を理解していて尚、彼の応答を期待していた、という点と、「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」の前文部分は、神に対する当て擦りであるという点だ。一人で読んでいたら、疑問にも思わず読み進めていただろうと思う。また罪とは何か、という問いについて、3:16-19では、女は産みの苦しみを、男は労働の苦しみを負うとされているが、女性が働くの

が一般的である現在、女性は労働に加え、妊娠・出産という二重罰を受ける事が課されていると言え、不均衡だと感じた。妊娠・出産という経験をするかどうか女性を選択することができる現代社会と聖書の書かれた時代の価値観の乖離が存在すると感じた。

サムエル記下では、ダビデ王がウリヤの妻バト・シェバを姦淫し、更にウリヤを「激しい戦いの最前線」に赴かせることで彼を死に至らしめるという罪について書かれていた。齊藤理事長のお話が大変印象に残ったのだが、仮にウリヤが自分の家に帰り、バト・シェバと床を共にした場合、姦淫したという事実が明るみに出ることではなかったが、それでも「わたしは主に罪を犯した」という発言をしたという点には、人間の眼からみれば隠すことのできる罪であっても、神の視点から見ると罪は存在するという事になる。ダビデは、人間に対する罪ではなく、神に対して自分の犯した罪を懺悔している事になる。私は、ここに、「お天道様は見ている」という、日本的な価値観と同じものを感じた。たとえ「主」という存在を信じていなかったとしても、罪悪感というものは残るものであるので、「主」という存在は限りなく自己と接近するものであり自分の罪悪感を少しでも減らす為の、自罰する為の対象なのではないだろうか。犯罪を犯した際も、相手方に対する罪の意識とは別に、加害者となってしまった自己に対する自罰感情が、主に対して懺悔することで、緩和されるのでは無いだろうか。袴田事件のお話が導入部で紹介されたが、関連して、刑務所で教誨師の方が雇われているのも、罪の意識を喚起するあるいは、緩和する役割がある為だと考えた。

聖書では原罪という概念が存在するが、どうしてそこまで人間存在を罰する必要があるのか不思議に思った。例えば、引きこもりという現象が存在するが、彼らは何ら刑法上の罪を犯しているわけではない。むしろ非常に自罰的な面もある。相模原事件の、障害者には生きている価値がないという思想と通ずるものを感じた。

秋季修養会感想文

猪股梨玖(法学部 4 年)

私は秋季修養会に参加するのは今年が 2 回目でしたが、今回は日程が短かった代わりに集中的にキリスト教について学ぶことができました。齊藤理事長と江藤さんの 2 人からそれぞれの観点でキリスト教について話して下さったため、普段の聖書研究会には無い視点からキリスト教を見つめ直すことができ、勉強になるとともに刺激を受けました。

今回の講話の中で、特に印象に残った点は旧約聖書・新約聖書ともに人々が犯した信仰上の失敗を多くまとめたものであることと、その中でも失敗をした際に、人々がどのように反応するかと言う点が重要であるということです。講話で取り上げられていたのは創世記の 1 から 3 章のアダムとイブが知恵の実を食べてしまい、さらに神に対して言い訳をしてしまった箇所と、サムエル記下 11 章から 12 章のダビデが兵士の妻を寝取り、さらに、最終的にその兵士を殺してしまった箇所、そしてルカによる福音書 15 章の放蕩息子が天に対しても、父に対しても謝罪をした箇所です。アダムやイブは神に対して言い訳をしてしまったことも大きな罪と見做され神の怒りを買いましたが、残りの二つは主に罪を犯したことを謝罪しており、それをもって主や父が許したという違いがあります。創世記も放蕩息子の例えも、これまでに読んだ事はありませんでしたが、この視点から考えた事はなかったことから、主に対して自分の罪を認め、正直に謝ることの重要性を学びました。また今回の講話では触れる事はありませんでしたが、個人的に気になった点が、新約聖書のイエスの処刑のシーンです。イエスは「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか？」と叫び、聖書研究会ではこの箇所は人間としてのイエスが信仰に躓きかける箇所と紹介されておりそれまで完璧に信仰を守っており、人間でありながらも神であるイエスが失敗を犯したことに違和感を覚えていました。今回の講話を通じて、この箇所は人間としてのイエスが信仰につまずく場面で、これまで神であり人間である存在として生きていたイエスですら信仰につまずいたのだと言う意味の重さとそれに象徴される人間の弱さを理解することができました。一方で、聖書にはその後イエスが悔い改めた記述はありませんが、あくまで記述がないだけで最後の最後に悔い改めて果てたのかが気になりました。

今回の秋季修養会を行った御殿場の YMCA 東山荘は自然が豊かで施設も綺麗であり、暖炉があるなどとてもリラックスのできる環境が整っており、1泊だけでしたが、日常から離れることができ、心をリフレッシュさせることができました。私が個人的に感じている秋季修養会の1つの魅力は、京都や山梨、今回の御殿場など、普段過ごす東京からは一旦離れて、キリスト教や仏教等について考えながら、心を休ませることができることです。大学生活は、もちろん文系大学生であることもあり、特別忙しいわけではありませんが、明確な休みと言うものがありません。そのため、意識的に完全に心を休める機会がなかなかないことが私の大学5年間を通じて感じた大変さです。Z世代はコスパやタイパを重視しており、余裕があまりないのが特徴だと述べられることがありますが、同期の岩崎くんも同様の事を以前言っており、自分もそれに同意します。特に私はリモートワークで、自分の意思で働く時間を決められる仕事をしているため、文字通り「時は金なり」と言う環境で生活しています。こうなると何をするにもその時間を他のことに回した際に得られる効用と比較してしまいがちになり、余暇に時間を使うことが心理的に難しくなったり、精神的に余裕がなくなったりしてしまいます。一橋大生は、自由に過ごせる時間を多く持っていますが、その膨大な時間をどのように過ごすかは、多くの一橋生にとっての重要な命題になっていると思います。どうしても技術の発展や世の中の変化の早さに戸惑い、余裕を失ってしまう場面がありますが、そうした中でもしっかりと自分の時間を大切にし、心に余裕を持つ生活を取り戻すには、秋季修養会のように、一旦日常から、そしてデジタルデバイスから一定の距離を置いてみる事は非常に意義のあることだと今回改めて感じました。改めて、今回の秋季修養会を企画してくださった齋藤理事長と講師を務めてくださいました江藤さんには心より御礼申し上げます。

秋季修養会に参加して思うこと

角颯真(商学部4年)

11月2日から3日にかけて静岡県 YMCA 東山荘にて行われた秋季修養会に参加させていただいた。齋藤金義理事長と江藤直純引退牧師という、一橋Yの大先輩でありなおかつ長年信仰を实践され続けているお二人のお話を伺い、キリスト教について、また人生について多くの気づきを得た。

はじめに、理事長から「キリスト教を考える」というテーマでお話をいただいた。聖書に親しみ、キリスト教により近づく手立ての一つ目が、「自分の面白いと思う箇所から読んでいく」ということである。一人一人問題意識も惹かれる箇所も異なるのだから最初はつまみぐいでも構わないということは、5年目にして未だ聖書の深淵さに圧倒されている自分にとって良い知らせであった。

聖書の章立てについて伺う中で、特に、理事長推薦箇所の一つとして挙げられていた『コヘレトの言葉(伝道者の書)』に衝撃を受けた。古代イスラエル王国第三代王ソロモンが記したとされるこの書は、これが聖書なのかと疑うほどのエッセイか日記と見紛う文体で、私たちが日々感じている人生の虚しさや葛藤について描写している。たとえば、「すべての事は人をうみ疲れさせる、人はこれを言いつくすことができない。目を見ることに飽きる事がなく、耳は聞くことに満足することがない。先にあったことは、また後にもある、先になされた事は、また後にもなされる。日の下には新しいものはない。「見よ、これは新しいものだ」と言われるものがあるか、それはわれわれの前にあった世々に、すでにあったものである。」という記述は、毎年作られる流行に踊らされ、また無限のコンテンツ消費に駆り立てられる現代人の姿と重なる。

しかしながら、著者はそんな日々の中で希望を見つけている。理事長の言葉を借りれば「美味しいご飯を食べて仲間と過ごし、一生を楽しく生きよ」ということである。かのごとき権力を持ち、国王として想像もできないほどの仕事を行ったソロモンが見つけた幸せがこんな日常の中にあったということに、幸せをとかく複雑に考えがちである私は驚かされた。コヘレト(=ソロモン)が「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思

う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。わたしは知った。人間にとって最も幸福なのは喜び楽しんで一生を送ることだ、と。人だれもが飲み食いしその労苦によって満足するのは神の賜物だ、と。」と述べているように、幸せとは今あるもの、与えられたものを神に感謝しながら毎日を過ごすことなのかもしれない。

また、江藤先生の聖書の読み方についてのお話の中では、「視点を変える」「聖書を神の視点で読む」ということが印象に残っている。この話から、私が長く抱いていた創世記におけるヨセフの心理への違和感が解消された。兄弟たちから壮絶ないじめを受けエジプトに売られたヨセフは、その才と神のご加護によってエジプトの長官となる。そんな中イスラエルにおける飢饉によって、父であるヤコブとヨセフの兄弟たちはヨセフを頼りにくるが、なんとヨセフは彼らを抱きしめるのである。自分を排除しようとしてきた彼らに積年の恨みがあるはずなのに、なぜ彼らを受け入れるのか。それこそが、ヨセフが「神の視点」で見えていたからである。この視点でいえば、兄弟たちからいじめにあってエジプトに売られたことですら、ヤコブ一家が将来のイスラエル飢饉の際にも断絶しないよう計らった、神の思し召しと捉えることができるのだ。だからこそヨセフはその運命を受け入れ、兄弟たちの蛮行すらも神の意向として受け入れた。神の視点で見ると、いじめを受けること、エジプトに送られることそれ自体は不幸ではなく、神の長期的な計らいの一部に過ぎない。だからこそ、ヨセフは兄弟たちを許し愛し続けることができたのだ。

私は、この「神の視点」を持つことは人生における挫折にも意味を与えることであると確信している。卑近な例ではあるが、この一年間行っていた就職活動においても、「志望企業の選考落選」は即ち「失敗」「不幸」ではないと学んだ。自分の視点では志望企業への入社が叶わないことは不幸であっても、その先でより自分に合っている選択肢、より長い目で自分を幸福にしてくれる道と出会えることもある。なぜなら、その落選は神様が、その独自のかつ長期的な視点で私たちの良きように計らってくれているからである。

以上が修養会のレポートである。来年から遂に社会人となるが、慣れない日々の中でも、私の座右の書のひとつとなるであろう『コヘレトの言葉』を読みながら、時には「神の視点」を導入して、長い社会人人生を充実させて生きていこうと思う。

OB・寮生合同クリスマス会実報告

下記のとおりクリスマス会が実施されました。

1. 日時 2024年12月7日(土曜日) 午後午前1時半～午後4時半(受付午後1時)
2. 場所 東京都国立市東1-20-12 YMCA 一橋ホール
3. 出席者 寮生、寮母他

| 御氏名 | 所属肩書 |
|--------|----------------|
| 金井 美彦 | 砧教会牧師 |
| 音羽 麻紀子 | ソプラノ歌手 |
| 福田 るり子 | ピアニスト |
| 江尻様 | 東京YMCA |
| 渡辺様 | 東京YMCA(桐朋学園高校) |
| 佐々木信 | 国立教会会員 |
| 齋藤金義 | 理事長 |
| 齋藤恭子 | 理事長 伴侶 |
| 加藤順 | 理事 |
| 佐藤周一 | 理事 |
| 滝澤英一 | 理事 |
| 安藤 誠 | 理事 |
| 二瓶琢也 | 平29経 |
| 橋田 陽平 | 令和5商 |
| 高岡竜成 | 令和6年法 |

第1部 クリスマス礼拝 午後1時半～2時40分

1. 前奏
2. 主の祈り(カトリック典礼聖歌の主の祈り) 別添1
3. 答唱詩編 カトリック典礼聖歌 143番 「豎琴をかなで」 別添2
4. 開会祈祷 司会者 理事長 齋藤金義
5. 聖書拝読 イザヤ書 第53章 朗読 4年生角君(1～6) 猪俣君(7～12)
ルカによる福音書 1章 26～56節 女子寮 高さん(26～38) 女子寮平田さん(39～56)
6. 讃美歌 讃美歌 21-231番 「久しく待ちにし」 別添3
7. 説教「不穏な時代を突き破る」 日本基督教団牧師 金井美彦先生
8. 讃美歌 讃美歌 21-18「心を高くあげよ！」 別添4
8. 祈祷 金井牧師
9. 祝祷
10. 後奏

第2部 クリスマス祝会 午後2時40分～午後4時30分

3. 会費 OB2千円 同伴のご家族ご友人千円
寮生及び同伴の寮生友人 無料
(祝会の中では、クッキーと紅茶のご用意がございます。)
ソプラノ 音羽 麻記子様 ピアノ伴奏者 福田るり子様

一橋大学 YMCA クリスマス礼拝説教

「不穏な時代を突き破る」ルカによる福音書 1章 26-56節

日本基督教団砦教会牧師 金井美彦

一橋大学 YMCA クリスマス礼拝の説教の機会が与えられましたこと、感謝です。一橋大学は私が責任を負っている日本基督教団砦教会の創設者で、昭和期の日本を代表する旧約聖書学者である浅野順一師(1899—1981)の母校である。師はその後東京神学社(現東京神学大学)、エディンバラなどを経て、東京神学大、青山学院大の教師として研究と教育に携わる一方、渋谷にある日本基督教団美竹教会を創立し、長く牧会をされた。美竹を引退してすぐ、改めて信徒の一部から乞われ、世田谷の地に教会を設立することになった。それが砦教会である。1961年のことである。その少し前、やはり世田谷に社会福祉法人泉会を設立、初代の理事長となった。実はその泉会での祈祷会が砦教会の原点である。今、その理事長が齋藤金義さんであり、齋藤さんは浅野先生から洗礼を授かっている。浅野師はいわゆるキリスト教ドグマから自由な、独自の伝道活動を行ったと言われ、時に浅野教と揶揄されるほどユニークな宣教であったという。つまり、浅野師はカリスマ的伝道者であった。そえゆえ、形式的なもの、制度的なもの、権威主義的なものから自由であった。実は私の師木田献一先生が浅野先生の弟子で、やがて浅野先生の後を継いで青学神学科の旧約担当となるが、彼もまた自由な方であり、そもそもキリスト教のドグマの根拠であるケリユグマを捨てたとさえ言ったこともあるほどだ(立教に移ってからのこと)。やがて青山学院大が神学科を閉鎖することになり、木田先生は立教大学に移られたが、キリスト教も聖書もまったく知らず、自堕落な日々を送る学生の私が、木田先生と出会い、旧約を学び、大学で教え、やがて牧師になった。私は言ってみれば浅野先生の孫弟子なのであった。

さて、今日はまずイザヤ書 53章をお読みいただいた。これは旧約聖書の頂点ともいわれる預言である。キリスト教から見て、という留保が必要だが、この預言こそイエス・キリストを指し示す預言であるとされる。ここに登場するいわゆる「苦難の僕(しもべ)」の伝承によれば、この僕が人々の罪を背負って処刑され、そのことによって多くの人々が許されて生き延びたのだという。背景は紀元前530年代、アケメネス朝ペルシア王キュロスがバビロンを無血開城したところ。ただ、歴史的にこの「僕」がだれなのか、そもそも歴史的な人物なのか、虚構なのか、あるいはこの「僕」とは個人ではなく、集団、つまりイスラエル民族を指しているのではないか、などいろいろと問われている。しかし、キリスト教の伝統ではこの「僕」はキリストを指し示す予言である。世の罪を独り担って十字架に掛けられたイエスと、この「苦難の僕」が明らかに重なるからだ。もっとも、私はイエス自

身がこのテキストを知っており、この「僕」の生き方に触発された結果が彼の生涯であろうとも考えている。

今日はかなり思い切った題としたが、イエスの誕生の祝い、クリスマスとは実は牧歌的でも、子どものプレゼントの日でもなく、新たな時代の幕開けであり、したがって、古い世にとっては彼の出現は脅威である。つまりイエスはローマの支配下にあったパレスチナ世界(だけでないが)の苦しみ、差別、貧困に直面するなか、まさにこの世界が罪に溢れた世であることを深く憂い、同時にこの世界とは別の世界の到来、すなわち神の国の到来を宣言し、人々を糾合したのである。つまり、あの時代の突破者なのである。しかし、それは英雄的な者では全くない。彼は世から見捨てられた人々のところに真っ先に行き、彼らと共に飲み食いし、彼らの主体性を喚起させ、つまり世から捨てられたと自他ともに思い込んでいた人々を立ち上がらせ(これが復活ということだ)、同時に、差別や排除を越えた共同体を形成していった。これが神の国の地上での実現である。しかし、圧倒的なカリスマと行動力は当時のユダヤ教と対立するほかなく、彼はやがて抹殺された。しかし、これは暗殺ではなく、公開処刑であったため、その死が後に解釈される。すなわち、あの死は人間の罪を一身に背負った姿であり、さらには、自分たち残された者の、否、すべての人間の罪(まとめれば原罪)を背負って、その罪ごと葬り去った出来事、つまり贖罪の出来事であったとさえ言い始め、ついにこのことを信じて受け入れる者は、すでにこの世での罪を赦され、さらに最後には天国に行ける、救われるのだと主張することになる。これがキリスト教的救済論のあらすじである。イエスから始まったこの世の救いとは実は人間の刷新である。この世とは、客観的に存在するよう見えるが、実はすべて人間の思いから始まっている。その思いがまともなら、この世は良くなるのであり、逆なら悪くなる。つまり世界はわれわれ人間の思いの向きにかかっているのである。

さて、世界全体が急速なグローバル化と市場化の波に洗われ、想像を越えた不平等が広がり、もはやそのことに慣れてしまったのではないかと思う程だ。IT の発達で、一部の人が作ったシステムが世界を自動化し、いろいろなものが遠隔操作でき、戦争さえ事務所に言って PC を操作するだけでよいようになった。今一番危ないのは小型のドローン兵器だという。小さくてレーダーにも捕捉されにくいドローンは深刻な脅威である。ウクライナ戦争、ガザ戦争はこうしたハイテクが前提となり、しかも誰もが映像でリアルタイムに見ることができた、おそらく初めての戦争だろう。

いろいろなものが自動化され、頭だけでなく体も使う必要がない時代が始まっており、それが劇的に進みそうである。生成 AI はその画期をなす。少し前になるが(2020 年頃)、先ごろ保険証と一体化されたマイナンバーカードに学校の成績を紐づける可能性があるを知った。人の学力水準を政府が一元的に管理して、その情報によってその子供にふさわしい教育を受けさせることができるのだという。目の前にいる子供本人ではなく、その子のこれまでの生育情報から始めることで、より客観的でカスタマイズされた教育が可能になり、効率的効果的であるとされる。病歴から学歴、さらに成績までマイナンバーカードに登録され、それに基づいてコントロールされる(これはもはや教育ではない)のが普通になる。そして人間はシステム(といってもそれは支配者のもの、である)に隷属し、ほとんど家畜化され、飼いならされるのだろう。否、もはやかなりの程度現実になっている。

さて、先ほど読んでいただいたルカによる福音書は、実はそうした強力な支配について敏感であった。イエスの誕生はローマ皇帝アウグストゥスの時代の人口調査を背景にしているが、これはもちろん、ローマ帝国の税の徴収のためである。イエスの誕生は私たちが想像するような牧歌的風景ではなく、苛烈な支配に翻弄される貧しい人間の姿を基調としていると言ってよい。ただし、ルカによる福音書の著者は、そうした貧しさや困難な人々の姿を何か非常に恵まれたもの、貴重なもの、そして喜びに満ちたものとして描くのであった。イエスの誕生は実はすでに天使によって予告されていたとされるが、もちろんこれは脚色だろう。しかし、これは地上世界の権威を越える「聖霊」の力によっておこる出来事であり、この世の勢力をものともしない力に満ちているのである。しかも、このイエスの誕生は、先駆者である洗礼者ヨハネの誕生と半年しか違わないとされ、この二人の関係が家系的にも強調されている(ヨハネは祭司の家系、イエスの父ヨセフはダビデの家系)。彼らは要するに古のメシアであるダビデと祭司アロンの家系であるという。こうした権威付けによって、イエスの誕生は、馬小屋であったなど、はた目には憐れむべき惨めな状況であるにもかかわらず、読者には栄えある出来事であるように了解されるのだ。

ところで、メシアとは何か。これは元来、イスラエルの王である。油注がれた者という意味であるが、称号である。彼らは預言者的人間によって指名され、王となる。それは自己犠牲的救済者であり、軍事的指導者であった。しかし、メシアの観念はキリスト教誕生の前夜においてはもはや地上的な人間ではなく、より空想的で観念的な人格である。彼の誕生予告ではマリアが神の聖霊によって身ごもったとされ、イエス自身は初めから神格化されている。ただし、ダビデ王家に属する父ヨセフとは実は血縁関係がないが(聖霊による懐妊である)、しかしヨセフがマリアとの婚姻関係を保持しているため、神のメシアでありながら、ダビデの子(もちろん子孫)としても了解される余地のある、二重のメシアなのであった。このことは、イエスが普遍的なメシア、すなわち天地創造の神の子でありつつ、ダビデの末裔としても了解されるため、普通イスラエルのメシアであるということの意味する。それゆえ、ルカ伝ではひとまず、「神である主が、彼に父ダビデの王座を下さる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」(1 章 32-33 節)と強調され、わたしたち東洋人の、その一番東の日本人にはさっぱりわからない話となる。では、わたしたち 21 世紀の日本の読者はこの物語をどのようにしたら自分の物語にできるのだろうか。それは結局、アナロジー(類比)とシンパシー(共感)によるほかはない。簡単に言えば、今の時代がローマの支配する時代であるかのように、そして自分たちが当時のイスラエルの民の一人であるかのように、あるいは自分がマリアやヨセフであるかのように受け取ることによって可能となるだろう。およそ、物語の感動とは、そこに自らを重ねることによって起こるが、ルカによる福音書は単なるファンタジーではなく、一応「歴史的」な物語を書いているので、私たちの多くはその情景と登場人物の活動と言葉の世界に入り込むことができる。そして、彼らの感情を想像し、自分のものとできる。その結果、この出来事の本質に触れることができる。ではその本質とは何か。

それはまず、マリアの恐れとその超克である。彼女はあり得ない出来事に翻弄される。聖霊による身ごもりの背後には、もちろん婚外子を身ごもったことへの恐れと悲惨な未来への不安がある。しかし、それをはねのける「天使の言葉」によって、マリアはこの世の法や慣習への恐れを越えていく。これはマリアにとって神の啓示であり、それはこの世界の秩序からの解放である。私たちはこのことを通して、自分たちの恐れや不安をマリアと共に越えていく(たとえ一時でも)。

次に、マリアとエリザベトとの交流である。お互いに奇跡的な妊娠をし、その友情によって互いを励ます。私たちもまた、同じ境遇にある者たちが連帯することによって(最近の当事者主権と当事者の自助運動を想起せよ)、互いを励まし、高め、共に困難を乗り越えていくことができる。では誕生物語はどうだろうか(今日は長くなるので割愛したが)。夫婦はローマ帝国のアウグストゥスの勅令に翻弄されている。そしてなんと、マリアは旅の途中で産気づいてしまう。これはもちろん、危機的状況であるように見えるが、他方喜びの前触れである。それはやがてメシアとなるはずの子どもの誕生の前触れなのだ。私たちはだれしも、この困難な状況に同情する。そして実はいかなる母も、多かれ少なかれ、危機的状況を共有してきたことを思い起こすのである。誕生とはこの世界との関わりの出発点であると同時に、その失敗はまったく反対にこの世とかかわりが一つなくなってしまうことなのであり、子生みとは一切の「始まり」と、その逆の「始まらない」ということの境である。それゆえ、マリアを襲うイエスの誕生時の困難、不安、恐れは、あらゆる母親のそれらに重なる。そして彼女は確かに子を産み、しかもそこは馬小屋であり、その子は飼い葉桶に寝かされた。ルカ伝を通して、この情景に我々は、哀れさではなく、希望を見る。確かに生まれたのである。この世界に関わり始めたのである。それはあらゆる母となる女性にとって、救いでさえあるだろう(ちなみに、あのウクライナの破壊された町々でも、あのガザでも、子は生まれた)。

イエスの誕生はもちろん、キリスト教において特権的な出来事である。しかし、この出来事はあらゆる人間にとって新たな始まり(再生あるいは復活)の象徴でもある。そして実はあらゆる人間は本来、神の栄光を帯びてこの世界にやってきたのである。それゆえ、いかなる赤ちゃんも、その周囲にいる人々の平和を実現する次代のメシアとなりうる。小さな命は、すべからずその可能性を秘めているのである。

イエスは、2000 年前のユダヤに現れ、世の転換を呼び起こした。それは頹落した時代、苦しみの蔓延する時代、富に支配された時代を、その最も困難な場所(すなわちイエスの故郷ガリラヤ)を出発点として突破しようとした。その迫力は今もなお、人の心を揺るがし、困難な時代を乗り越える力となるはずである。

(本稿は 2024 年 12 月 7 日、YMCA 一橋ホールで行われたのクリスマス礼拝説教です。)

理事会だより

1. 評議員、理事、監事について

- 2024年度の評議員及び理事、監事は以下のとおりです。評議員では、堀地史郎及び岩谷滋雄の両評議員が任期途中ですが、一身上のご都合で辞任され、鈴木望評議員がご帰天されました。これまでの評議員としてのご奉仕とお働きに感謝いたしたい。特に堀地史郎評議員は卒寿を超えてのご奉仕に感謝申し上げます。
- なお、理事は特に変更はありません。監事の吉田護氏が一身上の都合により、退任しました。

| 任期 2026年の評議員会まで | | 卒業年次 |
|-----------------|--|-------|
| 寺師並夫 | | 昭和49年 |
| 金子衛 | | 昭和58年 |
| 川添 淳 | | 昭和61年 |
| 青崎 敏彦 | | 昭和52年 |
| 大溝 日出夫 | | 平成元年 |
| 崔 勇 | | 平成2年 |

| 現在の理事及び監事 | | 卒業年次 |
|-----------|------|-----------|
| 齋藤金義 | 代表理事 | 昭和46年経 |
| 加藤 順 | 理事 | 昭和47年社 |
| 関 和義 | 理事 | 昭和50年法 |
| 佐藤 周一 | 理事 | 昭和54年法 |
| 滝澤 英一 | 理事 | 昭和60年法 |
| 鈴木 宗徳 | 理事 | 平成3年社、5年院 |
| 安藤 誠 | 理事 | 平成22年経 |
| 宮城 康智 | 理事 | 平成24年法 |
| 高橋 知史 | 監事 | 昭和57年 社会 |

2. 男子寮、女子寮の運営状況について

- 2023年度は、男子寮の新1年生がゼロの状態、年間を通じて、空室が3部屋あり、2024年度の新入寮生募集が懸念されましたが、2024年度は1年生が5名入寮し、大学院生の入寮などにより、年度当初から満室、16名での運営となりました。
- 女子寮は定員5名に対して、2024年度は3名と2室が空き部屋となっており、この空き室を満室にすることが課題です。現在、3年生が3名ですが、1名古川さんがケニアでの奉仕活動で休学中であり、来年帰国後は4名になることが期待されており、1年生を1名入寮させることが課題です。

3. 2024年度の行事等について

- 2024年6月に定時評議員会、9月にはインドネシア海外研修旅行に寮生9名が参加、10月に寮祭を開催し、評議員の崔勇氏が講演を行いました。11月にはYMCA 東山荘において、江藤直純牧師を講師に、秋季修養会を実施、12月にはクリスマス会を予定。

| 学年 | 寮生氏名 | 役職 | 学部 | 出身高校 |
|-----|--------|------------|------|--------------------|
| 1年次 | 三浦龍平 | 雑務(休学中) | SDS | 秋田高校 |
| | 山田圭一郎 | 雑務 | 経 | 日本大学第一高等学校 |
| | 白川優太 | 雑務 | 経 | 宇都宮高校 |
| | 本田和士 | 雑務 | 法 | 都立小石川中等教育学校 |
| | 花田智紀 | 雑務 | 法 | 高崎高校 |
| 2年次 | 高天愛 | 女子寮生 | 法 | 中国・東北育才外国語学校(NEYC) |
| 3年次 | 吉田元喜 | 前設備 | 経 | 日比谷高校 |
| | 見定和樹 | 寮長 | 経 | 小松高校 |
| | 金本知也 | 設備 | 社 | 札幌北高校 |
| | 高瀬ひなた | 女子寮生(寮長) | 社 | 県立千葉高校 |
| | 古川こころ | 女子寮生(一年退寮) | 社 | 市原中央高校 |
| | 平田華英 | 女子寮生(副寮長) | 法 | 女子学院高 |
| 4年次 | 吉田翔 | 監事(前設備) | 法 | 市川高校 |
| | 樋口 祐熙 | 監事(前寮長) | 社 | 灘高校 |
| | 松尾 圭祐 | 監事(前会計) | 法 | 東筑高校 |
| | 北川 諒 | 広報 | 経 | 都立西高校 |
| 5年次 | 猪股梨玖 | 監事 | 法 | 室蘭栄高校 |
| | 角 颯真 | 監事(前広報) | 商 | 大手前高校 |
| | 石井直樹 | 会計 | 法 | 高槻高校 |
| | 加藤弘人※1 | 雑務 | 院生 経 | 膳所高校 |

(注)2024年10月に4年生石井直樹君が退寮し、経済学部2年生金賢君が11月に入寮しました。

3. 金橋社への土地賃貸事業の開始

- 長年の懸案であった上記については、建築確認許可が今年9月に承認されたことから、工事が開始、9月から毎月地代10万円が支払われ、当会の財務状況には大きな貢献となっています。保証金230万円も受取済みです。
- 寮舎の西側に約80坪、2階建て、2LDKが4室建築される見込みであり、この12月完成予定。
-

(文責: 齋藤金義)

編集後記1

経済学部 4 年 北川 諒

スウェーデンのストックホルム経済大学に留学中の北川です。留学に際して、寮生・OB の皆様にご理解とご協力をいただいていることに感謝いたします。先日、学期の合間の短い休みを利用して、スウェーデン北部のラプラントと呼ばれる地域で旅行をしてきました。その際、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、ロシア北部コラ半島にまたがる地域に居住している先住民族のサーミ人の方から彼らの歴史に関してのお話を聞く機会に恵まれました。サーミ人と思われる記述は、最も早いものでは紀元 1 世紀に残されています。しかし、その後は 13 世紀になるまで彼らに関する記述はなく、人々の生活に関して全く手掛かりがないそうです。サーミのガイドの方は、「残念ながら我々の祖先は石に我々の歴史を刻んでこなかった。だから我々の歴史はよくわからないことが多い」と述べていました。

我々、一橋大学基督教青年会も大先輩方のご尽力によって 140 年近い歴史を紡いできました。大変なことだと思います。しかし、その先輩方が学生時代の日々になにを考え、なにを行い、なにに悩んだのかを知る手掛かりは多くはありません。そのため、毎年発行される「会報」が寮生にとっては過去を辿るための貴重な情報源となります。時代の変化とともに情報伝達・通信の媒体は変遷してきました。現代では、パソコンをひらけば、手元のスマホをひらけば全世界に対してさえも発信することができます。けれども、それらは 100 年後の未来にも残っているのでしょうか。100 年後の誰かが、100 年前の寮生がその時なにを考え、なにを行い、なにに悩んでいたのかを知ることができるのでしょうか。できないと思います。だからこそ、形ある紙という媒体で残す価値があります。よって我々寮生は、未来からの目も意識して「会報」を記していくべきだと思うのです。2024 年を生きる我々が、YMCA 寮の過去の先輩方の YMCA 寮日誌を繰るように、将来の寮生も遙か昔の寮生に想いを馳せることがあるでしょう。

2024 年の YMCA 一橋寮の寮生の日々や思考を知れることが、将来の寮生が YMCA 一橋寮とはどのような存在であり、どうあるべきなのかを考えることにつながるのだと思います。

今年度の会報も、寮生が寮内外での生活を通じて考え、行い、悩んだことを記してくれました。会報の発行に際し、毎年ご尽力いただいている齋藤金義理事長をはじめとした OB の皆様方に感謝申し上げるとともに、一橋基督教青年会の一員として、2024 年度の会報の編集作業に携われたことの喜びをここに記して、私の編集後記とさせていただきます。

編集後記 2

理事長 齋藤金義

前任の山本通編集人の後を引き継ぎ、臨時で編集人を兼務しておりますが、上記北川君の編集後記で言い尽くされておりますので、私からの追記は簡略し記載させていただきます。今回は寮生中心の寄稿になりました。OB への原稿依頼が殆どできておらず、これは編集人の怠慢であり、お許しいただきたいと存じます。OB への原稿依頼は早い段階で行わないと、なかなか原稿が集まりません。次回の第 77 号では、幅広く OB の編集幹事を集い、OB からの原稿を多く致したく存じます。第 76 号の編集人として、反省を込めての弁です。

一橋大学基督教青年会会報 第76号

2024年12月20日

公益財団法人 一橋大学基督教青年会

186-0002東京都国立市東1-20-12
YMCA一橋寮

042-849-8108

<http://www.hitotsubashiyymca.or.jp/index.html>

三菱UFJ銀行本店
普通預金 0868291
普通預金 0680004

00100-2-547511

MUFG BANK, LTD. HEAD OFFICE SWIFT CODE: BOTKJPJT
868291
SAVING ACCOUNT
(100-8388) MARUNOUCHI, CHIYODA-KU,
HIGASHI 1-20-12, KUNITACHI-SHI TOKYO JAPAN

公益財団法人 一橋大学基督教青年会

理事長 齋藤金義

北川 諒・齋藤金義

株式会社 平河工業社

会報電子版は当会HP、情報公開からkaiho-takiura\$のパスワードでお読みになれます。